（4）上古川（延命地蔵）遺跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 137
Ⅱ　調査の方法と経過 137
Ⅲ　発見された遺構と遺物 137
　1. 基本層位 137
　2. 遺構 139
　3. 出土遺物 140
Ⅳ　ま　と　め 145

調 査 要 項

遺　跡　名：上古川遺跡（延命地蔵遺跡を変更）
遺 跡 記 号：ＦＪ（宮城県遺跡地名表登載番号：10291）
遺跡所在地：宮城県仙台市中田町字上古川
調 査 面 積：約 700m^2（発掘面積 196m^2）
調 査 期 間：昭和 53 年 11 月 20 日～12 月 11 日
調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課
　　佐々木安彦　千葉宗久　手塚　均　熊谷幹男

Ⅰ　遺跡の位置と環境

上古川遺跡は、国鉄南仙台駅の北北西約500mの地点、仙台市中田町字上古川に所在する。

宮城県の西には奥羽山脈が南北に走り、その東麓に沿って陸前丘陵が広がっている。この陸前丘陵から派生して蕃山丘陵、青葉山丘陵、高館丘陵等にいくつかの丘陵が延びている。奥羽山脈に源を発した名取川は、蕃山丘陵や高館丘陵を開析して東流し、両岸に低地を形成している。この低地の一つ名取低地は、名取川の右岸にあり、随所に旧河道が認められ、それに沿って旧自然堤防、後背湿地列も認められる。本遺跡は、現名取川河道の南側約約200mの自然堤防上に水田面と遺跡の比高差は約1.9mである。

本遺跡周辺には数多くの遺跡が分布している。縄文時代には、今熊野遺跡（名取市）（宮城県教委：1973）、金剛寺貝塚（名取市）（後藤：1960他）等の遺跡が高館丘陵の東端部を中心に立地している。弥生時代になると、沖積平野の微高地への進出が目立ち、さらに古墳～奈良・平安時代になると、本遺跡周辺一帯に栗遺跡（仙台市）（仙台市教委：1979）・清水遺跡（名取市）（宮城県教委：1976）等の集落が形成されてくる。このように本遺跡は、数多くの遺跡が縄文時代以降連綿として分布する地域に形成されている。

Ⅱ　調　査　の　経　過

調査は東北新幹線の本線敷にかかる約700m^{2}を対象に11月20日に開始し、約196m^{2}を発掘した。調査区は、遺構が高塚古墳であるという前提から、仮原点ＡとＢ、仮原点ＣとＤを結んで墳頂部を通る十字ベルトを設定した。十字ベルトの北東部をＡ地区、時計回りで順にＢ、Ｃ、Ｄ地区と名を付し、全体の表土を剥離した。その段階で、高塚古墳に伴う外表施設は確認できなかった。

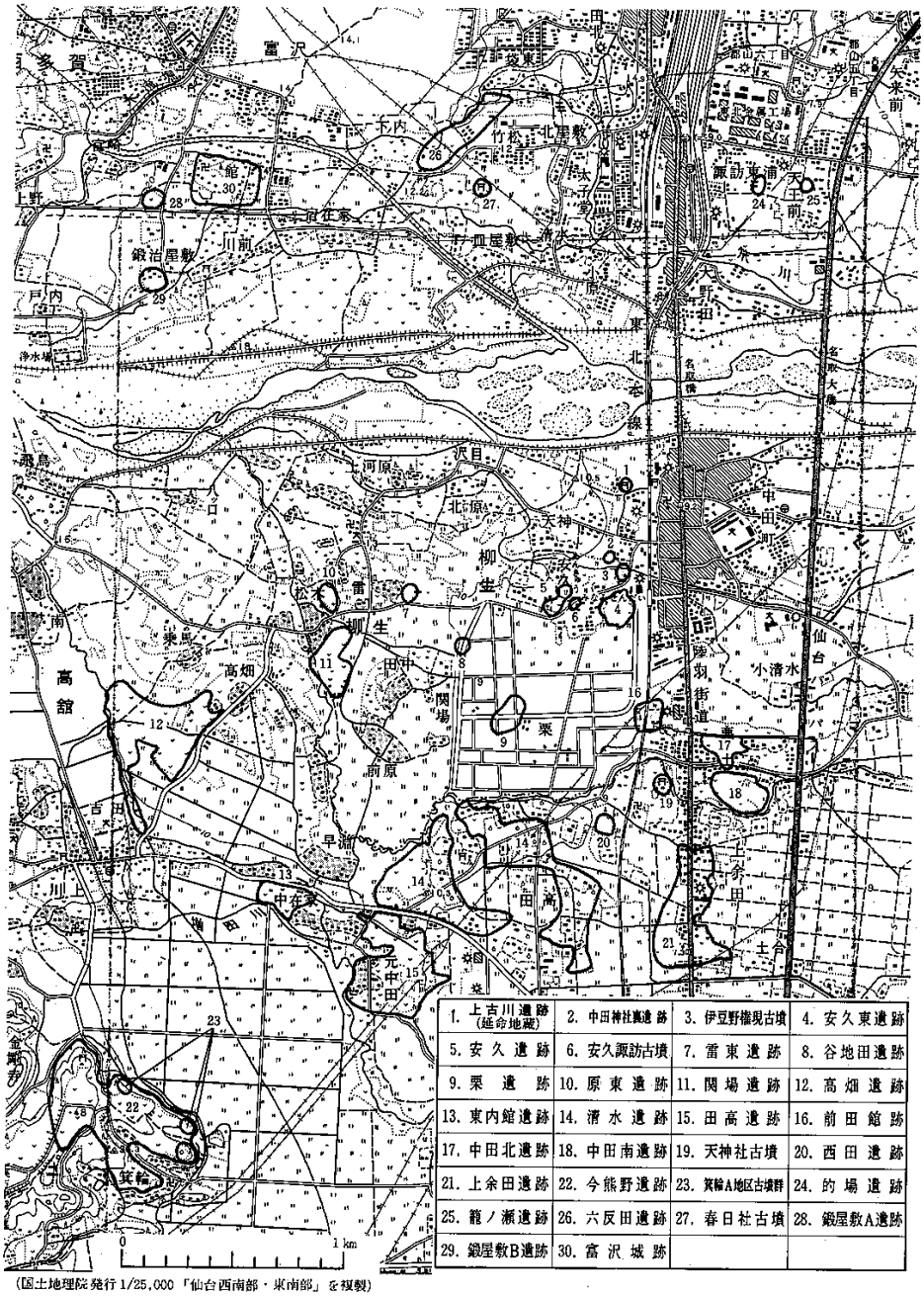
検出された遺構については、平板測量により$^1/_{40}$の平面図を、基本層位と遺構については$^1/_{20}$の断面図を作成した。なお、事前に地形測量を行ない、$^1/_{100}$の地形図を作成している。

調査が終了したのは12月11日である。

Ⅲ　発見された遺構と遺物

1. 基本層位

調査の結果、堆積土は基本的に1層確認された。これは表土で褐色（10ＹＲ$^4/_6$）砂層である。層の厚さは20～40㎝で、褐色（10ＹＲ$^4/_4$）砂質シルトや礫を含んでいる。石仏、石碑、土器、古銭が出土している。



1. 上古川遺跡（延命地蔵）	2. 中田神社裏遺跡	3. 伊豆野権現古墳	4. 安久東遺跡
5. 安久遺跡	6. 安久諏訪古墳	7. 雷東遺跡	8. 谷地田遺跡
9. 栗遺跡	10. 原東遺跡	11. 関場遺跡	12. 高畑遺跡
13. 東内館遺跡	14. 清水遺跡	15. 田高遺跡	16. 前田館跡
17. 中田北遺跡	18. 中田南遺跡	19. 天神社古墳	20. 西田遺跡
21. 上余田遺跡	22. 今熊野遺跡	23. 箕輪A地区古墳群	24. 的場遺跡
25. 籠ノ瀬遺跡	26. 六反田遺跡	27. 春日社古墳	28. 鍛屋敷A遺跡
29. 鍛屋敷B遺跡	30. 富沢城跡		

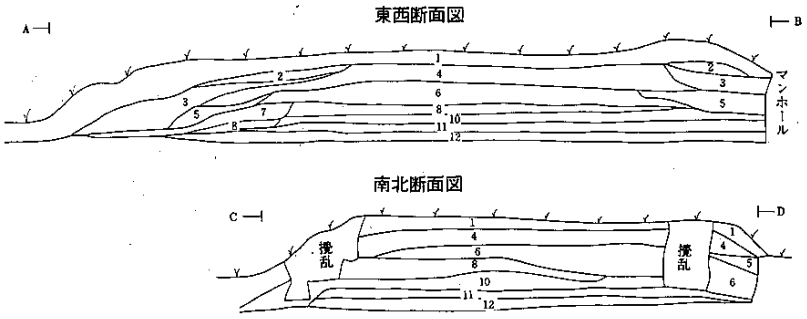
（国土地理院発行 1/25,000「仙台西南部・東南部」を複製）

第１図　上古川（延命地蔵）遺跡と周辺の遺跡

2. 遺構

表土を除去した結果、塚が検出された。塚の規模および平面形は、長軸約16m、短軸約11mの四隅が丸味をもった長方形で高さは約1.6mである。

封土をさらに十字ベルトにそって断ちわった結果、旧表土を塚の基底部としてその上に土を盛っていることが明らかになった。盛土は大きく11層に分けられる。Ⅰ層は褐色砂質シルト層である。厚さ約20cmで、塚の東側と西側の一部に盛られている。Ⅱ層は褐色砂質シルト層であるが、Ⅰ層よりやや暗い色である。厚さ約40～60cmで塚の西側面と東側の一部に盛られている。Ⅲ層は褐色砂質シルト層であるが、Ⅱ層よりやや暗い色である。厚さ約40cmでほぼ水平に盛られている。Ⅳ層はオリーブ褐色砂質で、シルトを含んでいる。北側の一部を除く塚の側面に盛られている。Ⅴ層はオリーブ褐色シルト質砂層で、Ⅳ層の砂をやや含む。厚さ約30～60cmで、ほぼ水平に盛られている。Ⅵ層はオリーブ褐色シルト質砂層で、Ⅴ層よりやや粒子があらい。厚さ約20～40cmで、塚の西側の一部に盛られている。Ⅷ層はオリーブ褐色砂層である。厚さ約20～40cmで、ほぼ水平に盛られている。Ⅷ層はオリーブ褐色シルト質砂層で、Ⅵ層よりやや砂が多く、シルト質粘土や炭化物を含む。塚の西側の一部に盛られている。Ⅹ層はオリーブ褐色砂層である。厚さ約20～40cmで、ほぼ水平に盛られている。Ⅹ層はオリーブ褐色砂層で、Ⅸ層よりやや粒子がこまかい。厚さは約20cmで、ほぼ水平に盛られている。Ⅸは褐色シルト質砂層である。厚さ約20～30cmで、ほぼ水平に盛られている。



層の名称	層No.	土色	土性	混入物・その他
表土	1	褐色(10YR5/3)	砂	砂質シルト(10YR5/4)大礫を含む。
盛土Ⅰ層	2	褐色(10YR5/3)	砂質シルト	
盛土Ⅱ層	3	褐色(10YR5/3)	砂質シルト	盛土Ⅰ層よりやや暗い。
盛土Ⅲ層	4	褐色(10YR5/3)	砂質シルト	盛土Ⅱ層よりやや暗い。
盛土Ⅳ層	5	オリーブ褐色(2.5Y5/4)	砂	シルトを含む。
盛土Ⅴ層	6	オリーブ褐色(2.5Y5/4)	シルト質砂	盛土Ⅳ層の砂をやや含む。
盛土Ⅵ層	7	オリーブ褐色(2.5Y5/4)	シルト質砂	盛土Ⅴ層よりやや粒子があらい。
盛土Ⅶ層	8	オリーブ褐色(2.5Y5/4)	砂	
盛土Ⅷ層	9	オリーブ褐色(2.5Y5/4)	シルト質砂	盛土Ⅶ層よりやや砂が多い。炭化物、シルト質粘土(10YR5/4)を含む。
盛土Ⅸ層	10	オリーブ褐色(2.5Y5/4)	砂	
盛土Ⅹ層	11	オリーブ褐色(2.5Y5/4)	砂	盛土Ⅸ層よりやや粒子がこまかい。
盛土Ⅺ層	12	褐色(10YR5/3)	シルト質砂	

第２図　断　　面　　図

3. 出土遺物

表土からは石仏、石碑、土器、古銭が出土している。なお、盛土内からは遺物は全く出土していない。

石仏（第4図1・2・3、図版9－1・2・3）

地蔵菩薩像が3体出土している。年号は3体とも確認でき、「享保九年」（1724）「元文四年」（1739）・「明和元年」（1764）につくられたものである。享保九年の地蔵菩薩像（第4図1）は、高さ31cm、幅17cm、厚さ9cmの自然石に線刻されたものである。銘文は地蔵の右に「享保九天」、左に「十月廿五日□」とある。元文四年の地蔵菩薩像（第4図2）は、高さ38cm、幅21cm、厚さ12cmの自然石に舟形光背を彫り込んで地蔵を浮き出している。銘文は、地蔵の右に「元文四年」、左に「三月廿四日」とある。明和元年の地蔵菩薩像（第4図3）は、高さ40cm、幅24cm、厚さ15cmの自然石に舟形光背を彫り込んで地蔵を浮き出している。銘文は、地蔵の右に「明和元天」、左に「十二月廿五日」とある。

石碑（第4図4、図版9－4）

馬頭観世音碑が1点出土している。大きさが高さ35cm、幅25cm、厚さ16cmの自然石に銘が入っている。銘文は中央に「馬頭観世音」、その左に「施主壱岐兵作」とある。製作年代は入っていない。

土器（土器観察表①　②）

土器は124点出土しており、そのうち燈明皿が7点、素焼の皿が117点である。土器の器面調整は内外面ともロクロ調整で、底面には回転糸切り痕を残すものがほとんどである。釉については、燈明皿のみ施されている。また穿孔については、燈明皿に1点、素焼の皿に52点認められる。

(1) 燈明皿（第5図1・2・3、図版9－5・6・7）

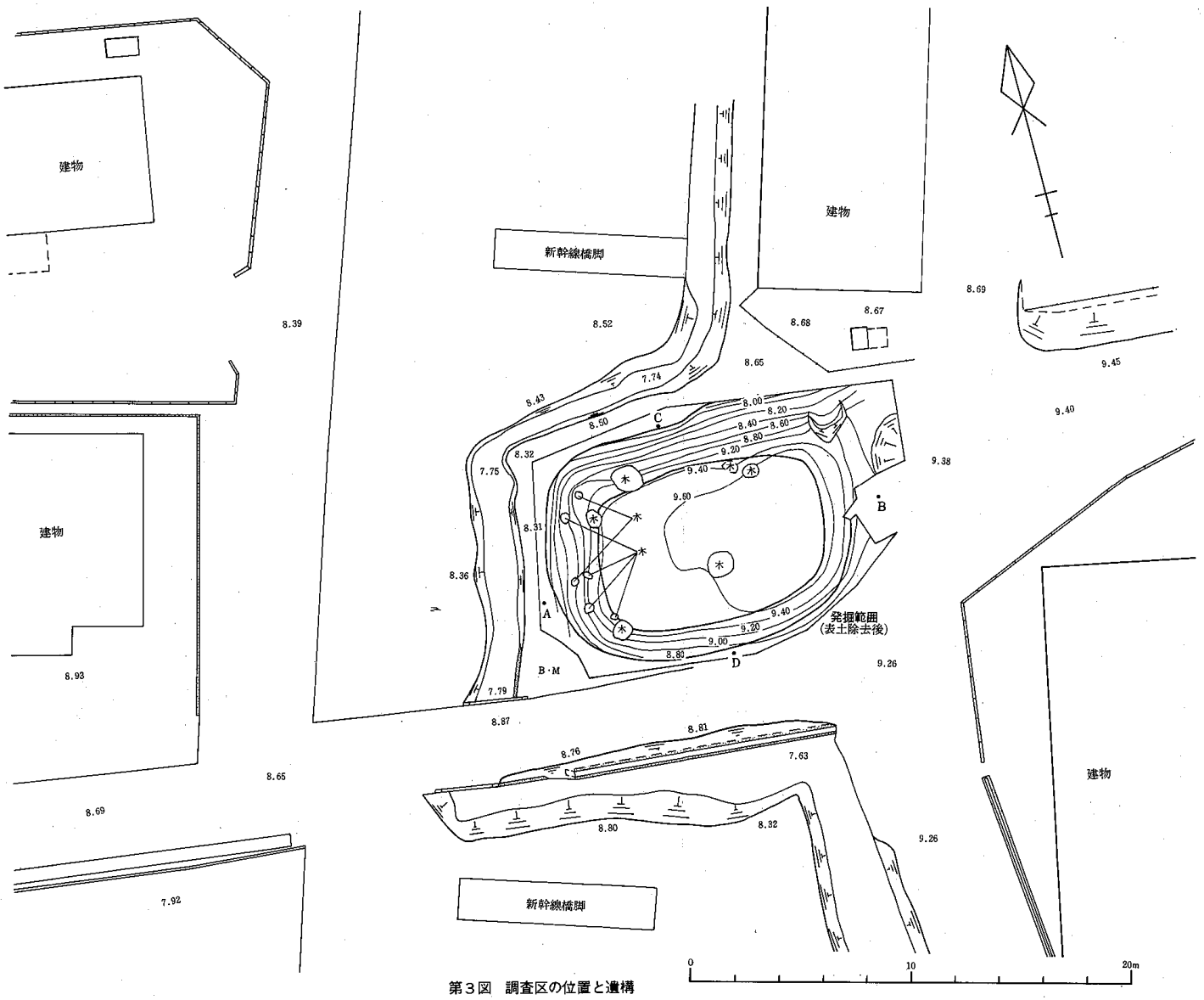
完形が3点、破片が4点出土している。大きさは、口径が約5.7cm、器高が約1.6cmであり、底部内面の中央に芯立ての突出部がある。焼成は良好で橙色をおびているが、第5図3は特に焼成が良好で灰色をおびている。釉は第5図2が赤褐色で、他橙色をおびている。

第5図1は焼成後内面から穿孔されており、他の完形2点には穿孔が認められない。

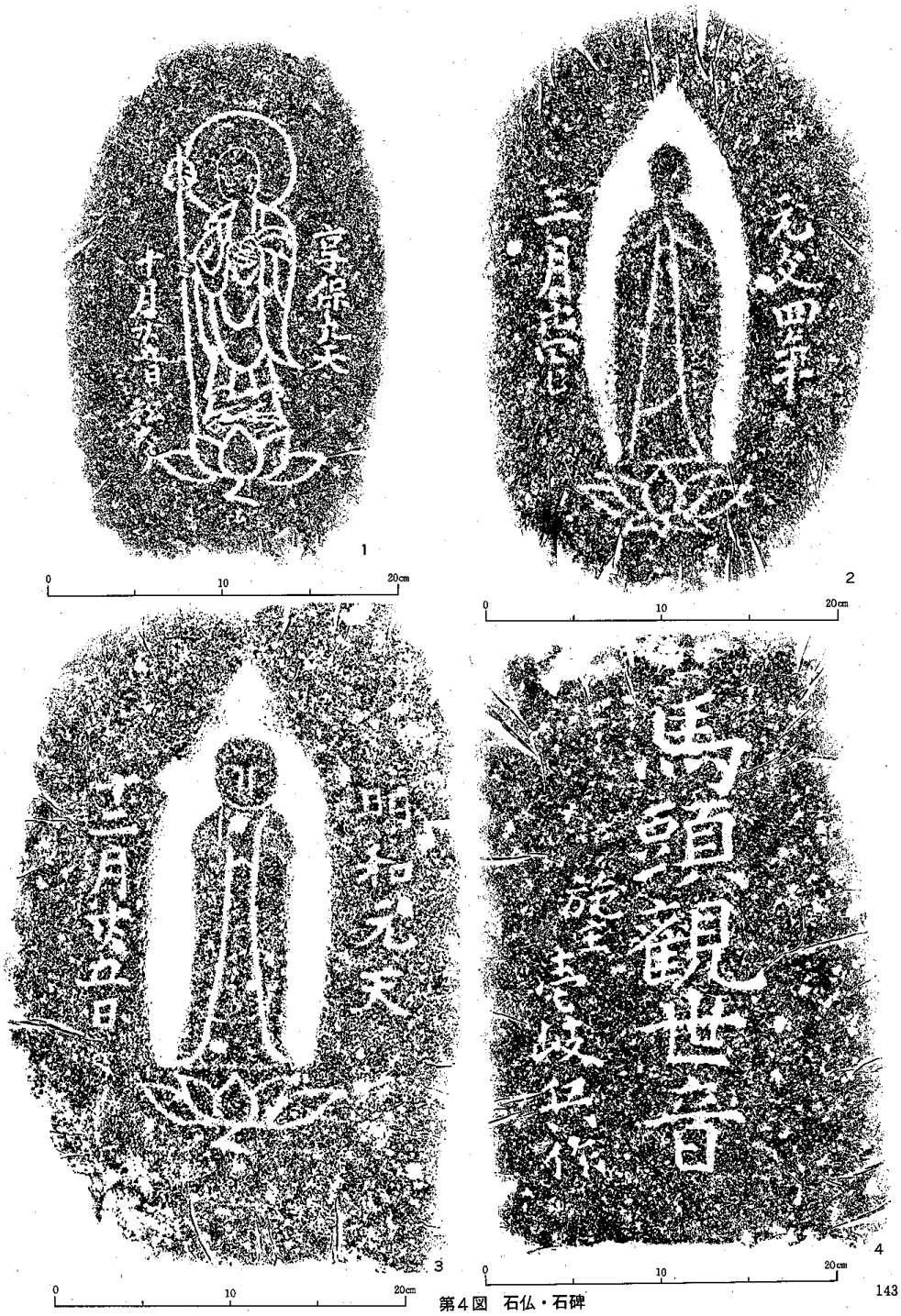
(2) 素焼の皿（第5図4～17、図版9－8～20）

完形およびほぼ完形が41点、破片が76点出土している。大きさは口径が約4.5～6cm、器高が約0.5cm～1cmに集中している。焼成は良好で橙色をおびている。釉の施されているものはない。

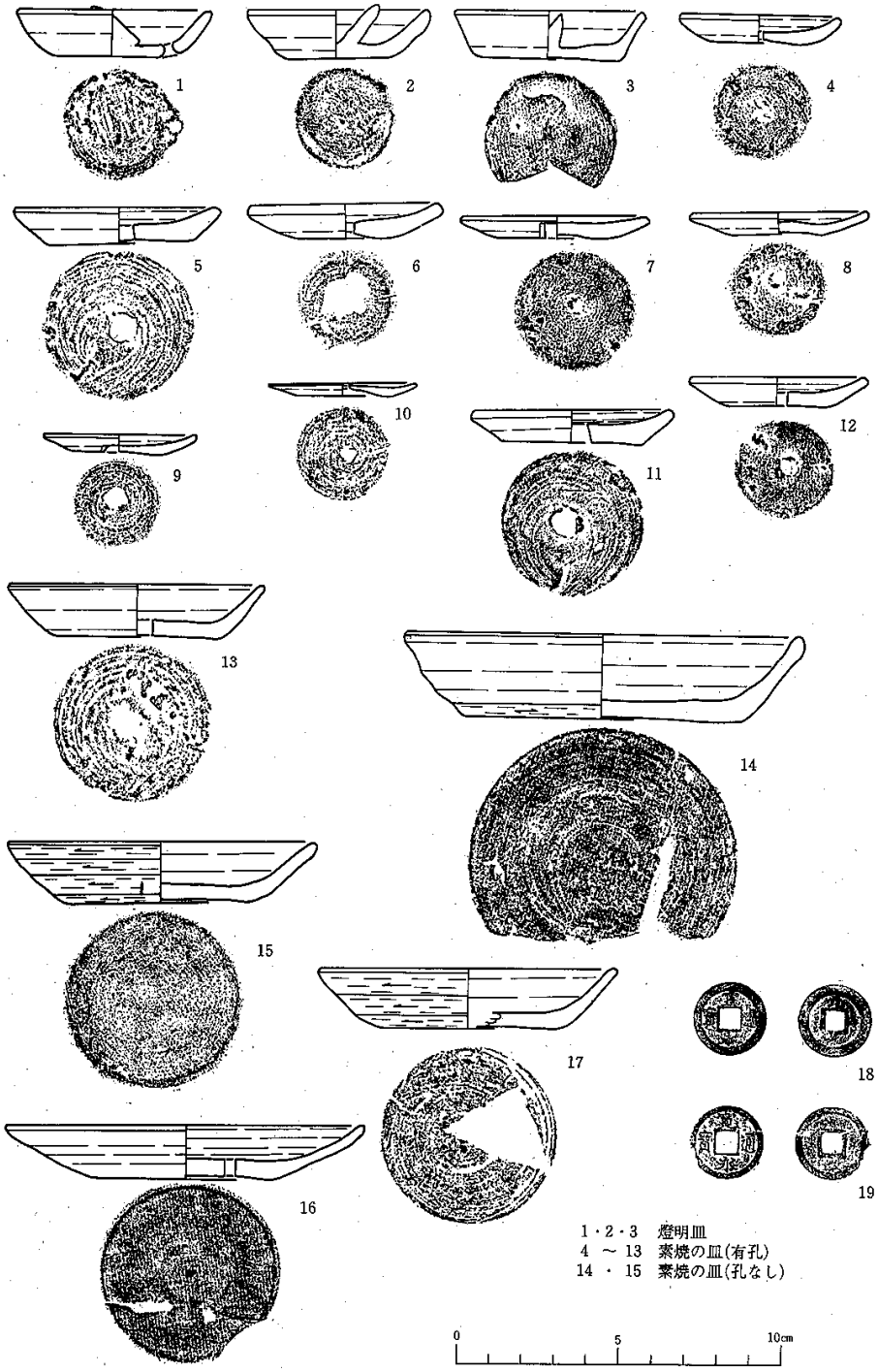
117点中、有孔が52点、無孔が5点、破片のため不明が60点ある。穿孔の時期については焼成前穿孔と焼成後穿孔があり、穿孔の方法については外面、内面、両面からの三種類がある。全体的には焼成後内面から穿孔されたものが多い。



第３図　調査区の位置と遺構



第４図　石仏・石碑


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
1・2・3　燈明皿
4 ～ 13　素焼の皿(有孔)
14 ・ 15　素焼の皿(孔なし)
0
5
10cm

第5図　土　　器

墨書皿が6点ある。図版9－8は「奉納大正四年八月廿五日　中田村　守さく」とある。図版9－9は「奉納　壱?岐口子」とあり、図版9－－10は「木村一吉?」とある。その他2点は「願･･･□」、「□寺･･･木?善□」、とあるが、残り1点は不明である。

古銭（第5図18・19）

寛永通宝が3点出土している。

Ⅳ　ま　と　め

1. 本遺跡は、名取川が形成した自然堤防上に立地している。
2. 表土からは石仏や石碑とともに土器(注)、寛永通宝の奉賽物が出土している。これらの出土遺物の年代は、近世から現代までのものである。封土からの出土遺物はない。
3. 遺跡は、当初高塚古墳と考えられていたが、調査の結果内部施設、外表施設等は確認されず、11層にわたる盛土がみとめられた。しかし、塚が延命地蔵をまつるためえに造成されたものなのか、塚の造成時期等については不明である。
4. 本遺跡は新幹線工事着工以前に神木、祠、石仏等が安置されており、民間信仰の場となっていたと考えられる。なお現在延命地蔵は本遺跡の東約150mの地点に移され、まつられている。

注）有孔の土器は孔に紐を通して、「願がかなうように」や「中耳炎が直るように」等の祈願のために供えたものである。地域によっては、土器ではなく有孔の硬貨、輪切りのイモ等を用いている。（三崎一夫氏の御教示による。）

引用・参考文献

後藤　勝彦　(1960)：『宮城県名取市高館金剛地貝塚出土縄文土器の研究』「地域社会研究9・10（宮城県の地理と歴史Ⅱ）」

仙台市教育委員会（1976）：『安久東遺跡発掘調査概報』「仙台市文化財調査報告書第10集」

〃　(1979)：『栗遺跡発掘調査報告書』「仙台市文化財調査報告書大第14集」

宮城県教育委員会（1973）：『金剛寺貝塚今熊堂遺跡調査報告』「宮城県文化財調査報告書第33集」

〃　(1976)：『宮城県文化財発掘調査略報（昭和 50 年度）（清水遺跡）』「宮城県文化財調査報告書第42集」

〃　(1976)：『宮城県遺跡地名表』「宮城県文化財調査報告書第46集」

〃　(1977)：『清水遺跡』「宮城県文化財調査報告書第50集」

〃　(1979)：『宮城県文化財発掘調査略報（昭和 53 年度（上古川遺跡））』「宮城県文化財調査報告書第57集」

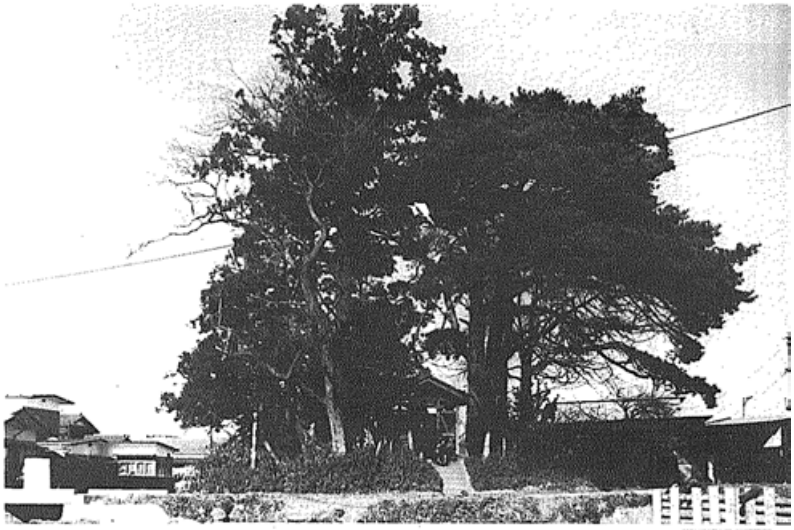
土器観察表 ①

遺物番号	出土地点（地区）（層位）	大きさ 口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	器面調整（外面）－（内面）	底面 切り離し，調整	備考	挿図・図版
1	D－1	5.9	3.3	1.5	ロクロ－ロクロ	回転糸切り，ナデ	燈明皿　施釉　焼成後内面から穿孔	第5図1，図版1-5
2	C－1	5.7	3.1	1.7	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	燈明皿　施釉　孔なし	第5図2，図版1-6
3	X－1	5.7	4.2	1.6	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	燈明皿　施釉　孔なし　陶器	第5図3，図版1-7
4	D－1	—	—	—	ロクロ－ロクロ	不明，ケズリ	燈明皿破片　施釉	
5	C－1	—	—	—	不明－ロクロ	左回転糸切り	燈明皿破片　施釉	
6	D－1	—	3.1	—	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	燈明皿破片　施釉	
7	X－1	（6.1）	—	（1.5）	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	燈明皿破片　施釉	
8	X－1	5.0	2.9	0.9	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	墨書「奉納大正四年八月廿五日中田村寺さく」焼成後内面から穿孔	第5図4，図版1-8
9	X－1	4.7	2.7	0.6	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	墨書「奉納壱岐□子」焼成後内面から穿孔	図版1-9
10	X－1	4.8	2.6	0.6	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	墨書「木村一吉？」焼成後内面から穿孔	図版1-10
11	X－1	—	—	1.1	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	墨書「奉……□」	
12	A－1	—	—	—	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	墨書「□寺……木？善□」	
13	X－1	6.5	4.7	1.3	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	焼成前両面から穿孔	第5図5，図版1-11
14	D－1	6.0	2.8	1.0	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	第5図6，図版1-12
15	D－1	6.0	3.4	0.7	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成前内面から穿孔	第5図7，図版1-13
16	A－1	5.6	2.8	0.7	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成前内面から穿孔	第5図8，図版1-14
17	A－1	4.8	2.6	0.6	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	第5図9，図版1-15
18	A－1	4.8	2.6	0.6	ロクロ－ロクロ	右回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
19	X－1	4.9	2.6	0.7	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後両面から穿孔	
20	D－1	4.5	2.7	0.7	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
21	D－1	4.7	2.8	0.5	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	第5図10，図版1-16
22	A－1	4.6	2.8	0.7	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
23	X－1	4.7	2.7	0.7	ロクロ－ロクロ	右回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
24	X－1	6.4	2.5	1.2	ロクロ－ロクロ	右回転糸切り	焼成前外面から穿孔	第5図11，図1-17
25	X－1	6.0	2.8	1.1	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り，ナデ	焼成前外面から穿孔	
26	X－1	6.1	3.3	1.0	ロクロ－ロクロ	回転糸切り，ナデ	焼成前内面から穿孔	
27	X－1	5.7	3.1	1.0	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成前両面から穿孔	第5図12，図版1-18
28	X－1	5.1	2.9	0.8	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
29	X－1	4.7	2.8	0.7	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
30	X－1	4.6	2.6	0.6	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
31	A－1	5.0	2.7	0.8	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
32	X－1	4.9	2.9	0.7	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
33	D－1	7.9	4.8	1.8	ロクロ－ロクロ	右回転糸切り	焼成後内面から穿孔	第5図13，図版1-20
34	X－1	5.3	3.1	0.8	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
35	X－1	5.1	2.5	0.6	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成前穿孔	
36	A－1	5.1	3.1	1.0	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
37	X－1	4.7	2.6	0.5	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
38	D－1	12.3	8.4	2.7	ロクロ，回転ヘラケズリ－ロクロ	不明，左回転ヘラケズリ	孔なし	第5図14，図版1-19
39	D－1	9.5	5.3	1.9	ロクロ，回転ヘラケズリ－ロクロ	不明，左回転ヘラケズリ	孔なし	第5図15，
40	A－1	11.0	5.5	1.5	ロクロ，ミガキ－ロクロ	不明，ミガキ	焼成前穿孔	第5図16
41	A－1	9.2	5.3	1.9	ロクロ，ミガキ－ロクロ	不明，左回転ヘラケズリ	孔不明	第5図17
42	A－1	—	5.0	—	ロクロ，回転ヘラケズリ－ロクロ	不明，左回転ヘラケズリ	焼成後内面から穿孔	
43	D－1	9.8	5.7	2.0	ロクロ，回転ヘラケズリ－ロクロ	不明，回転ヘラケズリ	焼成後穿孔	
44	D－1	3.3	3.2	1.5	ロクロ，ナデ－ロクロ，ナデ	左回転糸切り	孔なし	
45	D－1	6.8	3.9	1.3	ロクロ－ロクロ	右回転糸切り	焼成後両面から穿孔	
46	C－1	—	3.7	1.3	ロクロ，ナデ－ロクロ，ナデ	右回転糸切り	孔なし	
47	D－1	5.4	2.8	0.7	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成前内面から穿孔	
48	C－1	—	—	1.3	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	孔不明	
49	X－1	（7.1）	（4.0）	1.1	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	孔不明	
50	X－1	（6.1）	（2.9）	1.0	ロクロ－ロクロ	回転糸切り，ナデ	孔不明	
51	D－1	（5.6）	（2.9）	0.8	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成前内面から穿孔	
52	X－1	—	—	1.8	ロクロ，ミガキ－ロクロ	不明，ナデ	孔不明	
53	D－1	—	—	0.6	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	孔不明	
54	D－1	—	—	—	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	孔不明	
55	A－1	4.7	2.8	0.6	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
56	A－1	（9.6）	—	2.3	ロクロ，回転ヘラケズリ－ロクロ	不明，回転ヘラケズリ	孔不明	
57	A－1	（9.6）	（6.2）	2.1	ロクロ，ミガキ－ロクロ	不明，回転ヘラケズリ	孔不明	
58	X－1	—	—	—	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	焼成前穿孔	
59	X－1	—	—	—	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	孔不明	
60	A－1	—	—	—	ロクロ－ロクロ	不明	孔不明	
61	C－1	—	5.4	—	ロクロ－ロクロ	不明，回転ヘラケズリ	焼成後両面から穿孔	
62	C－1	6.5	3.8	1.0	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
63	C－1	5.2	3.6	0.8	ロクロ－ロクロ	左回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
64	C－1	（9.5）	（5.3）	2.0	ロクロ－ロクロ	回転糸切り	焼成前穿孔	

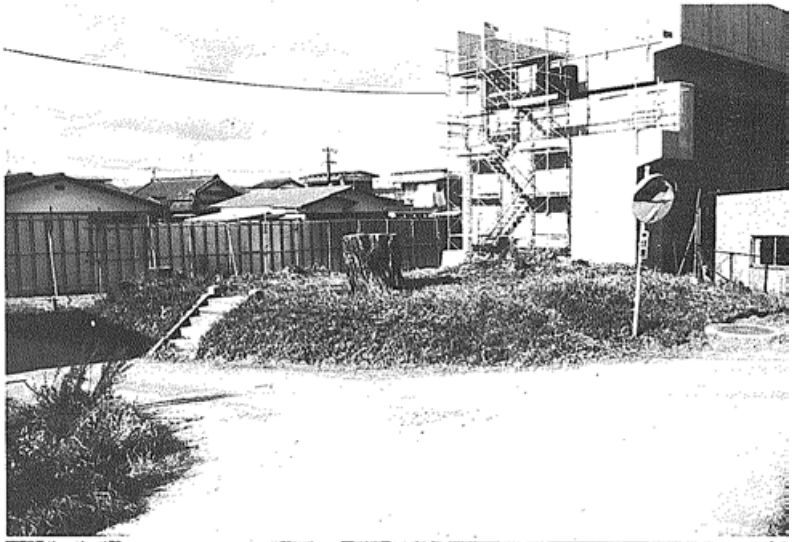
土器観察表 ②

遺物番号	出土地点（地区）（層位）	大きさ 口径(cm)	大きさ 底径(cm)	大きさ 器高(cm)	器面調整（外面）	器面調整（内面）	底面 切り離し，調整	備考	挿図・図版
65	C－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
66	C－1	—	3.5	—	ロクロ	ロクロ	左回転糸切り	孔なし	
67	X－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	焼成前両面から穿孔	
68	C－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
69	C－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
70	C－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
71	C－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
72	X－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
73	C－1	—	—	2.3	ロクロ	ロクロ	不明，ナデ	孔不明	
74	C－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	焼成後両面から穿孔	
75	C－1	(6.1)	(3.2)	0.9	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	焼成後穿孔	
76	C－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
77	C－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
78	D－1	(6.8)	(3.0)	1.2	ロクロ，ナデ	ロクロ	回転糸切り	焼成前穿孔	
79	A－1	—	—	2.0	ロクロ	ロクロ	不明，ナデ	孔不明	
80	A－1	(4.9)	(3.0)	0.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
81	A－1	—	—	1.7	ロクロ，ミガキ	ロクロ	不明，回転ヘラケズリ	孔不明	
82	A－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
83	A－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
84	X－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
85	D－1	—	5.3	0.8	ロクロ，ミガキ	ロクロ	不明，回転ヘラケズリ	墨書 孔不明	
86	D－1	5.6	2.9	1.0	ロクロ	ロクロ	左回転糸切り	焼成前内面から穿孔	
87	D－1	5.2	3.3	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
88	D－1	—	6.5	0.8	ミガキ	ロクロ，ミガキ	不明，回転ヘラケズリ，ミガキ	孔不明	
89	D－1	(6.1)	(3.5)	—	ロクロ	ロクロ	左回転糸切り	焼成前内面から穿孔	
90	D－1	(7.1)	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
91	D－1	—	(2.7)	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
92	D－1	(4.8)	3.0	0.7	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	焼成後内面から穿孔	
93	D－1	—	—	2.2	ロクロ，回転ヘラケズリ	ロクロ	不明，回転ヘラケズリ	孔不明	
94	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	左回転糸切り	焼成前穿孔	
95	D－1	—	—	—	ロクロ，ミガキ	ロクロ	不明	孔不明	
96	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
97	D－1	—	—	—	ケズリ	ロクロ	不明，回転ヘラケズリ	焼成後内面から穿孔	
98	D－1	—	—	1.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	焼成前外面から穿孔	
99	D－1	(6.0)	—	0.9	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
100	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り，ナデ	孔不明	
101	D－1	—	—	1.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
102	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明，回転ヘラケズリ	孔不明	
103	D－1	—	—	1.2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
104	D－1	—	—	1.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
105	D－1	—	—	0.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
106	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
107	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
108	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
109	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
110	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
111	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
112	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
113	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
114	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
115	X－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
116	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
117	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
118	X－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
119	D－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
120	D－1	—	—	—	ケズリ	ロクロ	不明	孔不明	
121	X－1	—	—	—	ロクロ	ロクロ	不明	孔不明	
122	D－1	—	—	—	不明	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
123	D－1	—	—	—	不明	ロクロ	回転糸切り	孔不明	
124	D－1	—	—	—	不明	ロクロ	回転糸切り	孔不明	

図　　版

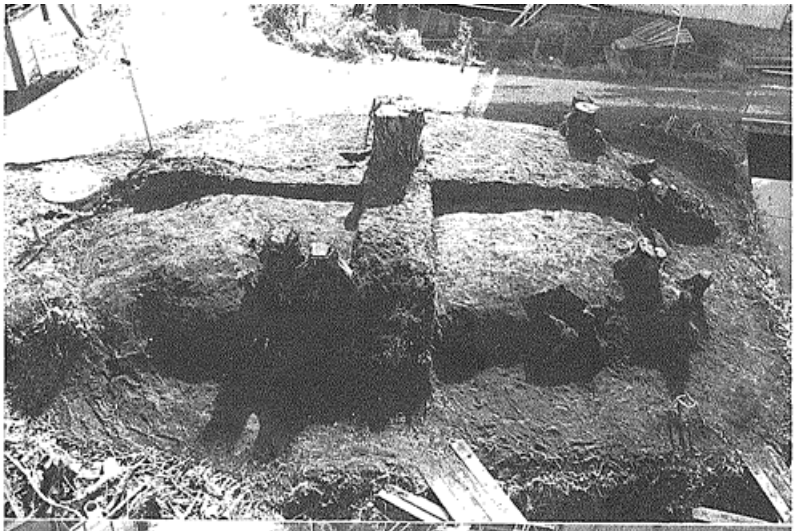


図版１　上古川(延命地蔵)遺跡
新幹線着工以前
（南側から）
〔仙台市教育委員会提供〕



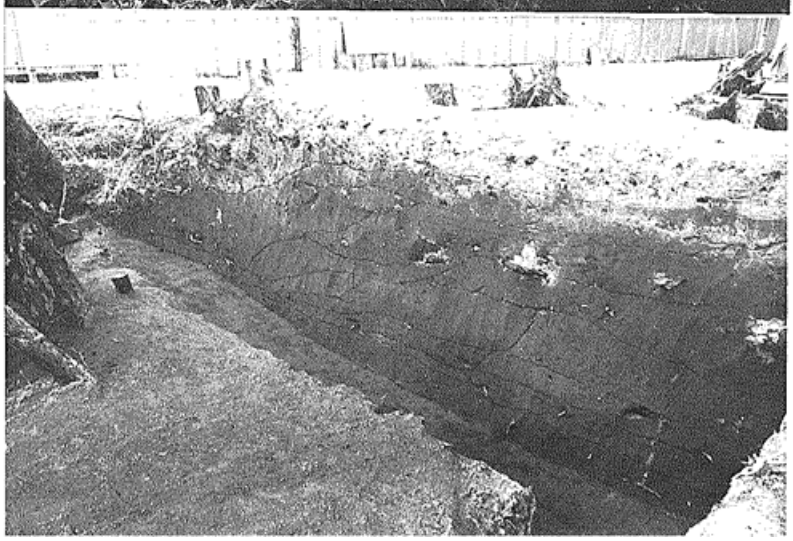
図版２　発掘前（南側から）

図版３　発掘前（北側から）



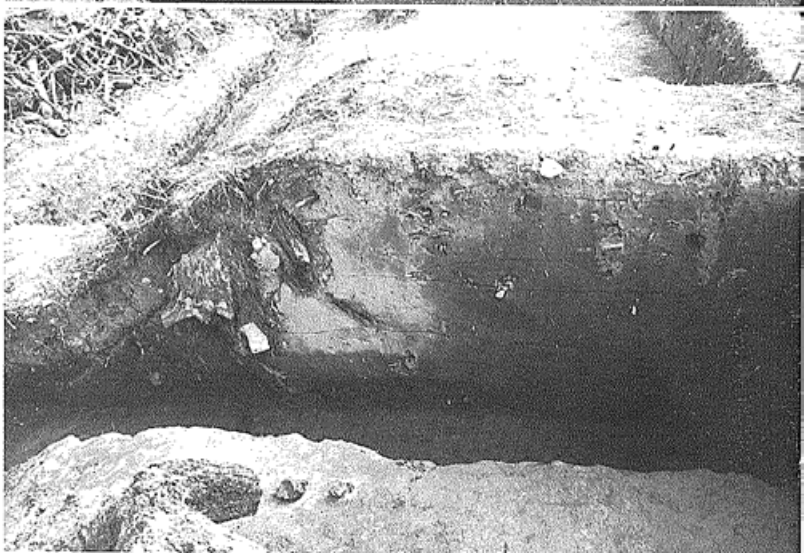
図版４　発掘途中（北側から）

図版５　発掘終了（北側から）

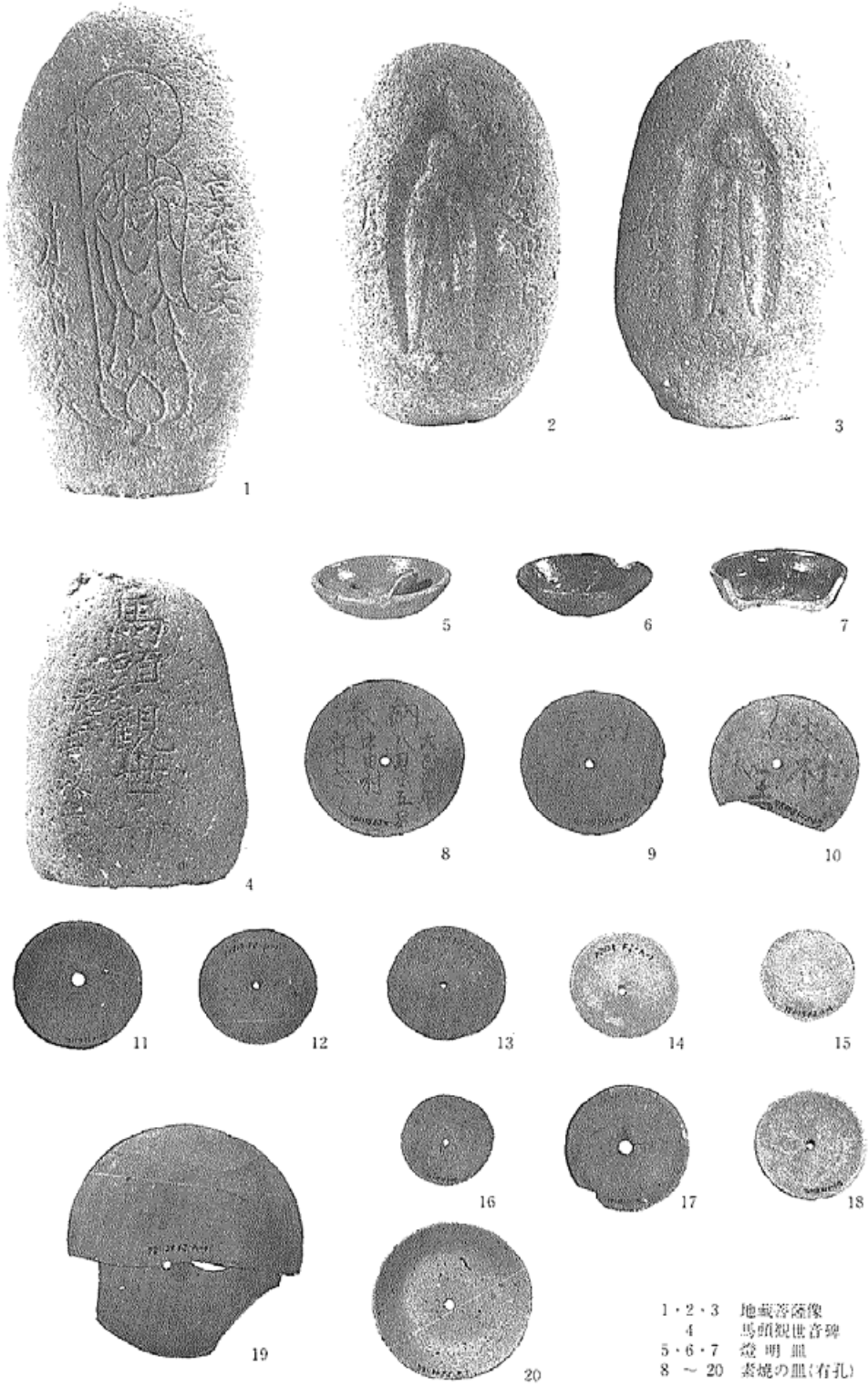


図版６　東西断面（南側から）

図版７　東西断面（南側から）



図版８　南北断面（西側から）



1・2・3　地蔵菩薩像
4　馬頭観世音碑
5・6・7　燈明皿
8 ～ 20　素焼の皿（有孔）

図版９　石仏・石碑・土器

(5) 留沼（とめぬま）遺跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡 155
Ⅱ　調査の方法と経過 157
Ⅲ　調査の成果 161
1. 遺跡の層位 161
2. 発見された遺構と遺物 162
(1) 竪穴住居跡 162
(2) 竪穴遺構 170
(3) 焼土遺構 176
(4) 土壙 177
(5) 溝 177
(6) 遺物に集中する地点 179
(7) 遺構以外の出土遺物 184
Ⅳ　出土遺物と遺構の考察 190
1. 土師器の分類 190
2. 各遺構における土師器の組み合わせ 197
3. 土師器の年代 198
4. 遺構の年代と考察 200
Ⅴ　ま　と　め 202
(附) 留沼遺跡出土ワラ状灰化物の灰像分析　東京大学理学部人類学教室　松谷暁子 205

調 査 要 項

遺　跡　名：留沼遺跡
遺 跡 記 号：ＢＺ（宮城県遺跡地名表登載番号：27019）
遺跡所在地：宮城県古川市大柿字留沼
調 査 面 積：約2,800m^2（発掘面積900m^2）
調 査 期 間：昭和49年7月20日～7月22日
　　昭和50年8月1日～11月1日
調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課
　　早坂春一、平沢英二郎、小井川和夫、丹羽　茂、森　貢喜、芳賀寿幸
　　佐藤好一、手塚　均、清野俊太郎

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡

留沼遺跡は、国鉄陸羽東線陸前古川の北約1㎞、古川市大柿字留沼46、古川市立第2小学校跡地一帯に所在する。古川市は県の北部に位置しており、北は栗原郡高清水町、東は遠田郡小牛田町、田尻町、南は志田郡三本木町、西は玉造郡岩出山町、加美郡中新田町と接している。

古川市を含めた県北部の地形を観ると、北部一帯は、奥羽山脈から派生した陸前丘陵の一部である築館丘陵が東へ展開し、その南には玉造郡嶋子町荒雄岳に源を発する江合川、加美郡小野田町船形山に源を発する鳴瀬川の両河川及び各支流によって形成された大崎耕土と称される広大な沖積地が広がり、北高南低の単純な地形をつくっている。

古川市は、大崎耕土の中心地で、鳴瀬、江合の両河川及びその支流である渋井川、多田川角蓋川などの氾濫、河道変化によって形成された自然堤防や河岸段丘上に、市街地集落の発達が顕著に認められる。

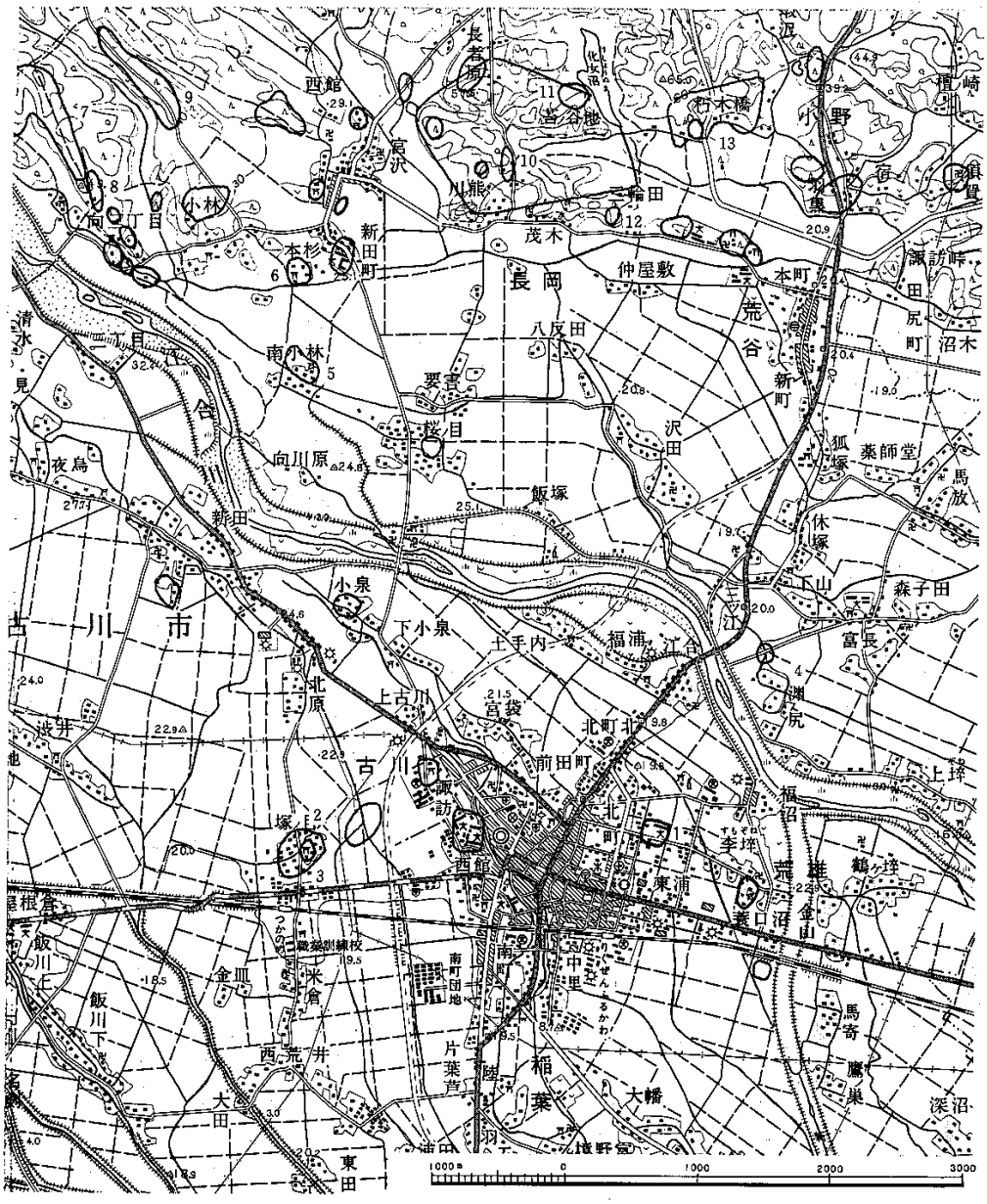
さて、留沼遺跡であるが、江合川の南側に位置し、標高約19mの微高地上、すなわち、江合川によって形成された氾濫原および自然堤防上に立地している。周辺の水田面との比高は約1～2mある。周辺には、福沼、福浦、李枠、桜ノ目など、過去の環境を彷彿させる地名が多く残っている。

次に周辺の遺跡を観てゆく。現在、古川市内で確認されている遺跡の数は148ケ所で、旧石器時代から中・近世までの各時期にわたって認められる。古墳時代の遺跡を中心に各時期の遺跡について述べてみたい。

旧石器時代から弥生時代の遺跡は、北部の丘陵地帯に多く分布している。縄文時代の遺跡では昭和49年に一本杉遺跡が、昭和49年から51年にかけて宮沢遺跡が調査されている。宮沢遺跡は、中世までの複合遺跡で、城柵、宮衛遺跡として昭和53年には国指定史跡になっている。弥生時代では、石包丁の出土している苔谷地遺跡、アメリカ式石鏃を出土している下蝦沢遺跡などが著名である。

古墳時代の遺跡としては、古墳、集落跡があり、調査されているものも他の時代に比して多く、古墳では、青塚古墳（昭和33年）、塚原古墳群（昭和44年）、日光山古墳群（昭和47年）、朽木橋横穴古墳群（昭和48年）が、集落跡では引田遺跡（昭和28年）塚ノ目遺跡（昭和33年）などが調査されている。

青塚古墳は、全長108mの規模をもつ5世紀の大型前方後円墳と推定されているもので、東北地方でも4番目に大きいものである。内部主体は、粘土床の上に舟形状に棺の周囲を木炭で囲んだ木炭外被施設をもつもので、槨内からは黒漆塗木棺の一部残片と壺形土師器が確認されている。その他に後円部からは、壺形埴輪、周溝内から小形手捏ね土器が出土している。また、



1	留沼遺跡	2	青塚古墳	3	塚ノ目遺跡
4	渕尻遺跡	5	南小林遺跡	6	一本杉遺跡
7	日光山古墳群	8	大吉山窯跡	9	塚原古墳群
10	宮沢遺跡	11	苔ノ谷地遺跡	12	三輪田遺跡
13	朽木橋遺跡				

（国土地理院発行1/50,000「古川」を複製）

第1図 周辺の遺跡

周辺部には、同時期と考えられる伊勢堂古墳などの小古墳が散在している。

一方、塚原、日光山両古墳群はいづれも径10m前後の小円墳で、河原石敷きの横穴式石室をもち、7～8世紀と推定されるものである。また、朽木橋横穴古墳群では、13基が調査され、すべて両袖式の玄室で台床がなく、複室構造の玄室をもつものなども検出されている。

引田遺跡は、名蓋川の形成した自然堤防上にある集落跡で、古墳時代中期引田式土器の標式遺跡として知られている。

塚ノ目遺跡は、前述の青塚古墳の周辺に位置し、15軒の竪穴住居跡が確認されている。住居跡は一辺が3.5～4mのほぼ隅丸の正方形を呈し、床面にまこもの敷いてある例なども確認されている。出土土器は、塩釜式期に属するもので、壺、甕、高坏、器台、小型手捏ね土器などが報告されている。

奈良、平安時代になると、前述の宮沢遺跡をはじめ城柵、官衛遺跡と関連をもつ名生舘跡、伏見廃寺、日の出山瓦窯跡、大吉山瓦窯跡、三輪田遺跡などが知られている。多生館跡、伏見廃寺、三輪田遺跡からは、8世紀初頭の瓦が出土しており、多賀城等との関連で注目されている。

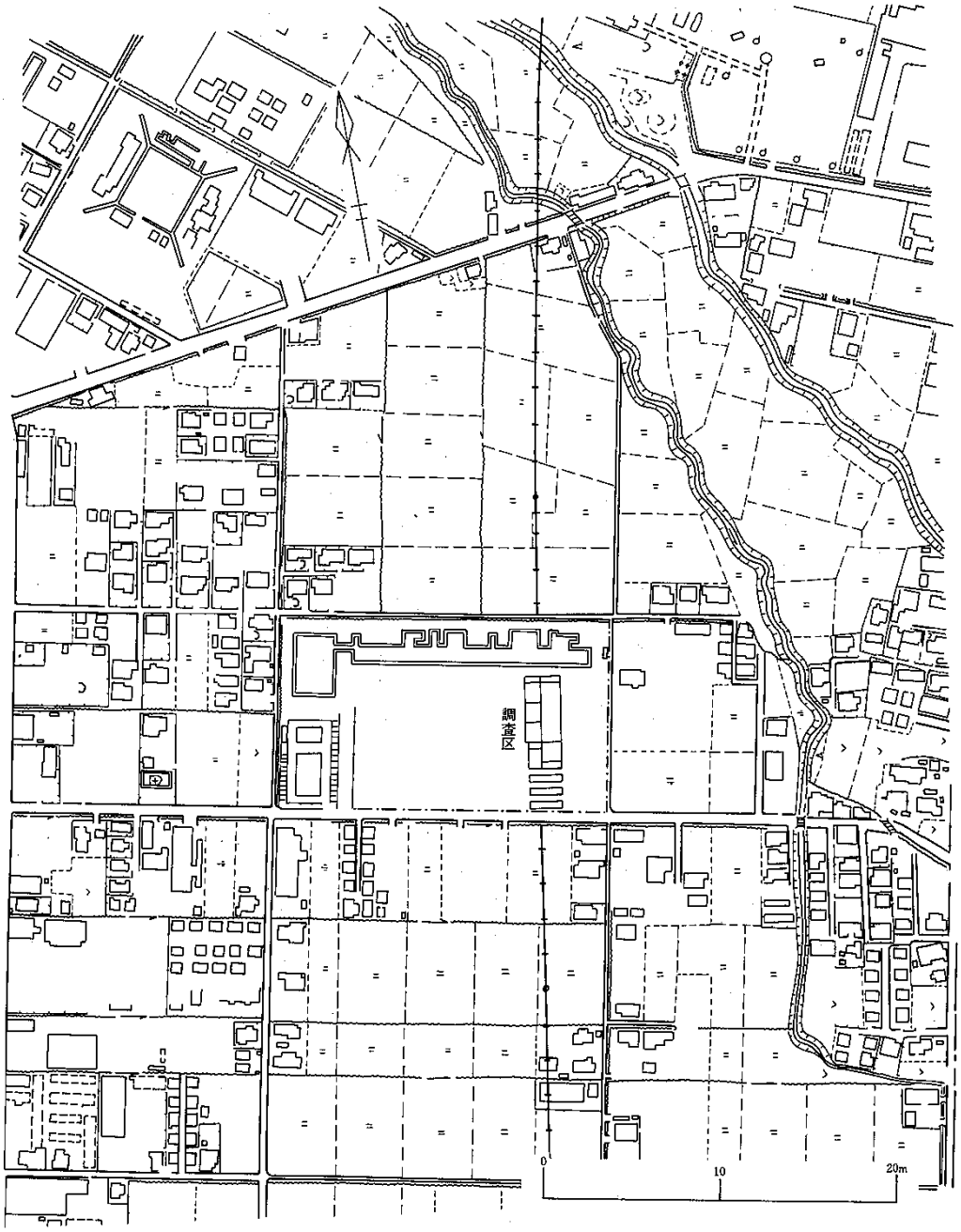
集落址としては、藤屋敷遺跡があり、竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡2棟などが検出されている。

留沼遺跡についてみると昭和36年の古川第二小学校建設の際に、南小泉式土器と石製模造品が出土したことが発見の端初である。そして、佐佐木忠雄氏、伊東信雄氏によって、出土遺物等の報告がなされている。

Ⅱ　調査の方法と経過

調査区が学校の敷地内であり、校庭として使用されていること、また、地元住民にとっても、付近では唯一の広場であることなどの理由から、長期間にわたって発掘調査を実施することは不可能であると考えられたため、調査は2次にわけて実施された。以下、各次の調査について述べていく。

第1次調査：遺跡の内容を把握するための予備調査的なものである。調査は、学校運営などに支障のない夏季休業中を好機と考え、昭和49年7月20日～27日までの期間に行なった。はじめに、新幹線路線幅中心杭363＋200（以下原点Ａ）、363＋400（以下原点Ｂ）、を結ぶ線及び、これに直交す線を基準線とし、3m単位のグリッドを設定した。グリッド名は東西方向をアラビア数字（13～19）、南北方向をアルファベット（Ａ～Ｔ）であらわし、両者の組み合わせで呼ぶことにした。また、原点Ｂを境に南側の部分をＡ区・北側の部分をＢ区と大別し、原点Ｂ



第２図　遺跡の位置と周辺の地形

の北側の区をＢ－Ａ－15区と定めた。

調査対象面積は1696m^2（106m×16m）であるが、前述のような理由もあり、調査したのは、ＡＳ．ＡＲ－14区、ＢＢ～ＢＤ－15区の5グリッド（45m^2）だけである。調査の結果、基本層序は校庭造成の際の整地層を含め8枚（0層～7層）が観察され、第3層・第4層が遺物包含層となっている。Ｂ区の包含層中からは、甑1点を含む甕、壺形土器10数点がほぼ完全な形で出土している。

第2次調査：昭和50年7月に学校が新築移転を完了したので、第一次調査の成果を踏まえて8月1日から開始した。調査区の南側は道路が南西に走り、北側は校舎建築時の基礎工事などで遺跡の破壊は明らかであり、調査範囲は校庭の部分に限定せざるを得ず、東西16.5m×南北66m（1089m^2）を調査対象に選定した。

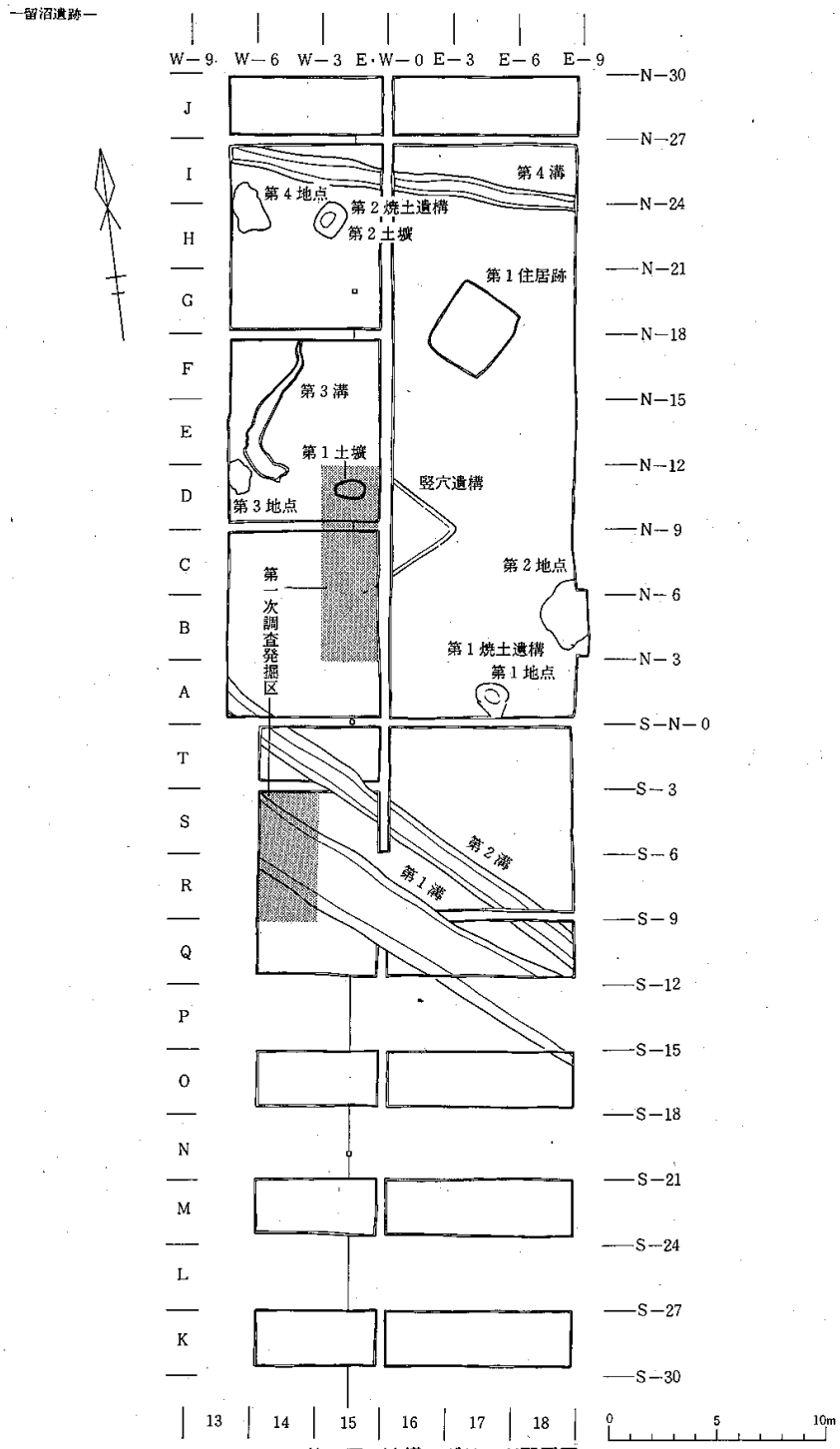
第1次調査で校庭整地層（0層）の厚さは50～60㎝であることが判かったので、まず、整地層の排土から開始し、旧表土（第1層）があらわれた段階で第1次調査時と同様の地区設定を行なった。

第1次調査で遺物量の少なかったＡ区については、2～3グリッドを1単位とした東西トレンチを南から北へ1グリッドおきに設定し、トレンチ調査を行ない、遺物量の多かったＢ区については全面発掘を行なった。ただし、遺構等がトレンチ外にまでのびている場合には随時調査区を拡張し調査を行なっている。

発掘調査は、Ａ区から開始し、基本層位の確認、対比等を行ないながらＢ区へと進めた。その結果、Ａ区では2本の溝が、Ｂ区では、竪穴住居跡1軒、竪穴遺構1基、焼土遺構2基、土壙2基、溝2本が検出された。確認面は、第4層上面及び、第5層上面である。遺物は第1次調査時と同様に完形に近い状態で出土するものが多く、特にＢ地区において顕著であり、集中して認められる場所が4地点ある。

こうして、調査の内容がほぼ明らかになった9月27日に現地説明会を開催した。その後、竪穴住居跡の精査、遺構の実測、写真の撮影などを継続して行ない、発掘調査のいっさいを終了したのは11月1日である。

なお、遺構等の実測は遣り方測量で行ない。平面図、断面図とも縮尺は$^1/_{20}$を基本としている。最終的な発掘面積は900m^{2}である。なお、調査期間中に東北大学名誉教授伊東信雄氏、広島大学文理学部安田喜憲氏に現地指導をいただいている。



第3図　遺構・グリッド配置図

Ⅲ 調 査 の 成 果

1. 遺跡の層位

調査の結果、留沼遺跡においては大別して8枚の層が観察された。以下、各層の状況と分布、遺構との関係などについて述べる。

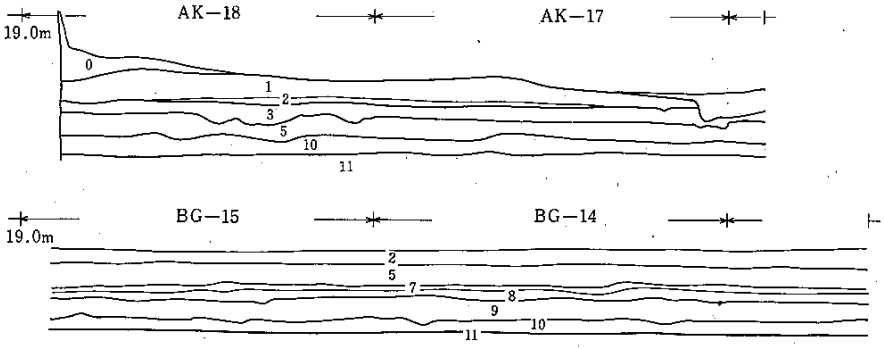
〈0層〉　中礫、細礫、粗砂などからなる校庭の整地層で、層の厚さは50～60cmである。

〈Ⅰ層〉　細砂、砂質シルトからなる旧表土で水田耕作土となっている。層の厚さは約30cmで調査区全域に認められる。

〈Ⅱ層〉　砂質シルトからなる層で、調査区の南側に多く認められ、北側ではブロック的に認められるだけである。層の厚さは0～15cmである。

〈Ⅲ層〉　細砂からなる層で厚さは20～40cmと一様でない。わずかに粘性があり縦縞状の赤斑がみられる。粒径が小さいことから比較的ゆるやかに堆積したものと思われる。調査区全域に分布しており、遺物包含層となっている。第1溝・第4溝はこの上面から掘り込まれている。

〈Ⅳ層〉　中砂からなる層で厚さは10～20cmである。他の層群と比べ粒径が大きくザラザラしている。また、密度が均質なことから一定の流速で限られた時間に堆積したものと考えられる。調査区の中央部で顕著に認められ、周辺部では薄くなる。Ⅳb層には炭化物のLaminaが数枚認められる。なお、第Ⅳ層の上面からは、竪穴住居跡、竪穴遺構、第2溝、第3溝などの遺構が確認されている。Ⅲ層同様に遺物包含層になっている。



層位		層No	土色	土性	備考
0	層	0	黄褐色(10YR5/6)		整地層
Ⅰ層	Ⅰa	1	灰オリーブ(7.5Y5/2)	Fine Sand	旧表土，旧水田耕作土
	Ⅰb	2	褐色(10YR5/4)	Silty F. Sand	〃
Ⅱ層	Ⅱa	3	黒褐色(10YR3/1)	〃	
	Ⅱb	4	暗灰黄(2.5Y5/2)	〃	
Ⅲ	層	5	淡黄(7.5Y7/3)	Fine Sand	
Ⅳ層	Ⅳa	6	浅黄(7.5Y7/3)	Medium Sand	
	Ⅳb	7	オリーブ黄(7.5Y6/3)	〃	
	Ⅳc	8	灰オリーブ(7.5Y5/2)	〃	
Ⅴ	層	9	灰白(7.5Y7/1)	Fine Sand	
Ⅵ	層	10	褐灰(10YR4/1)	Peaty Clay	泥炭層
Ⅶ	層	11	明青灰(10BG7/1)	Medium Sand	〃

第4図 遺 跡 の 基 本 層 位

Ⅴ層〉　細砂からなる層で厚さは10～25㎝である。層の成因、状況については第Ⅲ層と同様に思われる。調査区の南側では分布が認められない。Ⅴ層の上面からは、第1地点（くぼみ状で遺物が集中する場所）が確認されている。層中に遺物は含まれない。

〈Ⅵ層〉　粘性･耐水性の強い泥炭質の層で厚さは10～15㎝である。他の層群に比べて非常に黒味がかっている。滞在時に形成された層と考えられ、湿地のような状態で植物が繁茂していたことをうかがわせる。遺物は含まれない。

〈Ⅶ層〉　中砂からなる層である。Ⅳ層よりも粒径が大きく、腐植物を含んでいる。遺物は含まれない。

2. 発見された遺構と遺物

調査の結果、留沼遺跡においては、竪穴住居跡!軒、竪穴遺構1基、焼土遺構2基、土壙2基、溝状遺構4本と遺物包含層が検出された。遺物包含層は、基本層位の第Ⅲ層、第Ⅳ層であり、特に第Ⅳ層上面、第Ⅴ層上面には遺物の集中して認められる地点が4ケ所ある。この部分は、周囲と比較するとややくぼんでおり、底面には炭化物等の分布もみられる。また、出土する遺物も完形品に近く他の単独で出土する遺物とは出土状況に差異がみられることなどから、この4地点を遺構と考え、第1～第4地点として取り扱うことにする。以下各遺構について説明を加えていく。

(1) 竪穴住居跡

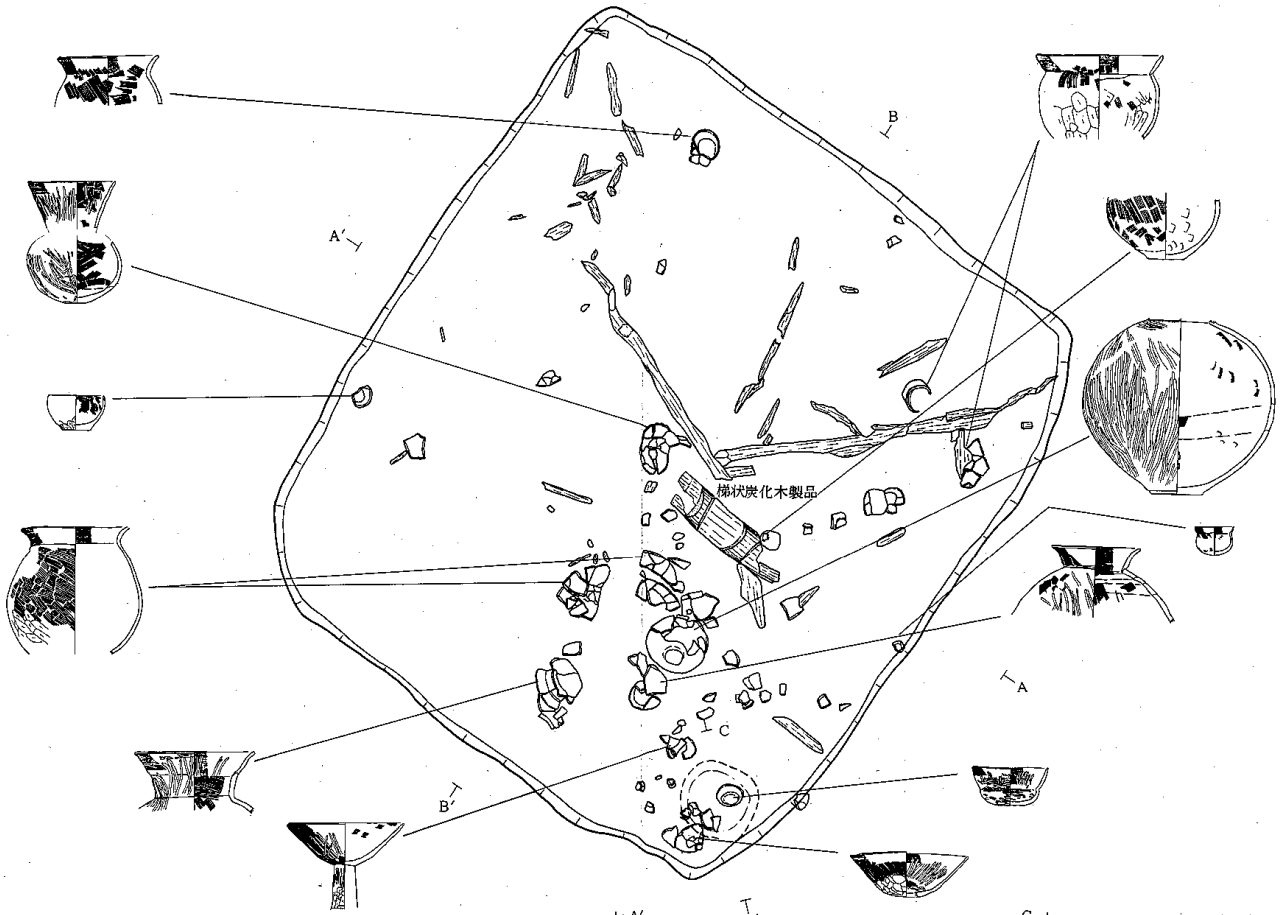
〔確認面〕　Ｂ区Ｆ、Ｇ－16、17、第4層上面で検出された。

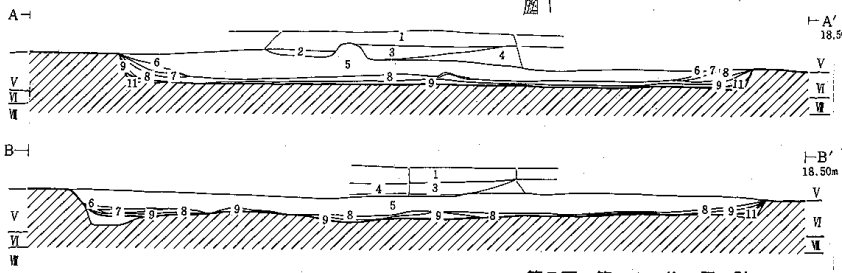
〔平面形:規模〕　長辺が約3.6m、短辺が約3.3mの規模をもつ長方形の住居跡である。住居内面積は約11.4m^2である。

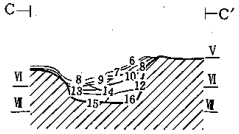
〔堆積工〕　6層に大別される。第1層は、住居跡全面と更にその周辺部にまで分布している。第2層は、住居跡全面を覆っている。第3層、第4層は住居壁際に分布し、第5層、第6層は床面上に堆積している。

〔壁〕　基本層位の第Ⅳ層、Ⅴ層を掘り込み壁としている。残存高は10㎝前後で、床面からは、ほぼ垂直に立ち上がっている。北辺の一部において植物の茎とも思われる炭化物が壁面に貼りついた状態で認められた。壁面には火熱を受け焼け焦げているところもある。

〔床面〕　2次にわたり認められる。第1次（古い時期）の床面は、基本層位の第5層と掘り方埋土上面を床面とし、第2次の床面は、堆積土第6層すなわち、第1次の生活層上面を床面としている。第5層は炭化物の層で、その厚さは約1㎝である。上面は黒く変化しており、下部の床面と接する部分は白く灰状になっている。この灰は、サラサラしたものでなく、かな







第1住居跡埋土

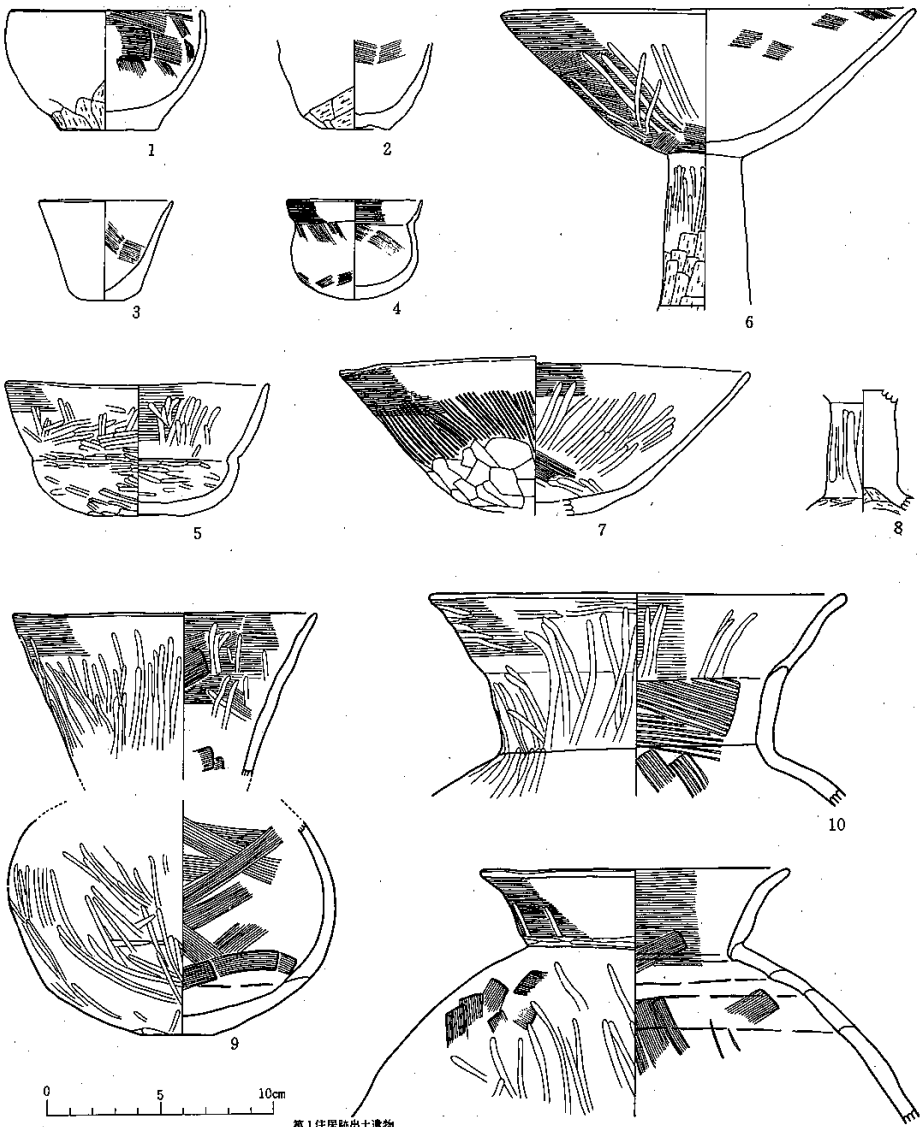
層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	灰色(7.5Y5/1)	Clay Sand	木炭粒を含む
	2	黒色(10YR2/1)		木炭層，ブロック
第2層	3	灰色(7.5Y5/1)	Silty Fine Sand	木炭粒，炭化物を含む
	4	黒色(10YR2/1)	Sitly Sand	木炭層，ブロック的
	5	灰白色(7.5Y5/1)	Sitly Sand	
第3層	6	褐灰(10YR5/1)	S. F. S	炭化物の層
第4層	7	にぶい褐色(5YR5/4)	S. F. S	焼土
第5層	8	褐灰(10YR5/1)		炭化物の層，第二次生活面
第6層	9	黒色(7.5YR5/1)	S. F. S	＋ 第一次生活面
	10	黒褐色(7.5YR3/1)	S. F. S	＋
住居掘り方埋土	11	灰黄褐色(10YR5/2)	S. F. S	

第1住居跡貯蔵穴状ピット埋土

層No	土色	土性	備考
12	灰色(7.5Y5/1)	M. Sand	
13	にぶい黄褐色(10YR5/3)	F. Sand	焼け焦げたブロック
14	灰黄褐色(10YR5/2)	F. Sand	
15	褐色(10YR4/1)	F. Sand	炭化物を含む
16	灰白色(7.5Y7/1)	F. Sand	

0　1m

第5図　第　1　住　居　跡



第1住居跡出土遺物

番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No
1	3 層	坏	8.5		4.3	5.3	Ⅳ	40
2	3 層	手捏ね			3.0	3.9<		41
3	3 層	手捏ね	5.8		1.8	4.4		42
4	床 面	坏	6.0		1.0	4.4	Ⅰa	38
5	床 面	坏	11.5		4.2	5.7	Ⅱ	44
6	床 面	高 坏	18.4			13.3<	Ⅲ	39
7	床 面	高 坏	18.3			6.9<	Ⅲ	43
8	3 層	高 坏				5.4<		49
9	床 面	壺	13.5	14.5	3.2	18.7<	Ⅲ	83
10	床 面	壺	18.4			9<	Ⅰ	45
11	床 面	壺	13.6	25.2<		11<	Ⅱ	46

第6図　第1住居跡出土遺物 (1)

りの圧力を受けたもので、繊維の方向がはっきりと認められた。床面は平坦で、床面上には多数の遺物、炭化物がみられる。

〔柱穴〕　検出されなかった。

〔炉〕　検出されなかった。

〔周溝〕　検出されなかった。

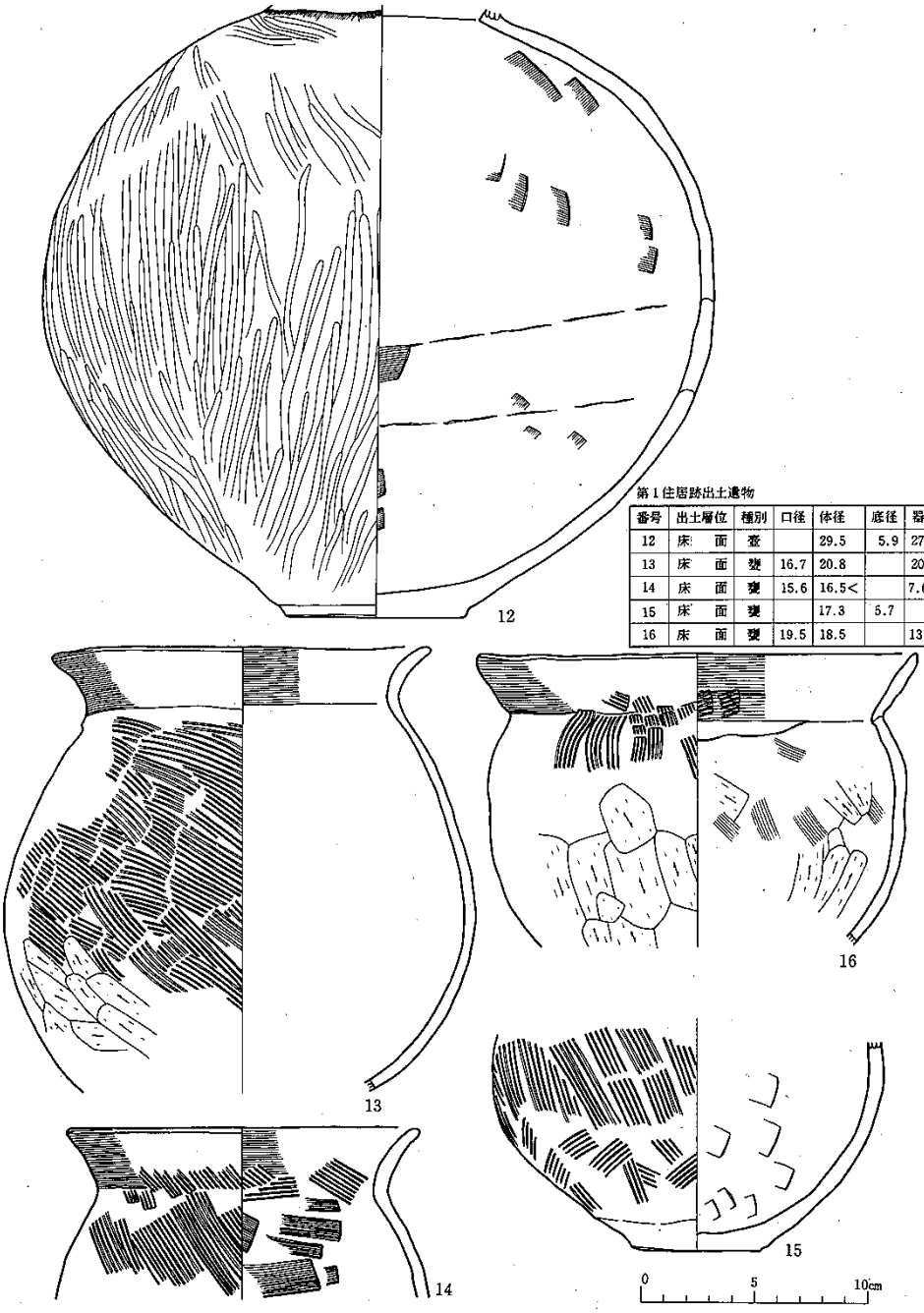
〔貯蔵穴状ピット〕　住居南東隅にあり、平面形は円形で径約40cm、深さ約20cmである。堆積土は5つに細別される。

〔出土遺物〕　住居に伴なう遺物としては、床面出土の土師器坏2点、高坏3点、壺4点、甕4点、木製品がある。

坏（第6図4、5）いづれも内面に稜をもち、対応する外面が屈曲するものである。4は、底部が小さな平底で、体部は屈曲部まで内弯気味に立ち上がり、口縁部は外傾している。稜は体上部に位置する。器面調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部は内外面ともに斜位のナデである。5は、安定した平底の底部を示し、屈曲の位置を体部中央にもっている。口縁部は、4に比して長く内弯気味になっている。器面調整は、口縁部が内外面とも横ナデののちヘラミガキ、体部はヘラミガキである。ヘラミガキは口縁部外面で縦位、横位と不規則に、内面では縦位に、体部は内外面とも横位に施されている。

高坏（第6図6～8）いづれも内外面に赤色塗彩が施されている。5は、坏部と柱状部が残存し、裾部を欠損している。坏部は、底部から口縁部まで屈曲をもたずに外傾し、体部と底部の境は不明瞭である。柱状部は中実で下端が僅かに太くなっている。器面調整は、坏部外面が横ナデののち縦位または放射状のヘラミガキ、内面が横位のナデである。柱状部は上半が縦位のヘラミガキ、下半がヘラケズリである。7は、脚部を欠損している。坏部の器形は6と同様であるが、器面調整で異なっている。口縁部は内外面とも横ナデが施され、体部は外面が縦位の刷毛目ののち不規則なヘラケズリが施され、ヘラケズリは底部にも及んでいる。内面は体部が斜位のナデののち放射状のヘラミガキ、底部では横位のヘラミガキが施されている。8は、坏部と裾部下半を欠損している。6に比して柱状部が短く、ずんぐりしており、裾部は外に開いている。脚部外面には縦位のヘラミガキが、裾部内面には横位のヘラケズリが施されている。

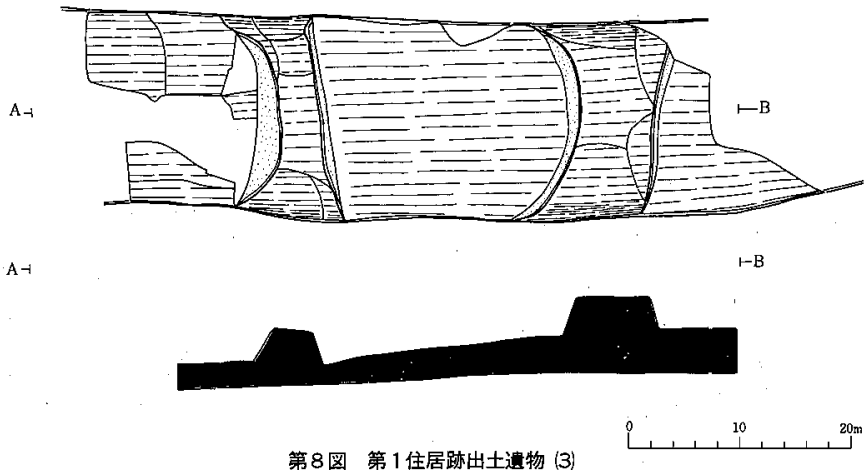
壺（第6図9～11、第7図12）9は、直接に接合しないが同一個体と考えられる。体部は球形で、直線的に外傾する長い口頸部をもち、いわゆる坩と呼ばれているものである。底部は小さな平底を呈している。口頸部には横ナデののち外面では縦位のヘラミガキが、内面では横位のヘラナデ、縦位のヘラミガキが施されている。体部は外面下端にヘラケズリが診られる以外は放射状に近いヘラミガキが全体に施され、内面には横位、斜位のヘラナデが施されている。10は、体上部から口頸部が残っている。口縁部は複合口縁を呈し、頸部が直立気味に立ち止が



第１住居跡出土遺物

番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No
12	床　面	壺		29.5	5.9	27<		48
13	床　面	甕	16.7	20.8		20<	Ⅵb	47
14	床　面	甕	15.6	16.5<		7.6<	Ⅲ	7
15	床　面	甕		17.3	5.7		Ⅱ	90
16	床　面	甕	19.5	18.5		13<	Ⅰb	73

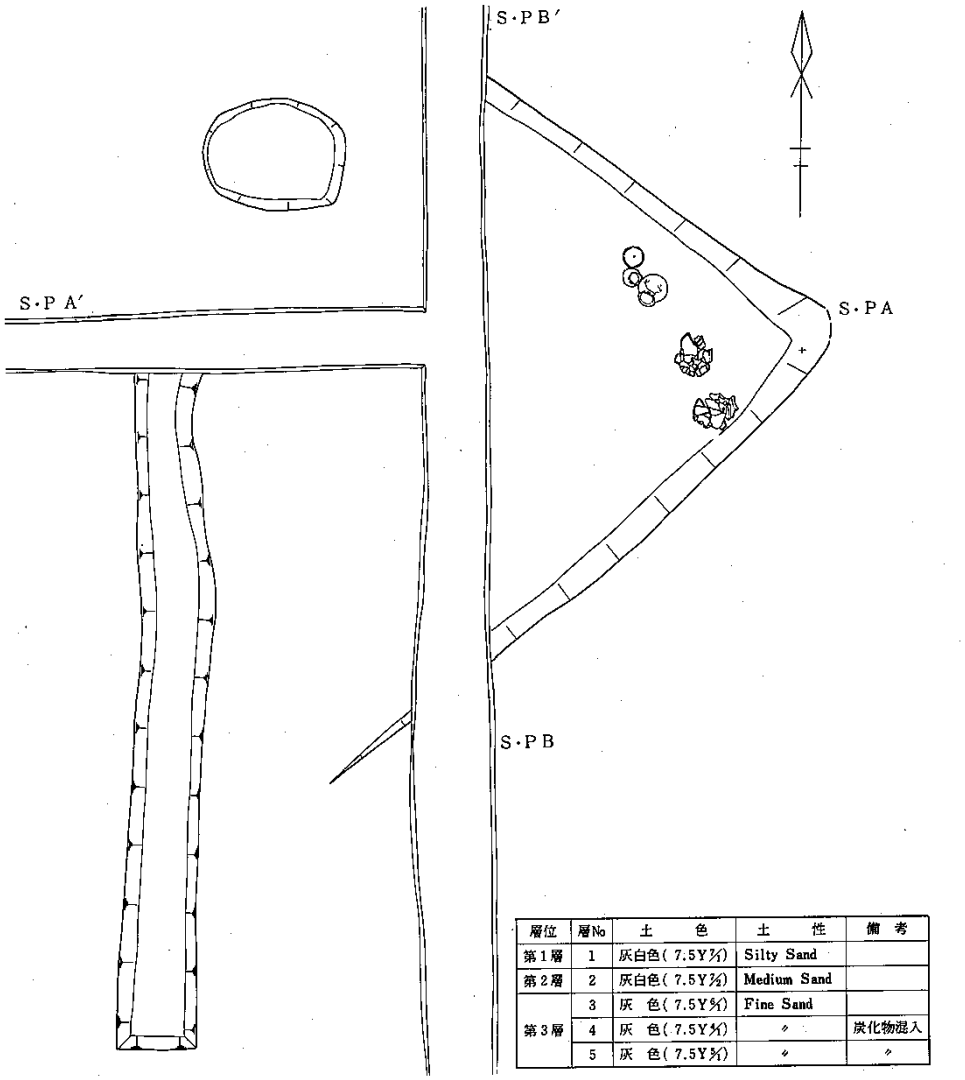
第７図　第１住居跡出土遺物 (2)



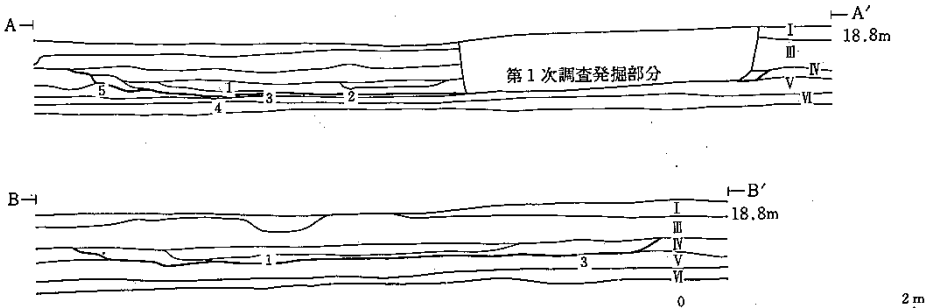
第８図　第１住居跡出土遺物 (3)

り口縁部はゆるやかに外反している。器面調整として外面口縁部に横ナデののち横位のヘラミガキが、頚部から体上部には縦位のヘラミガキが施されている。内面は頚部から体上部に横位、斜位の刷毛目を施したのち、口縁部を横ナデし、さらに縦位のヘラミガキをしている。11は、体部下半から底部を欠損している。口縁部は外反し、体部は球形を呈すると思われる。器面調整として口縁部には内外面とも横ナデを施し、その後、外面には縦位、横位のヘラミガキを、内面には縦位、斜位のヘラナデが施されている。また、第7図12は、口縁部を欠損しているため全体の器形を知り得ないが、体部器形の特徴から壺と考えられるものである。体部は球形を呈し、頚部が収縮している。器面調整として、外面には縦位のヘラミガキが入念に施され、内面には横位のヘラナデが施されている。

甕（第7図13～16）13は、体下部から底部を欠損している。最大径の位置は体部中央より僅かに下にあり、全体として下ぶくらみを呈する。口縁部は外反している。器面調整として、口縁部は内外面とも横ナデが、体部外面は斜位の刷毛目を施したのち、下半を斜位にヘラケズリしている。14は、口縁部から体上部が残存している。器面調整は、13と同様であるが刷毛目は口縁部にまで至っている。体部内面には横位のヘラナデもみられる。15は、体下半から底部が残存している。外面には斜位の刷毛目、内面には斜位のヘラナデが施されている。16は、底部を欠損しているが、最大径の位置が口縁部にあり、器高よりも大きいものと思われる。器面調整は、外面が13、14と同様であるが体部内面にはヘラケズリ、ナデがみられる。



層位	層No	土　色	土　性	備　考
第1層	1	灰白色(7.5Y7/1)	Silty Sand	
第2層	2	灰白色(7.5Y7/2)	Medium Sand	
第3層	3	灰　色(7.5Y5/1)	Fine Sand	
	4	灰　色(7.5Y4/1)	〃	炭化物混入
	5	灰　色(7.5Y3/1)	〃	〃



第9図　竪　穴　遺　構

炭化木製品（第8図）残存長約70㎝、幅約18㎝、厚さは約2～5㎝である。床面に接している部分の炭化が著しく、灰状になっているため、実際の厚さはもっと増すものと思われる。1枚板を削って造っており、段が2ケ所に認められる。この段は、両側から削って造り出されており、約3㎝の高さをもっている。幅は、4～7㎝である。段と段の間は約22㎝ある。段の幅は4～7㎝である。

堆積土出土遺物

坏1点、小型手捏ね土器2点がある。

坏（第6図1）内外面に稜をもたないものである。底部は平底で、体部から口縁部まで内弯気味に立ち上がる。器面調整として体部下半には縦位のヘラケズリが、体部上半にはヘラミガキが施されている。ヘラミガキの単位、方向は磨滅のため判然としない。内面の体部には、ナデ、ヘラナデが横位、縦位に施されている。

小型手捏ね土器（第6図2・3）2は、体部上半から口縁部を欠損している。2、3ともに底部は平底で体部から口縁部にかけて外傾している。最大径の位置は口縁部にあり、3は猪口型を呈している。器面調整として、外面にヘラケズリ、内面にナデが施されている。

(2) 竪穴遺構

〔確認面〕ＢＣ15･16～ＢＤ15･16区に位置し、基本層位の第Ⅳ層上面で確認された。第1次調査において10数個の完形土器を出土した場所をも含んでいる。

〔平面形･規模〕1次調査の際は調査区が狭ますぎたこと、湧水があったことなどから、平面形の観察は困難であったが、2次調査において主に断面観察からであるが、一辺約4.5m前後の方形基調のプランが推定された。

〔堆積土〕西半部の堆積土については不明であるが、東半部においては大別して3層が観察された。第1層は厚さ約10㎝で竪穴東隅から中央部付近まで分布している。第2層は、厚さ約5㎝で中央部で部分的に認められているにすぎない。第3層は底面全体を覆っている。

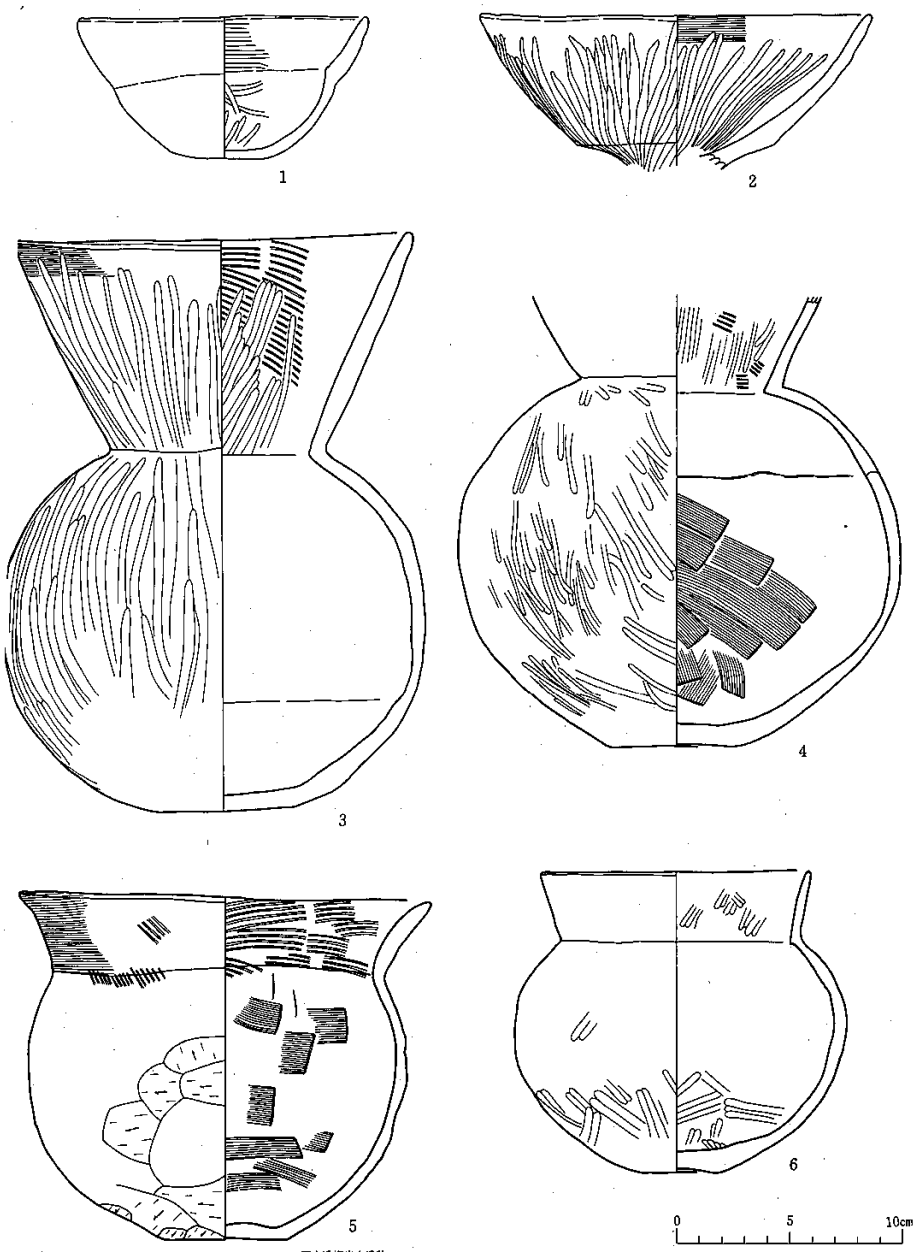
〔壁〕基本層位の第Ⅳ層、第Ⅴ層を壁としている。東辺と南辺の一部が残存し、残存する壁高は最も保存の良い東隅で約20㎝である。底面からは、緩やかに立ち上がっている。

〔底面〕全体の広がりは不明であるが、残存部については、僅かに凹凸が見られる。

〔出土遺物〕坏1点、高坏1点、壺2点、甕17点、甑1点が底面から出土している。

坏（第10図1）内面体中央部に稜をもち、外面が屈曲している。底部は平底で屈曲部まで内弯気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。体部に比して口縁部が肥厚している。器面調整は、内面口縁部に横位の、体部に縦位、斜位の不規則なヘラミガキが施されている。

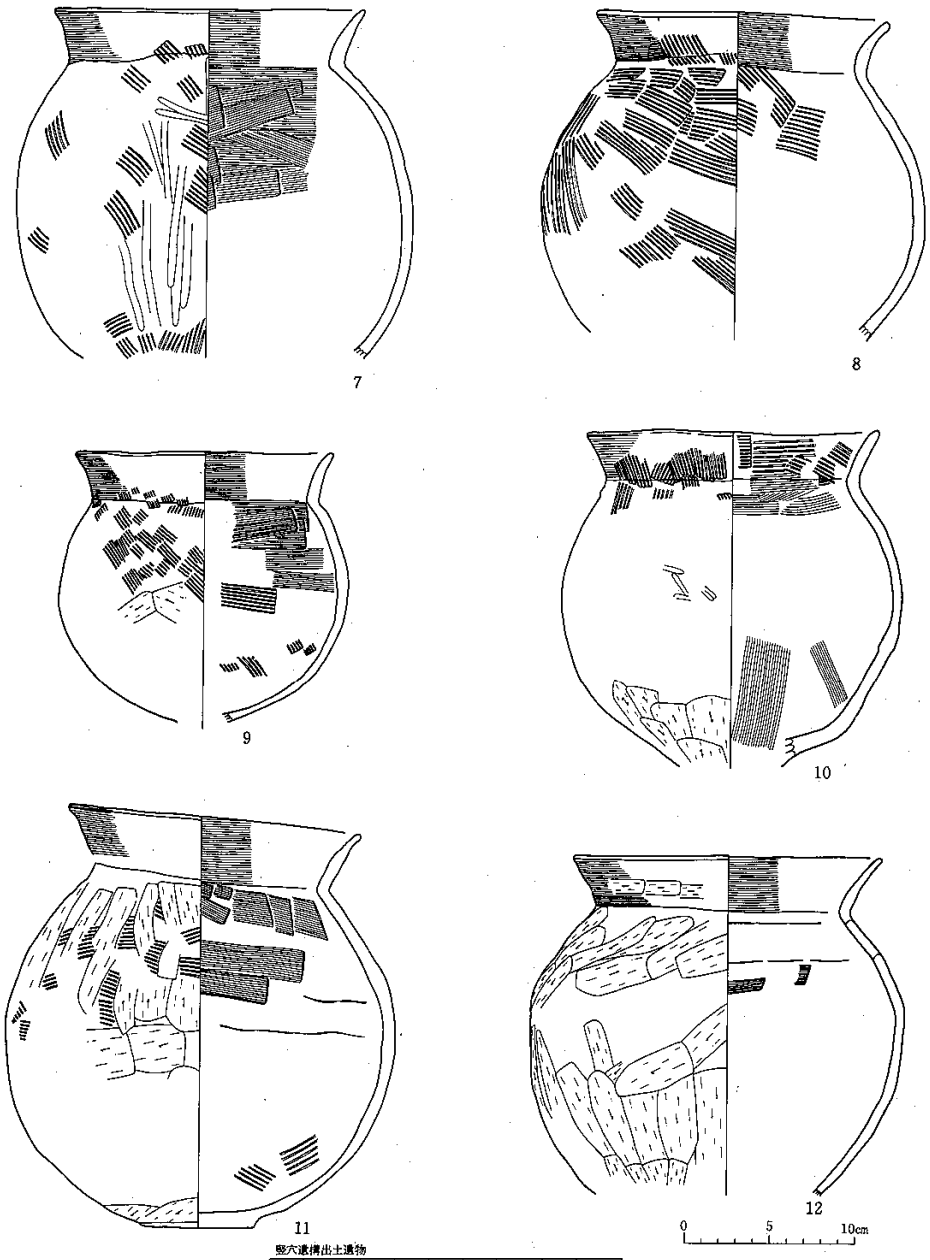
高坏（第10図2）坏部のみ残存している。体部と底部の境に稜を形成し、稜から上はゆるやか



竪穴遺構出土遺物

番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No
1	底　面	坏	12.7		2.8	6.3	Ⅱ	65
2	底　面	高坏	17.2			6.7<	Ⅱ	17
3	底　面	壺	17.5	18.6	6.2	25.4	Ⅲ	58
4	底　面	壺		19.5	5.6	19.9<	Ⅲ	52
5	底　面	甕	18.3	16.6	5.5	15.5	Ⅰb	56
6	底　面	甕	11.9	14.6	3.3	13.2	Ⅱ	16

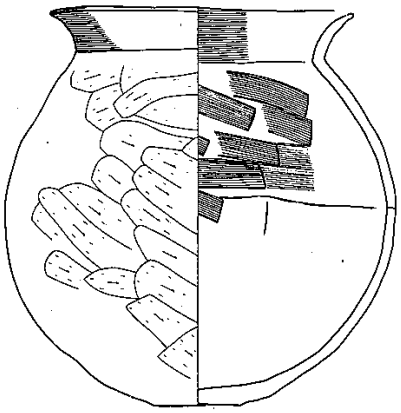
第10図　竪穴遺構出土遺物（1）



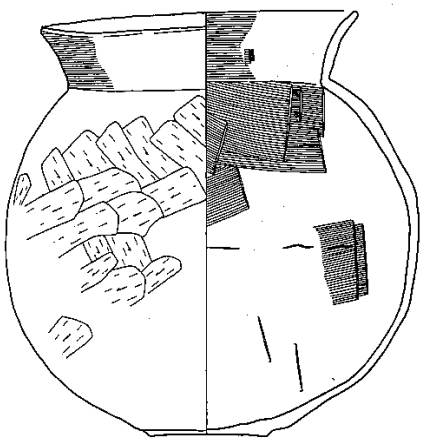
竪穴遺構出土遺物

番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No
7	底　面	甕	18.2	23.2		20.5<	Ⅱ	76
8	底　面	甕	17.1	22.4		19.3<	Ⅱ	60
9	底　面	甕	15.2	17		16<	Ⅱ	62
10	底　面	甕	17.2	19.9		19.9<	Ⅲ	54
11	底　面	甕	16.4	19.5	6.7	23.3<	Ⅲ	78
12	底　面	甕	18.1	22		20<	Ⅲ	63

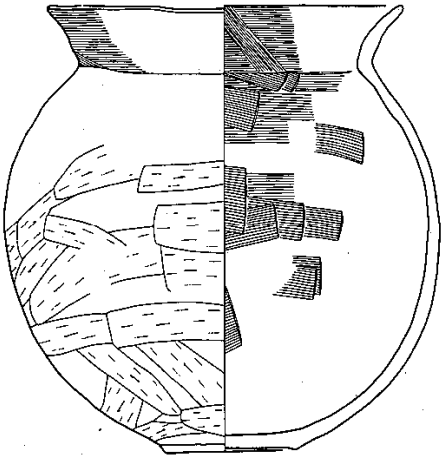
第11図　竪穴遺構出土遺物 (2)



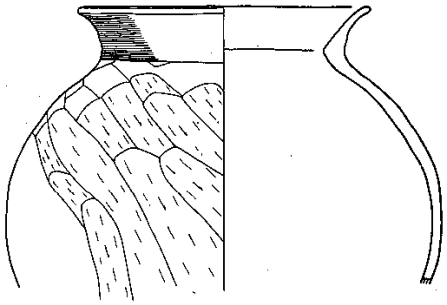
13



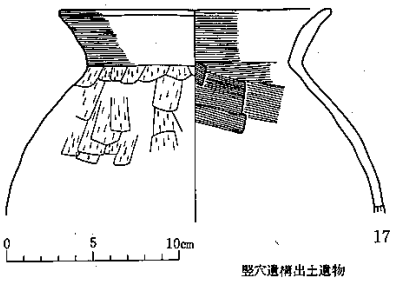
14



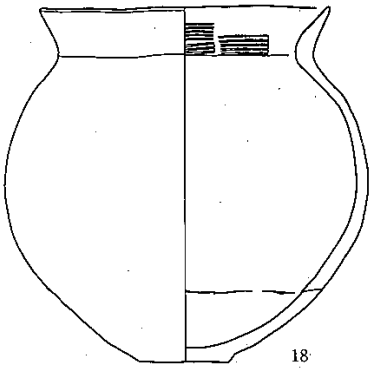
15



16



17



18

竪穴遺構出土遺物

番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No
13	底　面	甕	17.6	22.6	5	23	Ⅲ	15
14	底　面	甕	18.2	23.9	6.8	24.6	Ⅲ	63'
15	底　面	甕	20.6	25.2	7.6	26	Ⅲ	68
16	底　面	甕	16.9	25.2		16.4<	Ⅱ	53
17	底　面	甕	15.8	22<		12<	Ⅲ	88
18	底　面	甕	16.8	20.9	5.2	20.5	Ⅱ	59

第12図　竪穴遺構出土遺物 (3)

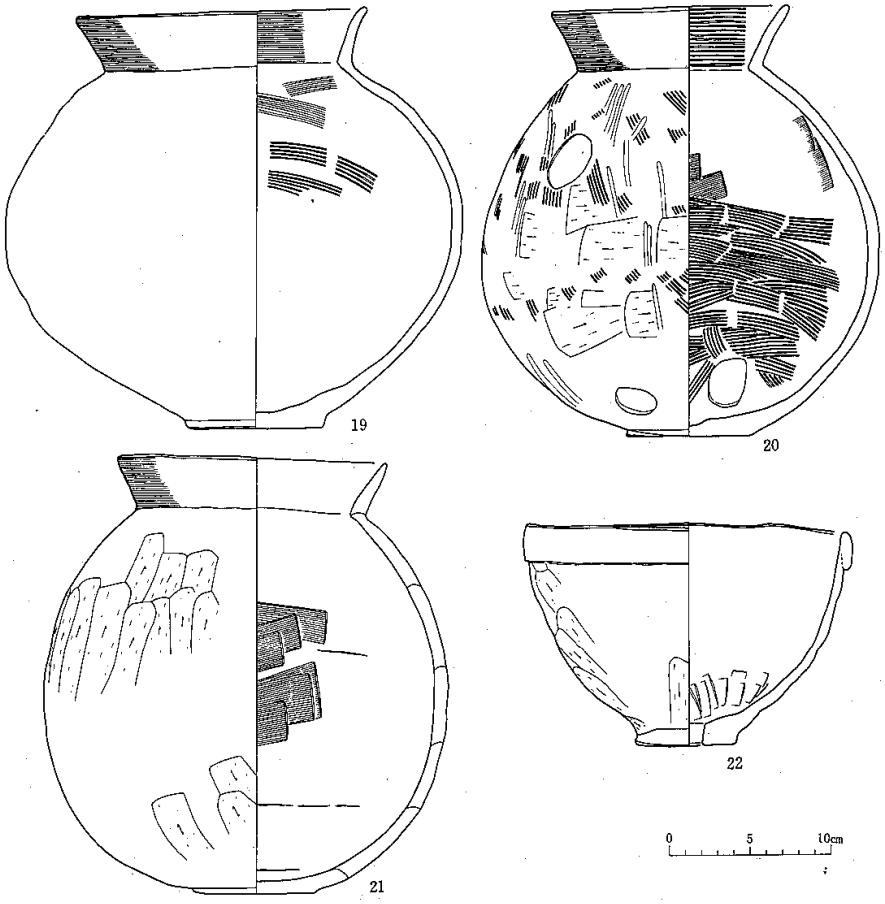
かに外傾している。内外面とも放射状のヘラミガキが入念に施され、内面口縁部には前段階の調整である横ナデが残っている。

壺（第10図3、4）いづれも体部が球形を呈し、3は口縁部が長く直線的に外傾している。4は口縁部上半を欠損するものの3と同様の器形を呈すると思われる。いわゆる坩と呼ばれるものである。体中央部より僅かに下の部分で器壁が薄くなっている。器面調整は、外面口縁部から体部にかけて縦位のヘラミガキが施され、底部はヘラケズリされている。3ではヘラミガキ前に口縁部に横ナデが施されている。内面は口縁部に斜位の刷毛目を施したのち、縦位のヘラミガキを、4では体部に斜位のヘラナデが施されている。

甕（第10図5、6、第11図7～12、第12図13～18、第13図19～21）

5は最大径の位置が口縁部にあり、器高よりも大きい。底部は平底で、体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は「く」字状に外傾し、体部に比して肥厚している。器面調整は、口縁部外面が縦位の刷毛目ののち横ナデ、体部は縦位の刷毛目ののち横位、斜位のヘラケズリ、底部がヘラケズリである。内面は口縁部に横位の刷毛目が、体部には横位のヘラナデを施している。

6～18は最大径の位置が体部中央にあり、体部が球形またはやや歪んだ球形を呈している。口縁部は6が直線的に外傾する以外、「く」字状に外反、外傾している。底部が残存する、6～11、13～15、18は平底を呈し、5では外面が僅かにくぼんでいる。器面調整は、最終調整として、6、7が外面にヘラミガキ、8が刷毛目を施し、他のものはヘラミガキが不規則に施されている。個々について詳しく観察すると、6は、体部が内外面ともにヘラミガキが不規則に施され、内面口縁部には前段階の調整である横ナデが残っている。7は、外面に縦位、斜位の刷毛目を施したのち、口縁部に横ナデ、体部には縦位のヘラミガキが碗されている。内面は口縁部に横ナデ、体部に横位、斜位のヘラナデが施されている。8は内外面ともに縦位、斜位の刷毛目を施したのちに、内外口縁部に横ナデを施している。9は、外面に斜位の刷毛目を施したのちに口縁部に横ナデ、体部には斜位にヘラケズリを施している。10は、外面口縁部から体部に縦位の、内面口縁部に斜位の刷毛目を施したのち、外面体下半に縦位のヘラケズリを、内面体部には上半に横位の、下半に縦位のナデを施している。11は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面は斜位の刷毛目ののち上半では縦位の、下半では横位のヘラケズリが施されている。底部にもヘラケズリがみられる。内面体部は横位のヘラナデが上半に、下半に斜位の刷毛目が僅かにみられる。12は、内外面とも口縁部に横ナデを施したのち、外面では口縁部と体上部で横位に、体下部で縦位にヘラケズリが施されている。また、内面体部上半には横位のヘラナデがみられる。13は、内外面とも口縁部に横ナデ、体部外面に斜位のヘラケズリ、内面体部上半に横位、斜位のヘラナデを施している。14、15は、内外面とも口縁部に横ナデ、体部外面に不規則な斜位のヘラケズリ、内面に横位のヘラナデが施されている。16は、内面調整は、不明であるが、外面



竪穴遺構出土遺物

番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No
19	底　面	甕	18.0	28.2	8.4	26.3	Ⅱ	14
20	底　面	甕	14.7	24.6	7.8	26.8	Ⅵb	57
21	底　面	甕	16.6	25.1	7.4	27.5	Ⅵb	55
22	底　面	鉢	20		6.2	13.9	Ⅰ	64

第13図　竪穴遺構出土遺物 (4)

口縁部に横ナデ、体部には斜位のヘラナデが施されている。17は、内外面とも口縁部に横ナデ、外面体部に縦位のヘラケズリ、内面に横位のヘラナデが施されている。18は、内外面とも磨滅のため不明な点が多く、内面口縁部に横位の刷毛目が僅かにみられるだけである。19は、口縁部内外面とも横ナデがみられる他、体部内面に横位のナデ、ヘラナデが僅かにみられる。

20、21は、最大径の位置が体部中央より僅かに下にあり、下ぶくらみの感じが強く、底部は平底を呈し、口縁部は外傾している。20には、体部に焼成後に穿たれた孔が3個みられる。ま

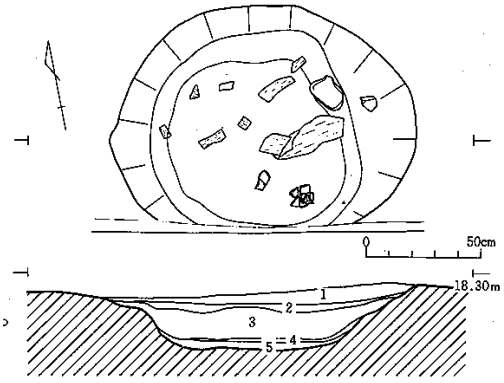
た、21の体部は楕円形に近い形を呈している。器面調整は、20が口縁部外面に横ナデ、内面に横位の刷毛目が施され、体部外面は縦位の刷毛目ののち横位のヘラケズリ、そして、縦位のヘラミガキが施されている。内面は上半に横位のヘラナデ、下半に横位、斜位の刷毛目を施している。21は、外面口縁部に横ナデ、体部に縦位のヘラケズリ、内面体部に横位のヘラナデがみられる。

甑（第13図22）単孔式で口縁部が複合口縁を呈している鉢型のものである。底部から口縁部までやや丸味をもって内弯気味に立ち上がる。器面調整は、体部外面に縦位のヘラケズリが、内面体下部には横位にヘラのアテ目がみられる。内外面とも赤色塗彩されている。

(3) 焼土遺構

第1焼土遺構

ＢＡ－17区、第1地点下で検出された。平面形は径約1.3mの円形を呈し、深さは確認面から約25cmである。堆積土は、5層確認され、炭化物、炭化材の混入が多い。壁は、底面から緩やかに立ち上がり、底面はわずかに凹凸がみられ、全体に焼けて堅くなっている。出土遺物として第4層から、土師器嚢体部破片がある。

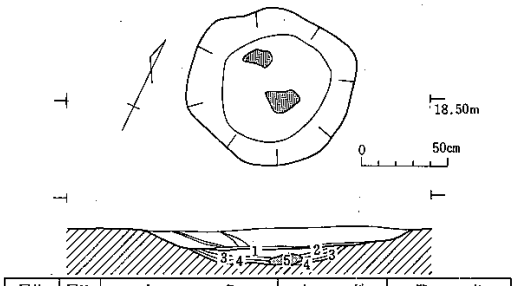


層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	にぶい黄色（2.5Y 5/3）	Mediam Sand	少し焼けている
第2層	2	黒 （10YR 1/1）		炭化物
	3	にぶい黄褐色（10YR 3/3）	Mediam Sand	
	4	黒 （10YR 1/1）	Mediam Sand	炭化物
	5	にぶい褐色（7.5YR 5/3）		焼土

第14図　第１焼土遺構

第2焼土遺構

ＢＨ－14、15区、第2土壙底面下で検出された。平面形は、径約1mの円形を呈し、深さは確認面から約20cmである。堆積土は大別して2層確認され、炭化物、焼土の混入が多い。壁の立ち上がりは緩やかで、底面はわずかに凹凸がみられ、全体に堅く焼けている。底面には、一辺20cmほどの焼土が2個認められた。出土遺物はない。



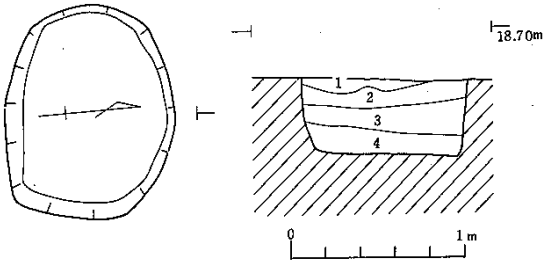
層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	オリーブ黄 （7.5Y 5/3）	Medium Sand	炭化物混入
第2層	2	黒 色 （1/1 10YR）		木炭，炭化物の層
	3	灰 白 （7.5Y 7/1）	Fine Sand	炭化物混入
	4	黒 褐 色 （7.5YR 3/2）	Silty F. Sand	
	5	にぶい赤褐色（2.5YR 5/3）		焼土と炭化物混入

第15図　第２焼土遺構

(4) 土壙

第1土壙

ＢＤ15区、層上面で検出された。平面形は、長軸約1.3m、短軸約1mの楕円形を呈し、深さは約45cmである。堆積土は、大別して1層だけである。出土遺物はない。

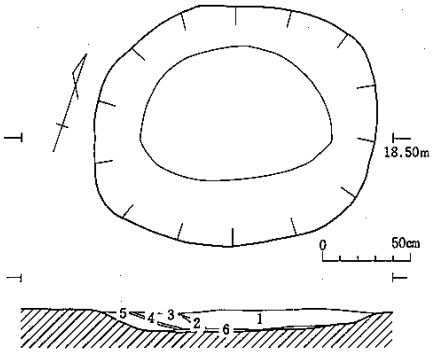


層No	土　色	土　性	備　考
1	灰　色(7.5Y⅖)	Silty lay	粘性あり
2	明青灰(10BG⅖)	bine Sand	
3	明青灰(10BG⅖)	〃	
4	明青灰(10BG⅖)	〃	

第16図　第１土壙

第2土壙

ＢＨ－14、15区、第Ⅳ層上面で検出された。平面形は、長軸約1.6m、短軸約1.4mの楕円形を呈し、深さは約12cmである。堆積土は、大別して2層確認された。底面には炭化物の分布が多い。出土遺物はない。



層　位	層No	土　色	土　性	備考
第１層	1	浅黄(7.5Y　⅖)	Medium Sand	
	2	黒　(10YR 1/7)		炭化物
	3	浅黄(5Y　⅖)	Medium Sand	
	4	黒　(10YR 1/7)		炭化物
	5	浅黄(7.5Y　⅖)	Medium Sand	
第２層	6	黒　(10YR 1/7)		炭化物

第17図　第２土壙

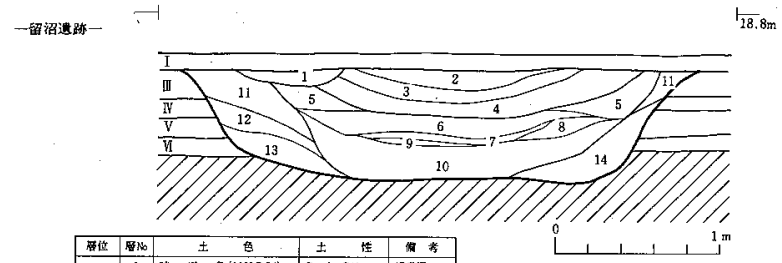
(5) 溝

第1溝

基本層位の第Ⅲ層上面で確認された。ＡＳ－14区からＡＰ－18区にかけて検出され、調査区外に延びている。上幅が約3.1m、底面幅が約2m、深さは約65cmで、断面形は角のつかない台形を呈している。堆積土は4層に大別され、レンズ状の堆積状況を示している。

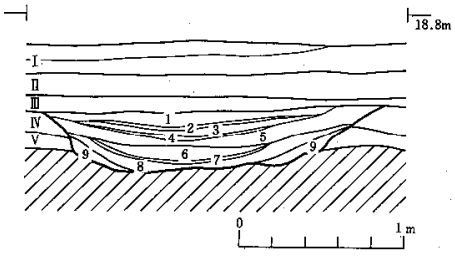
第2溝

基本層位の第Ⅳ層上面で確認された。ＢＡ－13区からＡＲ－18区にかけて検出され、第1溝に並走している。上幅が1.2m～1.5m、底面幅が約70cm、深さは約30cmである。堆積土は3層に大別され、レンズ状の堆積状況を示している。出土遺物はない。



層位	層No	土色	土性	備考
	1	暗褐色(10YR3/3)	Sandy Silt	攪乱層
第1層	2	明青灰(10BG 7/1)	Fine Sand	
	3	オリーブ黒(10Y 3/2)	Fine Sand	粘性あり
	4	明青灰(5BG 7/1)	Medium Sand	炭化物混入
第2層	5	明青色(10BG 7/1)	Fine Sand	粘性あり
	6	灰色(7.5Y 7/1)	Silty Clay	粘性あり
	7	黒(10YR 1/1)		炭化物混入
	8	明緑灰(10GY 7/1)	Fine Sand	粘性あり
	9	浅黄(7.5Y 7/3)	Medium Sand	
	10	灰白(7.5Y 7/1)	Silty Clay	粘性あり
第3層	11	明青灰(5BG 7/1)	Fine Sand	
	12	明緑灰(10GY 7/1)	Medium Sand	
	13	灰(7.5Y 5/1)	Fine Sand	
第4層	14	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	Medium Sand	

第18図　第　1　溝



層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	灰黄(2.5Y5/2)	Fine Sand	
	2	褐灰(10YR5/1)	Fine Sand	
	3	灰黄(2.5Y5/2)	Fine Sand	粘性あり
	4	褐灰(10YR5/1)	Fine Sand	
	5	灰黄(2.5Y5/2)	Fine Sand	
第2層	6	黄灰(2.5Y5/1)	Medium Sand	
	7	褐灰(10YR5/1)	Fine Sand	粘性あり
	8	浅黄(2.5Y7/3)	Fine Sand	粘性あり
第3層	9	褐灰(10YR5/1)	Fine Sand	粘性あり

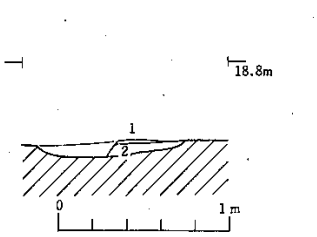
第19図　第　2　溝

第3溝

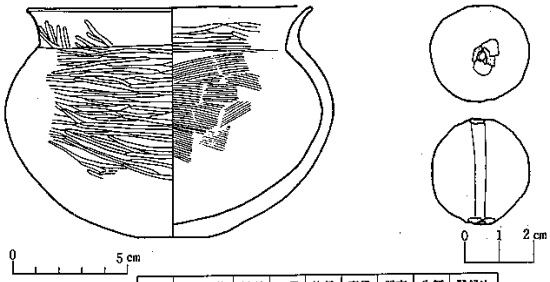
基本層位の第Ⅳ層上面で確認された。ＢＤ－14区からＢＦ－14区にかけて「く」字状に走っている。上幅は約20～90cm、底面幅は約10～15cm、深さは約5～10cmで、ＢＦ区に向かって幅が狭くなる。堆積土は2層観察される。2層上面から土師器甕数点、土錘が出土している。

甕（第20図1）最大径の位置が体部中央より僅かに上にあり、最大径が器高よりも大きいものである。底部は小さな平底で、体部は内弯気味に立ち上がり、頚部で屈曲し、口縁部は外反している。小型壺ともいえる器形である。器面調整は、外面と内面口縁部にヘラミガキ、体部にヘラナデが施されている。ヘラミガキは入念に施され、外面口縁部が縦、他は横位である。
外面には赤色塗彩が施されている。

土錘（第20図2）直径約2.9cmで球形をしており、中央部に径約2.5mmの貫通孔がある。この孔は一方から穿たれたもので、反対側にその際に生じた粘土のもり上がりがある。器面は、全体に丁寧に磨かれている。重さは23.7gである。



層No	土　色	土　性	備　考
1	灰オリーブ（5Y5/3）	layog F. Sand	
2	灰　（5Y4/1）	F. Sand	

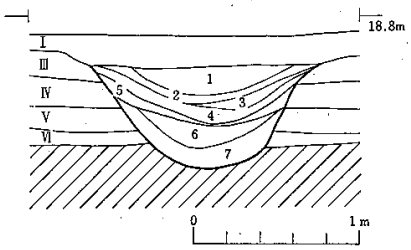


番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No
1	2層上面	甕	12.4	14.3	3.0	10.0	Ⅳ	81

第20図　第３溝

第4溝

基本層位の第Ⅲ層上面で確認された。ＢＩ－13～18区にかけて、調査区を横断して走っている。上幅が1～1.5m、底面幅が約30～50cm、深さは約60cmで、断面形は、「U」字形を呈している。堆積工は、3層に大別され、いずれも粘性が強い。



層位	層No	土　色	土　性	備　考
第1層	1	灰黄（2.5Y6/2）	Fine Sand	サラサラしている
	2	黒褐（2.5Y3/1）	Silt	粘性あり
	3	黄灰（2.5Y5/1）	Fine Sand	粘性あり
	4	黄灰（2.5Y5/1）	Silty F. Sand	粘性あり
第2層	5	灰白（5Y7/1）	Medium Sand	粘性あり
第3層	6	灰（5Y5/1）	Fine Sand	粘性強い
	7	灰（5Y5/1）	Fine Sand	粘性強い

第21図　第　4　溝

(6) 遺物に集中する地点

第1地点

ＢＡ17区に位置し、第Ⅴ層上面で確認された。一部基本層位を観察する際のサブトレンチによって壊されている。残存する規模は長軸1.8m、短軸1.2m前後で、平面形は不整円形を呈している。底面は僅かにくぼんで、炭化物の分布がみられる。

〔出土遺物〕土師器坏1点、甕2点、小型手捏ね土器2点がある。

坏（第23図1）底部は丸底で体部外面中央で屈曲し、対応する内面に稜をもっている。底部から屈曲部までは内弯気味で、口縁部は直線的に外傾する。一器面調整は、外面の底部から体部にかけて横位のヘラケズリののちヘラミガキが、口縁部では内外面とも縦位のヘラミガキが施されている。内外面とも赤色塗彩が施されている。

甕（第23図4、5）ともに最大径の位置が体部中央にあり、体部は球形を呈する。4は、最大径が器高より小さく、底部は平底で口縁部は直線的に外傾する。5は、底部を欠損し、口縁

部はゆるやかに外傾する。4の器面調整は内外面に縦位、斜位のヘラケズリを施し、体部外面ではその後、斜位のヘラミガキを施している。一方、5の器面調整は、内外面に刷毛目を多用し、外面口縁部ではその後、横ナデが施されている。刷毛目の方向は外面で、斜位、内面では横位である。内面体上部にはヘラナデもみられる。

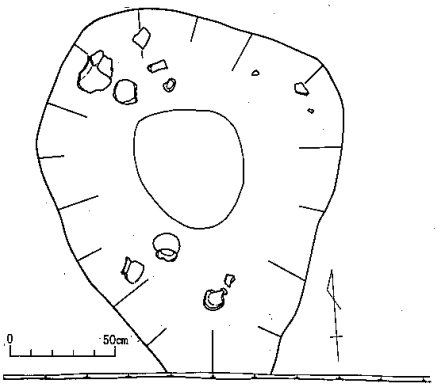
小型手捏ね土器（第23図2、3）ともに最大径位置が口縁部にある。2は尖底で外面で指頭による成形痕がみられる。3は、平底で外面に横位のヘラケズリ、内面にナデが施されている。

第2地点

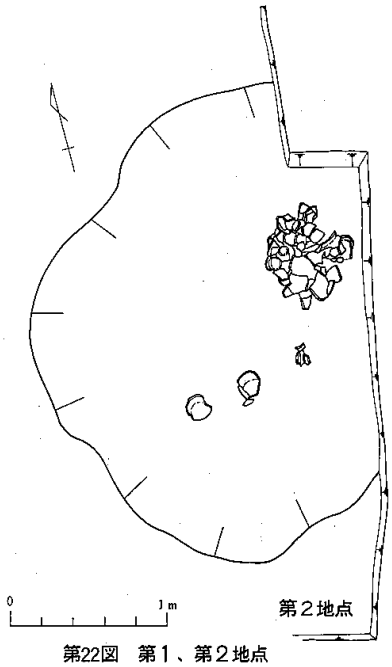
ＢＢ18～19区に位置し、第Ⅳ層上面で確認された。一部調査区外に広がるため、全体の平面形は不明であるが、炭化物の分布から、一辺3cm前後の不整方形が推定される。

〔出土遺物〕土師器甕が2点ある。

甕（第23図6、7）6は、最大径の位置が口縁部にあり、口縁部は複合口縁になっている。最大径は器高よりも大きい。底部はやや外に張り出す平底で、体部は上半で内弯気味になる。器面調整として、外面体部に雑なヘラケズリが、内面口縁部に横位のナデ、体部に斜位のヘラナデが施されている。7は、最大径の位置が体部中央にあり、体部は球形で、口縁部はゆるやかに外傾している。底部を欠損しているものの最大径が器高よりも大きいと思われる。器面調整として、外面口縁部には横ナデののちヘラナデが、体部にはヘラケズリののち斜位のナデが、また、内面は口縁部に横ナデ、体部に横位の位置にヘラナデが施されている。



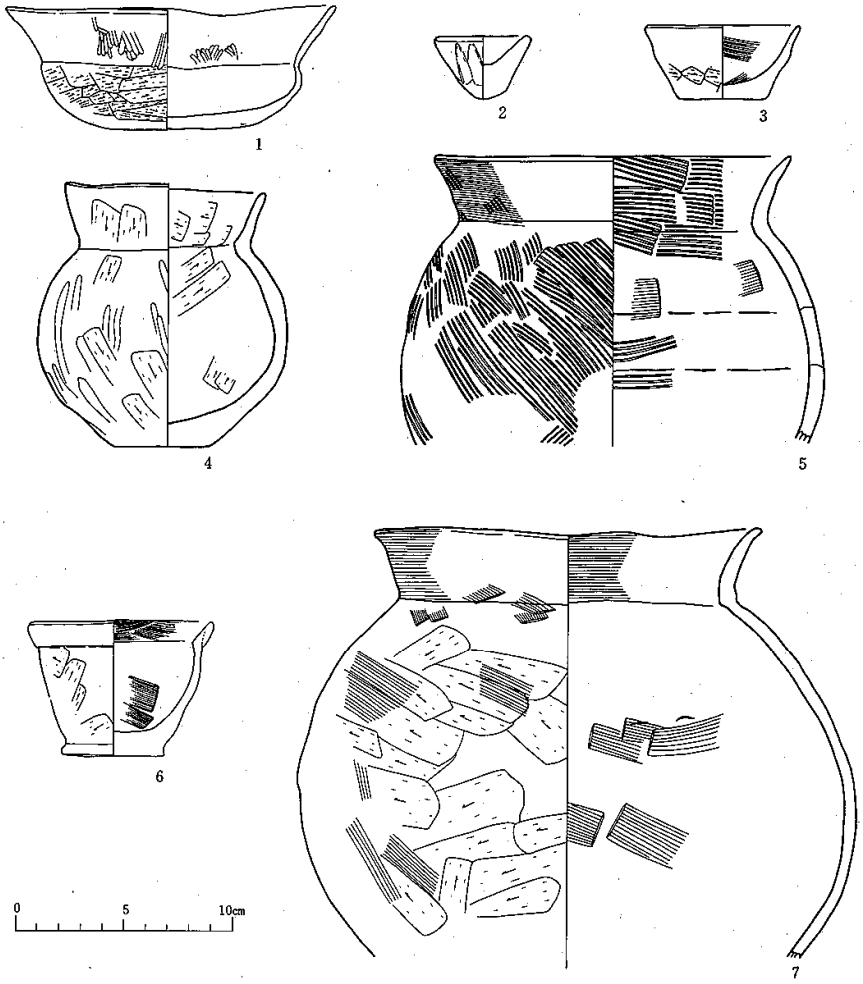
第１地点



第22図　第１、第２地点

第3地点

ＢＤ13区に位置し、第Ⅳ層上面で確認された。長軸1.5m、短軸1m前後の不整楕円形の範



番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No	番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No
1	底面	坏	15.1		5.0	5.6	Ⅱ	8	5	底面	甕	16.4	19.5		13.3<	Ⅲ	85
2	底面	手捏ね	4.4			2.9		30	6	底面	甕	8.5		4.7	6.3	Ⅰa	13
3	底面	手捏ね	7.1		4.0	3.4		10	7	底面	甕	17.9	25.6		20<	Ⅱ	12
4	底面	甕	9.1	11.5	4.4	12.2	Ⅱ	9	No1～No5 第1地点			No6～7 地2地点					

第23図　第1・第2地点出土遺物

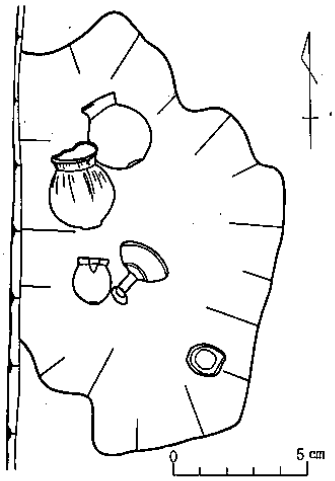
囲に炭化物の分布が認められ、底面が僅かにくぼんでいる。

〔出土遺物〕土師器高坏1点、甕3点がある。

高坏（第26図1）坏部は、体部と底部の境に稜を形成し、稜から上がゆるやかに外傾している。脚部は、中実の柱状部と円錐台の裾部からなっている。器面調整は、坏部外面が横ナデ、ナデののちヘラミガキ、内面が横ナデののちヘラミガキされている。脚柱状部はヘラミガキ、

脚裾部外面では、横ナデののちヘラミガキ、内面では横ナデが施されている。ヘラミガキは坏部で放射状に、柱状部では縦位に外面に施されている。

甕（第26図2～4）2は最大径の位置が体部中央にあり、最大径が器高よりも小さい。口縁部は直線的に外傾し、体部は球形で底部はややくぼんだ平底はややくぼんだ平底である。器面調整は、外面口縁部が横ナデののち縦位のヘラミガキ、体部が縦位のヘラケズりののち横、縦位のヘラミガキである。内面口縁部は横ナデののち横位のヘラナデ、体部は縦位のヘラミガキである。3は、最大径の位置が体部中央より僅かに下にあり、下ぶくらみの器形を呈するもので、最大径が器高よりも小さく、口縁部が複合口縁を呈している。器面調整は、外面口縁部には横ナデが施され、頚部、体部には縦位の刷毛目が施されている。内面は頚部、体中央部に刷毛目、体上部にヘラナデがいづれも横位に施されている。4は、頚部から直立気味に立ち上がり口縁部が僅かに外反する以外、器形的に3と同一である。器面調整は、外面口頚部に横ナデ、刷毛目ののち口縁部では横位に、頚部では縦位にヘラミガキが施され、体部は下端を除き縦位にヘラミガキが、下端にはヘラケズリが施されている。内面は頚部に横位の刷毛目、体上部、体下部に横位、縦位のヘラナデ、体中央部に横位の刷毛目が施されている。



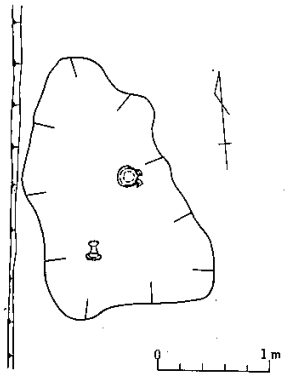
第24図　第３地点

第4地点

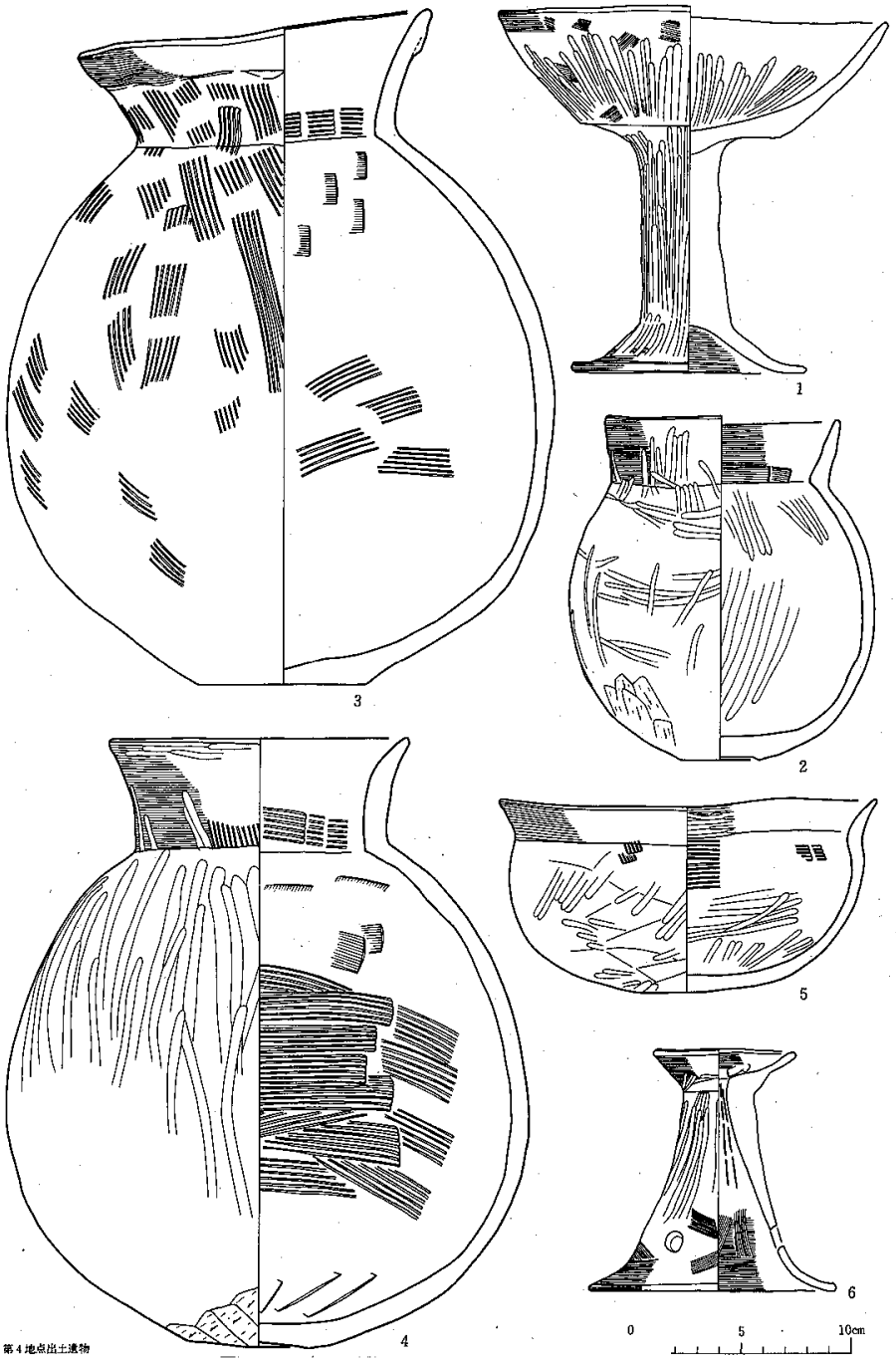
ＢＨ、ＢＩ－13区に位置し、第Ⅴ層上面で確認された。長軸2.3m、短軸1.3mの不整方形を呈し、炭化物の分布が認められる。

〔出土遺物〕土師器甕1点、器台1点がある。

甕：（第26図5）口縁部と体部の境に内外面ともに稜を形成する。底部は丸底で体部との境は不明瞭である。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反する。器面調整は、口縁部が内外面ともに横ナデののち横位のヘラミガキ、体部外面の縦位の刷毛目ののち横位のヘラケズリをして、上半部では縦位の、下半部では横位のヘラケズリが施されている。内面は上半部に横位



第25図　第４地点



第3・第4地点出土遺物

番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No	番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No	
1	底　面	高坏	17.7		10.6	16.7	Ⅱ	23	4	底　面	甕	13.6	23.7	5.5	27.8	Ⅵb	26	
2	底　面	甕	10.6	13.8	3.5	15.7	Ⅲ	24	5	底　面	坏	17.3			8.8	Ⅱb	21	第4地点
3	底　面	甕	16.2	24.9	7.6	29.9	Ⅵa	25	6	底　面	器台	13		22.6	22	Ⅱ	20	

第26図　第3・第4地点出土遺物

の刷毛目、体部に横位の、底部近くに放射状のヘラミガキが施されている。

器台（第26図6）受け部は口縁部に変化がなく開口するもので、脚部は末広がりの円錐台状を呈している。受け部に比して脚部のつくりは大きい。受け部と脚部の間には貫通孔がある。
また、脚部の下位には3個の円窓が穿たれている。器面調整は、受け部外面が横ナデののち不規則なヘラミガキ、内面が横ナデののちヘラナデである。脚部は外面の上半部に縦位のヘラミガキが、下半から裾部には横ナデ、ナデが施されている。内面上半部にはシボリ目痕が、下半には、横ナデののち縦位にナデが施されている。

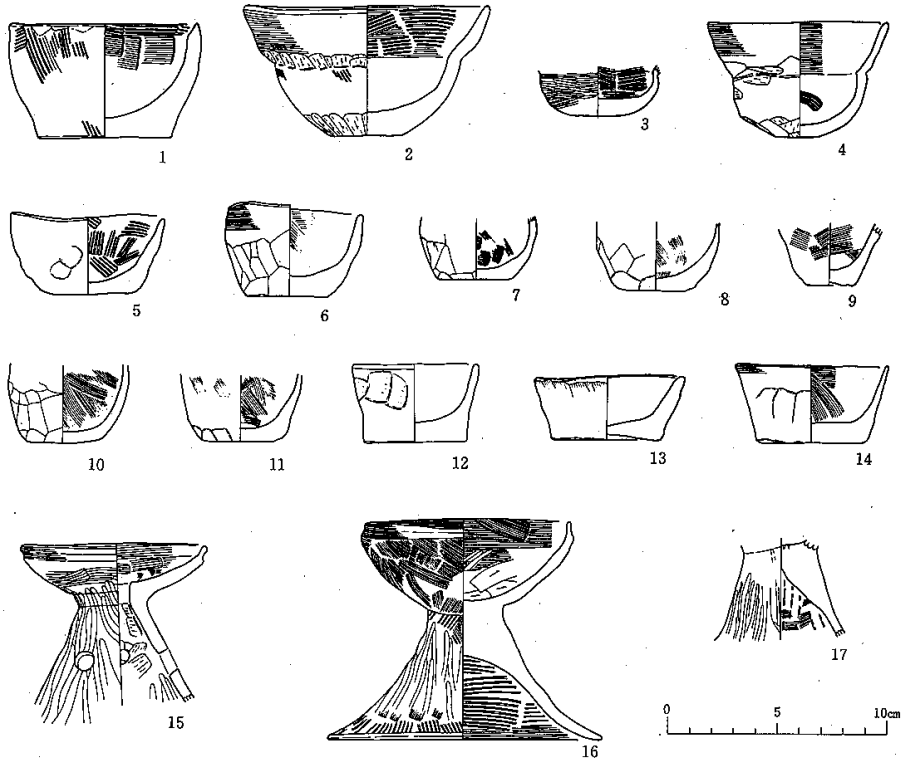
（7）遺構以外の出土遺物

基本層位の第Ⅳ層上面から出土したものが大部分で、層位不明のものが若干含まれる。完形、あるいはそれに近い形で認められるものが多い。土師器坏、小型手づくね土器、土師器器台、高坏、壺、甕、甑がある。以下順をおって述べる。

坏（第27図1～4）1は内面体上部に稜をもち、外面に屈曲をもたない。底部は平底で体部には指頭によるオサエがみられる。器面調整として外面には斜位の刷毛目が、内面は口縁部に刷毛目を施し、その後体部からヘラナデを施している。方向は横位である。2～4は内面体中央部に稜をもち、外面が屈曲している。底部は平底で屈曲部まで内弯気味に立ち上がり、口縁部は直立気味に外傾する。器面調整は、2が口縁部外面に刷毛目、横ナデののちヘラケズリを施し、体部に刷毛目ののちヘラケズリがいづれも縦位に施されている。内面は口縁部に横位の刷毛目が施されている。3は、口縁部を欠損しているため全体の器形を知り得ない。外面体部には横位のヘラミガキ、内面にはナデが施されている。内外面とも赤色塗彩が施されている。
4は、口縁部内外面に横ナデ、外面体部にヘラケズリ、内面にナデが不規則に施されている。小型手づくね土器（第27図5～14）底部はいづれも平底で、9を除いて器高に比して底径が大きく安定感があり、器形的には鉢型を呈している。体部に屈曲等はみられず、11～14は体部から口縁部まで直立気味になるもので他のものは内弯気味である。器面には、指頭による成形痕がみられ、5は内面に不規則な刷毛目が、6～11、14は、ナデが施されている。

器台（第27図15）裾部下半を欠損している。受け部は口縁部と体部の境に内外面ともに稜を形成し、口縁部は、直線的になる。脚部は円錐台状を呈するものと思われる。脚部のほぼ中央に3個の円窓が穿たれている。坏部と脚部の間には貫通孔が認められる。受け部は、口縁部内外面に横ナデ、外面体部に横位のヘラミガキ、内面に横位のヘラナデが施され、脚部は外面に縦位のヘラミガキ、内面上半にヘラケズリ、下半に縦位のヘラケズリが施されている。

高坏（第27図16、17）16の坏部のつくりは、15の受け部と同様である。脚部は坏部に比して

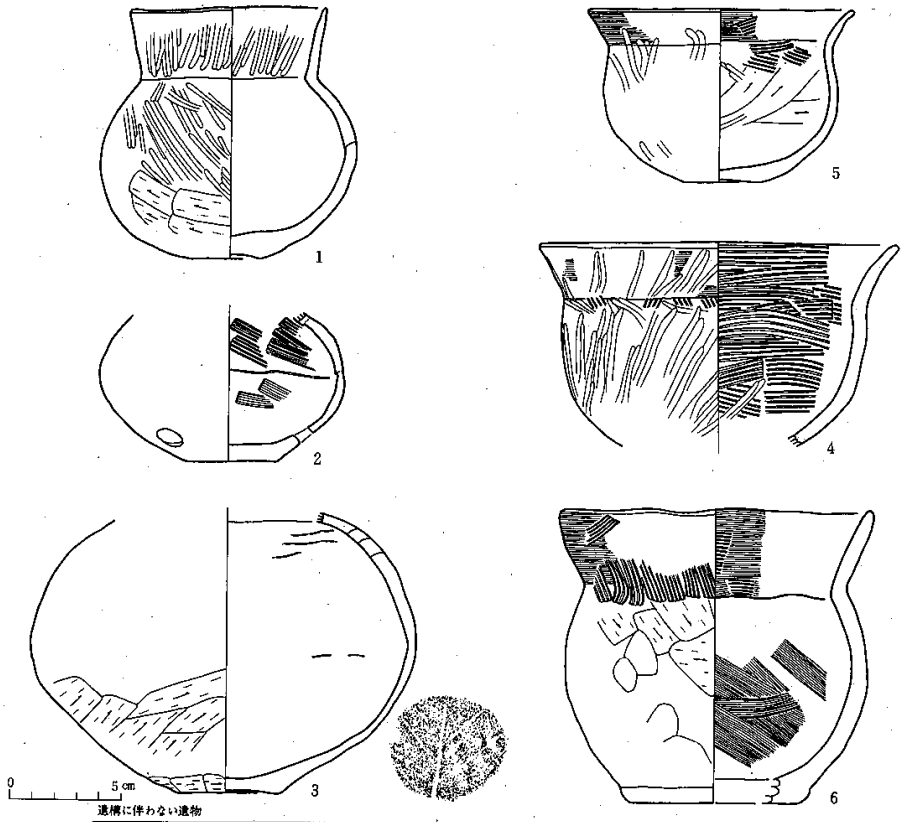


番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No	番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No
1	不　明	坏	8.6		6	5.2	Ⅲ	35	10	4層上面	手捏ね			3.4	3.5<		27
2	4層上面	坏	11.1		3	6	Ⅱ	19	11	4層上面	手捏ね			3.1	3<		29
3	4層上面	坏			2.4	2.2<	Ⅱ	3	12	4層上面	手捏ね	5.8		4.6	3.6		33
4	4層上面	坏	8.2		1.9	5.3	Ⅱ	8	13	4層上面	手捏ね	6.9		4.9	2.9		32
5	4層上面	手捏ね	7		3.4	3.8		72	14	4層上面	手捏ね	7		4.5	3.5		22
6	4層上面	手捏ね	6.2		3.6	4.3		2	15	4層上面	器　台	8.4		4.5	8<	Ⅰ	7
7	4層上面	手捏ね			3.2	2.8<		5	16	4層上面	高　坏	9.2		12.6	10.1	Ⅰ	74
8	4層上面	手捏ね			2.9	3.2<		29	17	4層上面	高　坏			12.6	4.5<		51
9	4層上面	手捏ね			2.1	2.5<		28									

第27図　遺構に伴わない遺物 (1)

大きく開く末広がりになっている。器面調整は、坏部の口縁部が内外面ともに横ナデ、体部から底部は外面が斜位のナデ、内面がナデののちヘラケズリ、ヘラミガキで、方向は斜位である。脚部の外面は縦位の刷毛目、ヘラナデののち縦位のヘラミガキ、内面は横位の刷毛目ののち横ナデが施されている。17は、脚部破片で裾部を欠損している。16同様に末広がりになるものと思われる。器面調整は外面が縦位のヘラミガキ、内面が横位のナデである。内面にはシボリ目が残っている。

壷（第28図1～3）1は、底部がややくぼむ平底で、体部はつぶれた球形を呈し、口縁部は直立気味になっている。器面調整は、口縁部が内外面とも縦位のヘラミガキ、体部外面は横位



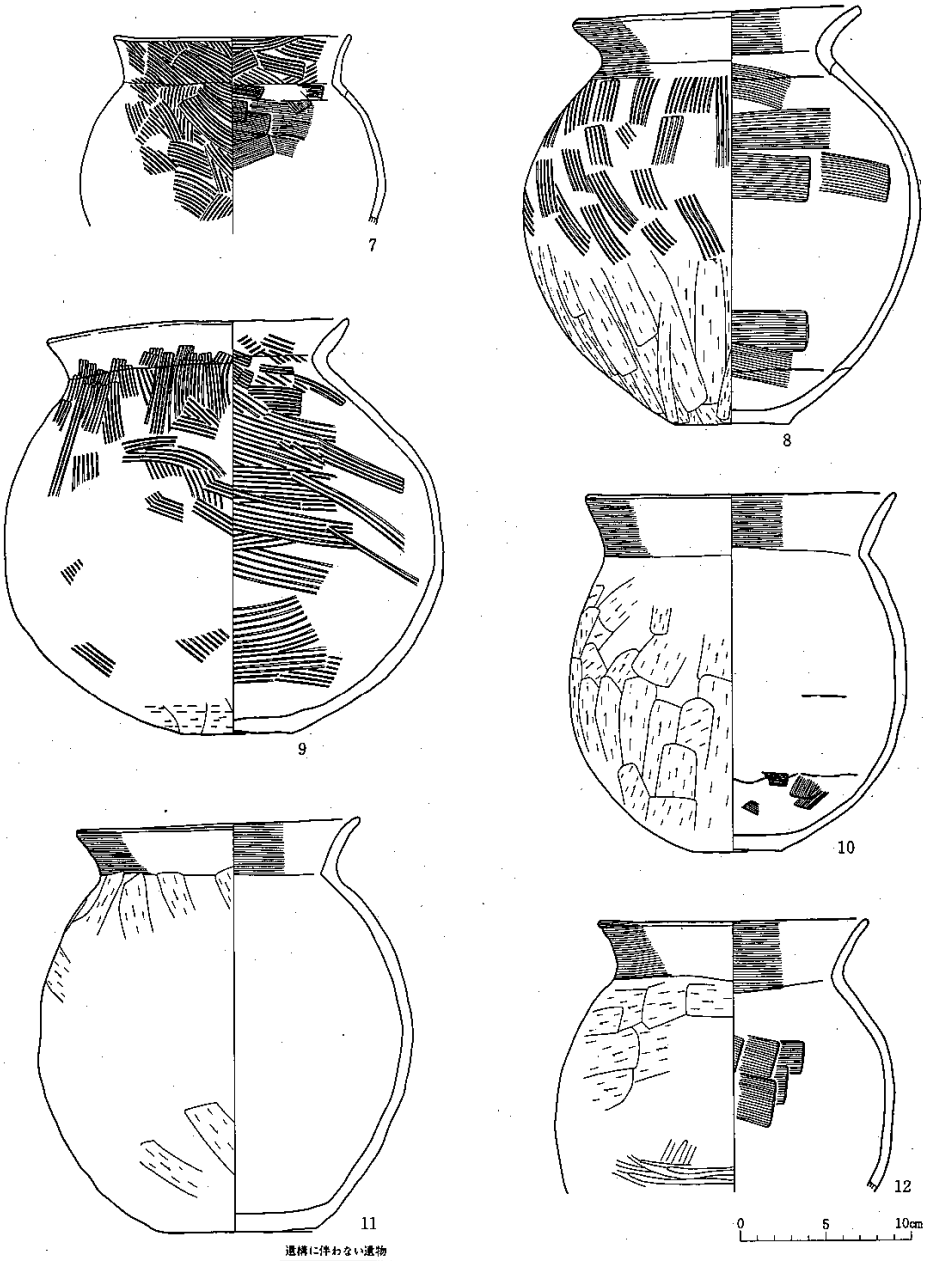
遺構に伴わない遺物

番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No									
1	3　面	壺	8.9	11.5	3	11.3	Ⅳ	34	4	4層上面	甕	16.1	13.4		9.2<	Ⅰb	70
2	4層上面	壺		11	4	6.6<	Ⅳ	11	5	4層上面	甕	12.9	10.6	3.4	7.8	Ⅰb	50
3	4層上面	壺		17.5	4.7	12.8<	Ⅳ	79	6	4層上面	甕	14.1	13.6	7.5	13.3	Ⅰb	71

第28図　遺構に伴わない遺物 (2)

のヘラケズリされたのち、斜位にヘラミガキが施されている。内面は不明である。2は、口縁部を欠損している。体部のつくりは1と同じであるが、下部に1個の孔が穿たれてい**鵺**。　の可能性も考えられるものである。器面調整は、外面が磨滅のため不明、内面には、上半に横位の刷毛目、下半にヘラナデが施されている。3は、口縁部を欠損している。器形的に1、2と同じである。体中央部より僅かに下の部分で器壁が薄くなっている。器面調整として外面体部下半に横位、斜位のヘラケズリ、底部には木葉痕が観察される。

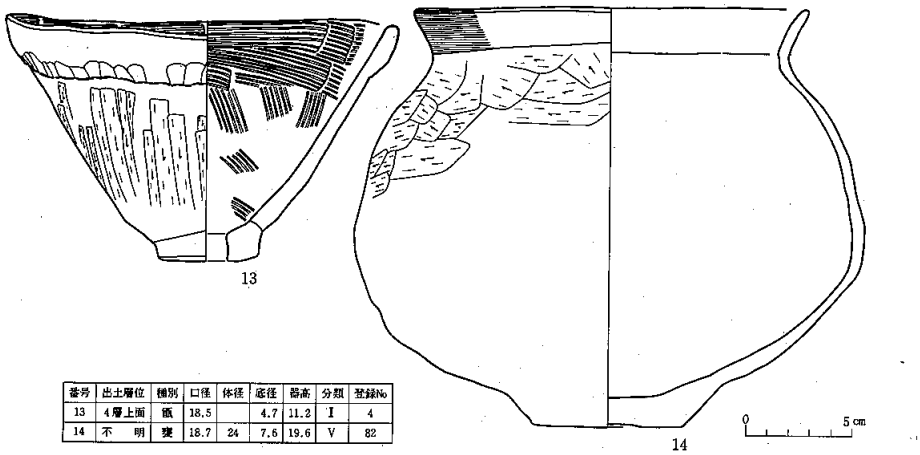
甕（第28図4～6・第29図7～12・第30図14）4～6は最大径の位置が口縁部にあり、器高よりも大きいものである。4は、底部を欠損している。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるやかに外反している。器面調整は、外面口縁部に横ナデ体部に刷毛目を施したのち、縦位のヘラミガキが施されている。内面には横位の刷毛目を施したのち、僅かにヘラミガキが



遺構に伴わない遺物

番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No
7	不　明	甕	13.9	17.9		11.3<	Ⅱ	84
8	4層上面	甕	16.8	23.1	6.6	24.6	Ⅲ	69
9	4層上面	甕	17.7	25.5	6.3	24.3	Ⅱ	1
10	4層上面	甕	18.2	19.7	5	21.1	Ⅲ	6
11	4層上面	甕	16.6	21.8	8.8	24.4	Ⅲ	80
12	不　明	甕	15.8	19.6		16<	Ⅲ	66

第29図　遺構に伴わない遺物 (3)



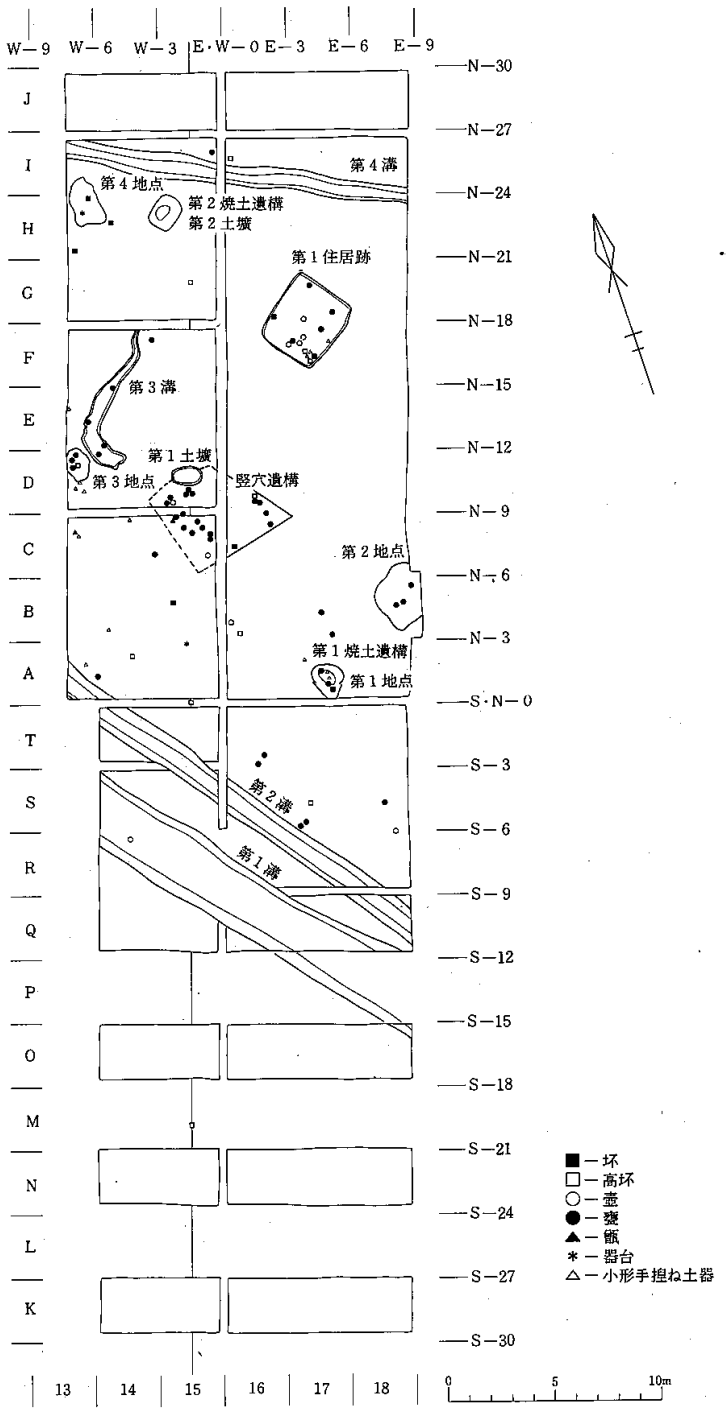
番号	出土層位	種別	口径	体径	底径	器高	分類	登録No.
13	4層上面	甕	18.5		4.7	11.2	Ⅰ	4
14	不　明	甕	18.7	24	7.6	19.6	Ⅴ	82

第30図　遺構に伴わない遺物 (4)

みられる。5は、器形的に4と同様であり、底部は平底を呈している。器面調整は、外面口縁部が横ナデののち縦位のヘラミガキ、内面が横位の刷毛目ののち横ナデが施されている。外面体部には、縦位のヘラミガキ、体部には、横位の刷毛目ののち不規則なヘラケズリ、斜位のヘラミガキが施されている。6は、体部器形は4、5と同様であるが、口縁部は「く」字状に外傾している。器面調整は、外面に縦位の刷毛目を施したのち、口縁部では横ナデ、体部では不規則なヘラケズリを施している。内面口縁部は横位の刷毛目が施されたのち、横ナデが、体部には斜位のナデが施されている。

また、7～9は、最大径の位置が体部中央にあり体部が球形を呈するもので、口縁部は「く」字状に外反、外傾している。7は、体部下半から底部を欠損しているものの全体の器形を知るのに不備ではない。個々にみてみると、7は、外面全体と内面口縁部に斜位の刷毛目が、体部に横位のヘラナデがみられる。8では、外面の体部に刷毛目を縦位に施したのち、口縁部に横ナデ、体部に縦位のヘラケズリを施している。底部はヘラケズリされている。
内面は口縁部に横ナデ、体部に横位のヘラナデである。9は、外面体部下端と底部に横位のヘラケズリを最終的に施しているが、その前に全面に刷毛目を、外面では縦位、斜位に、内面では横位、斜位に施している。

10～12は、最大径が体部中央にあり、最大径が器高より小さいものである。体部は7～9までのものに比べてややゆがんだ球形を呈している。口縁部は「く」字状に屈曲するものが多い。器面調整は、いづれも刷毛目の使用がない。個々の調整をみると、10は、口縁部が内外面とも横ナデで体部は外面が縦位のヘラケズリ、内面が横位のヘラナデである。11、12は、ともに内



第31図　各遺物の出土地点

外面口縁部に横ナデ、外面体部に縦位、斜位のヘラケズリを施し、11では底部にもヘラケズリが施されている。10の内面体下部には横位、斜位にヘラナデがみられる。12は、口縁部が内外面とも横ナデで、外面体部の上半には横位のヘラケズリが、下半には縦位、横位のヘラミガキが施されている。内面には横位のヘラナデがみられる。

14は、最大径の位置が体部中央より僅かに下にあり、これまでの護に比べて下ぶくらみの感じが強く、底部はやや下に突き出す平底を呈し、口縁部は外傾している。器面調整は、外面口縁部に横ナデ、体部には横位、斜位にヘラケズリが施されている。内面については剥落が著しくて不明である。

甑（第3図13）単礼式のもので口縁部が複合口縁で、鉢型を呈し、底部から口縁部まで直線的され、内面は口縁部に横位の、体部に斜位、横位の刷毛目が施されている。

Ⅳ　出土遺物と遺構の考察

1. 土師器の分類

土師器は各遺構、遺物包含層中から多数出土しており、本遺跡出土遺物の大部分を占めている。器種には高坏、器台、坏、壺、甕、甑の6種類がある。ここでは、各地区、各遺構から出土したもので、図示できたものを対象に分類を行なってみる。なお、先の6器種は、いづれも通常使用されている概念を基準としているが、壺には坩といわれるものを含み、甕にはこれまで壺とされていたもので、甕と明確に区別でき得ないものを含んでいる。

高坏

図示できたものが7点ある。このうち、坏部と脚部が接合して全体の器形の判明しているものは2点だけである。そのため坏部の類別を基準とし、それに脚部の類別を付け加える形で分類を行なう。

〈坏部の類別〉坏部は器形上の特徴からＡ～Ｃの3つに分けられる。

Ａ：口縁部と体部の境に内外面とも稜を形成するもの。

Ｂ：体部と底部の境に稜を形成するもの。

Ｃ：体部に稜、くびれがなく、体部と底部の境が不明瞭なもの。

〈脚部の類別〉脚部には1～2の2つの形態が認められる。

1, 円錐台状を呈するもの。

2, 中実の柱状部と裾部からなるもの。

坏部と脚部の分類は、上述のようになりこれらの組み合わせから高坏は以下のように分類さ

れる。

Ⅰ類：A＋1

Ⅱ類：B＋2

Ⅲ類：C＋2

〈高坏Ⅰ類〉

坏部が口縁部と体部の境に内外面とも稜を形成し脚部が円錐台状を呈するものである。坏部の口縁部は直立気味になり、底部から体部は内弯気味に立ち上がる。脚部は坏部に対して大きく開き末広がりになっている。器面調整は坏部外面口縁部に横ナデ、体部にナデ、内面口縁部に横ナデののちヘラナデ、体部にナデ、ヘラケズリののち、ヘラミガキが施されている。脚部の外面は縦方向のヘラミガキが、内面には、ナデ、横ナデが施されている。ヘラミガキ、横ナデの前段階の調整である刷毛目が認められるものもある。

〈高坏Ⅱ類〉

坏部が体部と底部の境に稜を形成し、脚部が中実の柱状部と裾部からなるものである。坏部は体部から口縁部まで直線的に外傾している。脚部は柱状部が直立し、裾部はわずかに外に開いている。器面調整として坏部は、内外面とも入念な縦方向のヘラミガキが施されている。内外面ともヘラミガキの前段階の調整としてナデ、横ナデが残っているものもある。脚部は、外面が縦方向の入念なヘラミガキが施され、内面には横ナデが施されている。

〈高坏Ⅲ類〉

坏部が、体部に稜、くびれがなく、体部と底部の境が不明瞭で、脚部が中実の柱状部と裾部からなるものである。坏部は屈曲をもたず、底部から口縁部まで直線的に外傾し、脚部はⅡ類と同様であるが、Ⅱ類に比して柱状部はやや短い。器面調整は、坏部外面が横ナデ、ナデののち縦方向のヘラミガキが施され、内面にナデが施されるものと、外面に縦方向の刷毛目ののち横ナデ、ヘラケズリが施され、内面に横ナデののち体部中央では放射状の、下半ではナデののち、横方向のヘラミガキが施されるものがある。脚部は柱状部下半に縦方向のヘラケズリ、上半が縦方向のヘラミガキである。坏部、脚部とも内外面に赤色塗彩が施されている。

器台

2点だけの出土であるが、器形的に異なっているので分類を行なう。いずれも受け部と脚部が接合しており、全体の器形を知り得る。

〈器台Ⅰ類〉

受け部、脚部の器形は高坏Ⅰ類と同様であり、脚部に3個の円窓がついているものである。円窓の位置は全体の器高のほぼ中央部である。受け部と脚部の間には貫通孔がみられる。器面

調整は外面の受け部、口縁部に横ナデ、体部中央に横方向のヘラミガキ、受け部と脚部との接合部から脚部にかけては縦方向のヘラミガキが施されている。内面は受け部口縁部に横ナデ、体部に横方向のナデ、脚部は上半にヘラケズリ、下半に縦方向のヘラミガキが施されている。シボリ目が残っている。

〈器台Ⅰ類〉

受け部は、口縁部に変化がなく開口し、脚部は裾広がりの円錐台状を呈するものである。全体的には坏部に比して脚部が長くなっている。Ⅰ類同様に貫通孔、3個の円窓をもつが、円窓の位置は全体の器高の$^{1}/_{3}$以下のところである。器面調整は受け部外面が、横ナデののちヘラミガキ、内面は横ナデののちナデ、脚部は外面上半に縦方向のヘラミガキ、下半に横ナデ、ナデが施され、内面は下半に横ナデののち縦方向のナデが施されている。上半にはシボリ目が残っている。

坏

図示できたものが10点ある。いづれも製作に際し、ロクロを使用していない。

器形上の特徴によりＡ－Ｃの3つに分けられる。

Ａ．内面に稜をもち、外面が屈曲するもの。

Ｂ．内面に稜をもち、外面が屈曲しないもの。

Ｃ．内外面に稜、屈曲をもたないもの。

また、稜、屈曲をもつものは、その位置によって1～2の2つに分けられる。

1．稜および屈曲の位置が体上部のもの。

2．稜および屈曲の位置が体中央部のもの。

そして、これらの組み合わせから、坏は以下のように分類できる。

Ⅰ類：Ａ＋1

Ⅱ類：Ａ＋2

Ⅲ類：Ｂ＋1

Ⅳ類：Ｃ

〈坏Ⅰ類〉

内面に稜をもち対応する外面が屈曲するもので稜が体上部に位置するものである。底部型態の違いからａ類、ｂ類に細分できる。各々1点づつ認められる。

Ⅰａ類：小型のもので底部形態は平底を呈する。体部は内弯気味に立ち上がり稜から上の口縁部は直立気味に外傾している。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ体部は内外面ともナデである。

Ｉｂ類：底部形態は丸底を呈し、Ｉａ類に比して大形である。体部との境は明瞭でなく、底部から丸味をもって立ち上がり、稜から上の口縁部がやや外反している。器面調整は外面口縁部に横ナデののちヘラミガキ、体部から底部に刷毛目、ヘラケズリののちヘラミガキが施されている。ヘラミガキの方向は体上部で縦方向、下部では横位である。内面は口縁部の横ナデののちヘラミガキ、体部から底部に上半では横位のヘラミガキ、下半では放射状のヘラミガキが施されている。体上半には横位の刷毛目も残っている。

〈坏Ⅱ類〉

内面に稜をもち対応する外面が屈曲するもので、稜が体中央部に位置するものである。底部は平底で屈曲部まで内弯気味に立ち上がり、口縁部は直立気味に外傾する。体下部で器壁が薄くなり屈曲部から口縁部にかけて器壁の厚くなるものもある。器面調整は、内外面ともヘラミガキされるものが多いが、外面口縁部に横ナデ、刷毛目、ヘラケズリが、体中に刷毛目、ヘラケズリが、内面口縁部に横ナデののち刷毛目、ナデが施されているものもある。ヘラミガキされているものは、前段階にヘラケズリや横ナデが施されているものが多い。内外面に赤色塗彩の施されるものもみられる。

〈坏Ⅲ類〉

体上部内面に稜をもち、外面が屈曲しないものである。底部は平底で、体部から口縁部まで直立気味に立ち上がり内面の稜から上の口縁部はつまみ出されたような状態を呈している。器面調整としては外面に縦および横方向の刷毛目、内面口縁部に横方向の刷毛目、休部にヘラナデが施されている。外面口縁部には指頭によるオサエの痕跡も認められる。

〈坏Ⅳ類〉

内外面に稜、屈曲をもたないものである。底部は平底で、体部から口縁部まで内弯気味に立ち上がり、いわゆる椀形を呈している。器面調整は外面が磨滅のため判然としないがヘラミガキか施され、体部下半にはヘラケズリが施されている。内面の口縁部から体部上半にはナブ、ヘラナデが横位、縦位に認められる。

壺

口縁部の型態により大きくＡ・Ｂの2つに分けられる。

Ａ：複合口縁のもの。

Ｂ：単純口縁のもの。

また、単純口縁のものは、口縁部、体部の特徴から1～3の3つに分類できる。

1. 口縁部が外反するもの。
2. 体部が球形のもの。
3. 体部が楕円形のもの。

そして前記の組み合わせから壷は以下のように分類される。

Ⅰ類：Ａ

Ⅱ類：Ｂ＋1

Ⅲ類：Ｂ＋2

Ⅳ類：Ｂ＋3

〈壺Ⅰ類〉

口縁部が複合口縁を呈するものである。口頸部から体上部の破片で、全体の器形については坏である。口径が18.4cmと壺類の中では大形のものである。器面調整は、外面口縁部が横ナデののち口縁部上半が横方向のヘラミガキ、下半から体上部にかけては縦方向のヘラミガキが施されている。内面の口縁部は、上半が横ナデののち縦方向のヘラミガキ、下半から体上部に斜位の刷毛目が施されている。

〈壺Ⅱ類〉

単純口縁で外反する短い口縁部をもつものである。体部下半から底部を欠損しているがⅠ類同様に大形のものである。器面調整は外面口縁部が横ナデののち縦、横位のヘラミガキ、体部がヘラナデののち縦方向のヘラミガキである。内面は、口縁部に横ナデののちヘラナデ、体部に斜位のヘラナデが施されている。

〈壺Ⅲ類〉

単純口縁で体部が球形のものである。底部は平底を呈し、口縁部はⅡ類に比して長く直線的に外傾しており、いわゆる坩と呼ばれているものである。器面調整は口縁部が横ナデののちヘラミガキ・体部はヘラミガキ・底部はヘラケズりされている。ヘラミガキは縦方向で入念に仕上げられている。内面の口縁部は刷毛目ののちヘラミガキされるものと横ナデ、ヘラナデののちヘラミガキされるものがある。体部にはヘラナデの施されるものが多い。

〈壺Ⅳ類〉

単純口縁で体部が楕円形（つぶれた球形）のものである。全体の器形が判然とするものは1点しかないが、これは、Ⅱ類に比して口縁部は長いがⅢ類ほどではない。底部は平底を呈し、やや上げ底気味のものもみられる。体中央部より僅かに下の部分で器壁が薄くなるものもみられる。また、焼成後に体下部に孔の穿たれているものもみら瓦泉　　の可能性が考えられるものを含んでいる。器面調整は、外面は口縁部から体部上半に縦方向のヘラミガキ、体部下半から底部に横位・斜位のヘラケズリが施されている。内面は、口縁部に縦方向のヘラミガキ、体部に斜位の刷毛目・ヘラナデの認められるものがある。底部に木葉痕の認められるものも1点ある。

甕

出土遺物の中で最も多い器種で図示できたものが40点ある。最大径の位置により、A～Dの4つに分けられる。

A．最大径の位置が口縁部にあるもの。

B．最大径の位置が体部中央にあるもの。

C．最大径の位置が体部中央より僅かに上にあるもの。

D．最大径の位置が体部中央より僅かに下にあるもの。

また、最大径と器高においては、次の2通りがある。

1．最大径が器高よりも大きいもの。

2．最大径が器高よりも小さいもの。

そして、これらの組み合わせから甕は以下の6類に分類される。

Ⅰ類：A＋1

Ⅱ類：B＋1

Ⅲ類：B＋2

Ⅳ類：C＋1

Ⅴ類：D＋1

Ⅵ類：D＋2

〈甕Ⅰ類〉

最大径の位置が口縁部にあり、最大径が器高よりも大きいものである。口縁部型態によりａ、ｂの2類に細分される。

Ⅰa類：口縁部が複合口縁のものである。口縁部を折り返すことによって複合部を造っている。底部は平底でやや外に張り出し、体部は直線的に外傾している。他の類に比して小形である。器面調整は、口縁部外面にナデ、体部にヘラケズリ、底部にナデが施されている。内面は口縁部にナデ、体部にヘラナデがみられる。調整の方向はいずれも斜位である。

Ⅰｂ類：口縁部が単純口縁のものである。底部は平底で、体部は丸味をもちながら内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反するものと外傾するものがある。器面調整は、外面が横ナデ、刷毛目ののちヘラミガキされるものや、ヘラケズリだけのもの、刷毛目だけのものがある。内面は刷毛目ののち横ナデ、ヘラナデ、ナデ、ヘラケズリされるものがある　刷毛目は外面で縦位に、内面では横位に施されている。他の調整は斜位のものが多い。

〈甕Ⅱ類〉

最大径の位置が体部中央にあり、最大径が器高よりも大きいものである。口縁部は「く」字状に外反するものが多く、直立気味のものもみられる。体部は球形を呈し、底部は平底である

器面調整は、体部外面に刷毛目を施すものと、ヘラケズリを施すものと、全面にヘラミガキを施すものがあり、刷毛目のものが最も多い。各調整の方向に規則性はない。また、刷毛目のものは、内面調整にも刷毛目を施すものが多く、ヘラナデ、ナデを施すものもわずかにみられる。ヘラケズリのものでは、横ナデ、ヘラナデの施されるものが多い。

〈甕Ⅲ類〉

最大径の位置が体部中央にあり、最大径が器高よりも小さいものである。口縁部はⅡ類同様に「く」字状に外反するものが多い。俸部器形は球形を基調としているものの、Ⅱ類に比してゆがんでいる。底部は平底でやや上げ底気味のものもみられる。器面調整は、体部にヘラケズデが多用されており、ヘラミガキのものは少ない。

〈甕Ⅳ類〉

最大径の位置が体部中央より僅かに上にあり、最大径が器高よりも大きいものである。底部は小さな平底で、体部は内弯気味に立ち上がり、頚部で屈曲し、口縁部は外反している。小形壺ともいえる器形である。器面調整は、外面と内面口縁部にヘラミガキ、体部にヘラナデが施されている。ヘラミガキは入念に施され、外面口縁部が縦、他は横位である。外面には赤色塗彩が施されている。

〈甕Ⅴ類〉

最大径の位置が体部中央より僅かに下にあり、最大径が器高よりも大きいものである。底部は下に突き出す平底で、体部はゆがんだ球形を呈し、口縁部は僅かに外反する。器面調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はナデである。

〈甕Ⅵ類〉

最大径の位置が体部中央より僅かに下にあり、最大径が器高よりも小さいものである。全体として下ぶくらみの感じがする。口縁部の特徴からａ、ｂの2類に細分される。

Ⅵａ類：口縁部が複合口縁のものである。口縁部に粘土紐を貼りつけることによって複合部をつくっている。器面調整は外面口縁部に横ナデ、体部に縦位の刷毛目、内面は口縁部に刷毛目体部上半にヘラデ、下半に刷毛目が施されている。方向は横位である。

Ⅵｂ類：口縁部が単純口縁のものである。口縁部は、外反するもの、外傾するものがある。体部器形はａ類と同様であるが、体部に3個の穿孔が焼成後になされているものもある。器面調整は、口縁部外面に横ナデのものが多く、その後、縦方向の刷毛目、ヘラミガキを施すものもみられる。体部は、刷毛目ののちヘラケズリされるもの、さらにヘラミガキされるもの、ヘラケズリののちナデの施されるものと多様である。内面口縁部は刷毛目、横ナデ、体部には刷毛目、ヘラナデ、ナデの施されるものがある。調整の方向は横位である。

〈甑Ⅰ類〉

単礼式で口縁部が複合口縁を呈している鉢型のものである。底部から口縁部までやや丸味をもって内弯気味に立ち上がるものと、直線的に外傾するものがある。器面調整は、体部外面に縦位のヘラケズリが施され、内面には、刷毛目、ヘラナデか施されている。

2. 各遺構における土師器の組み合わせ

前項において分類された土師器が、各遺構においてどのような組み合わせを示すかを見ていきたい。

竪穴住居跡は前述したように、床面、壁面の状況などから火災によって消失したものと考えられ、床面上に認められる多数の土師器は住居廃絶時と密接な関係を示し、限定された時期のセットとして把握することが可能である。器種としては、坏Ⅰａ、Ⅱ類、高坏Ⅲ類、壺Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ類、甕Ⅰｂ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳｂ類があり、器台と甑を欠いている。

次に、竪穴住居跡ほど遺物の同時存在に確実性はないが、竪穴遺構の遺物を見てみる。西半部分については、一次調査の際に調査範囲が狭すぎたことなどの制約もあり、遺構としての把握が困難であったが、遺物については同一層位面に横だおしか立位で出土するものが多く、東半部分の出土状況と極めて類似することから、時期的にまとまりを示す一群と考えることが可能と思われる。器種としては、坏Ⅱ類、高坏Ⅱ類、壺Ⅲ類、甕Ⅰｂ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳｂ類、甑Ⅰ類があり、器台を欠いている。

また、第1～第4地点における遺物の組み合わせをみると、第1地点からは坏Ⅱ類、甕Ⅱ、Ⅲ類が、第2地点からは甕Ⅰａ、Ⅱ類が、第3地点からは高坏Ⅱ類、甕Ⅲ、Ⅳｂ類が、第4地点からは坏Ⅰｂ類、器台Ⅱ類が出土している。各地点とも遺物は完全な形で出土するものが多いが、器種の組み合わせ、量ともに、竪穴住居跡出土のものに比して少ない。

以上のような各遺構における土師器の組み合わせをまとめたのか下に示した表である。共伴関係の明確な竪穴住居跡出土の遺物を媒介として各遺構における遺物を抽出すると、坏Ⅰａ、Ⅱ類、高坏Ⅱ、Ⅲ類、壺Ⅰ～Ⅲ類、甕Ⅰｂ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ類、甑Ⅰ類が指摘でき、これらの器種はほぼ近接した年代幅の中で処理でき得るものと考えられる。

土師器の組み合わせ

遺構	種別 / 層位	坏			高坏		器台	壺			甕						甑
		Ⅰa	Ⅱb	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰa	Ⅰb	Ⅱ	Ⅲ	Ⅵa	Ⅵb	Ⅰ
第1住居	4	○		○		○		○	○	○		○	○	○		○	
第1竪穴	4			○	○					○		○	○	○		○	○
第1地点	5			○									○	○			
第2地点	4										○		○				
第3地点	4				○									○	○	○	
第4地点	5		○				○					○					

3. 土師器の年代

これまでに、土師器を分類し、その組み合わせを検討してきた。ここでは、土師器の年代について述べてみたい。

本遺跡出土の土師器には、共伴関係の明らかなものと、そうでないものとがある。しかし、総じて各器種の器形、調整などの諸特徴をみると、ある限定された時期の所産である可能性が強く感じられる。そこで、これらの土師器が他の遺跡でどのようなあり方を示しているのかを共伴関係の指摘できるものから検討してみたい。

県内において類似資料を出土する遺跡で報告のなされているものとして、蔵王町大橋遺跡（藤沼:1971）、名取市西野田遺跡（丹羽他：1973）、志波姫町宇南遺跡（斎藤：1979・遊佐：1980）をあげることができる。大橋では、坏、高坏、壺、器台、甕、台付甕のセットが、西野田では、高坏A、B、C類、壺C、D、E類、器台A、C_1、C_2類、甕A_1、A_2類が最も安定した組み合わせとして、宇南では、坏、壺、甕、甑のセットがある。

坏から検討を始める。坏Ⅰa類は大橋、宇南で類似資料が認められる。坏Ⅱ類は大橋、西野田で類似資料が認められ、大橋ではⅠa、Ⅱ類が共伴している。数としてはⅠａ類の方が多い。

高坏をみてみる。高坏Ⅱ類は西野田高坏B類と坏部のつくりが類似し、Ⅲ類は西野田高坏A類と極めて類似した器形を呈している。大橋、宇南には本類の高坏は認められない。

壺ではⅢ・Ⅳ類のいわゆる坩と呼ばれるものが、各遺跡に共通した器形である。大橋、西野田･宇南ではこの壺と複合口縁で外面頚部に明瞭な段をもつ壺が共伴している。中でも、大橋のものは頚部つけ根に刻目のある隆帯がめぐっている。一方、本遺跡の複合口縁を呈するⅠ類は外面に明瞭な段を認め難い。

甕は、Ⅱ類と類似のものが、大橋、西野田で、Ⅲ類と類似のものが宇南で、Ⅳ類と類似のものが西野田で認められる。大橋の甕は大部分がⅡ類と類似のものである。しかし、器形的には似ているものの調整を含めてみると、大橋、西野田、宇南のものは外面に刷毛目を施すのに対して、本遺跡のものは刷毛目ののちにヘラケズリを施す点で違いがみられる。

甑は、各遺跡ともに器形的に共通性を示す。調整では、大橋、西野田が外面に刷毛目、宇南と本遺跡のⅠ類はヘラケズリを施すという違いがある。

次に、共伴関係がなく、単独で出土した各器種各類について検討を加える。

坏Ⅲ、Ⅳ類は大橋に類例がみられるが他の遺物との共伴については不明である。西野田、宇南では坏の出土量が少なく、比較し得るものが認められない。

高坏Ⅰ類は、脚部が円錐台状を呈する点で、大橋のものに類似するが、脚部に円窓をもたない点で異なる。西野田の高坏C類と類似しているが、脚部の開きぐあいを比較すると、本遺跡のものの方が大きい。

器台Ⅰ類は、大橋、宇南のものに類似しているが、受部のつくりがやや異なっている。Ⅱ類は基本的にはⅠ類の脚部を長くしたものであるが、あまり類例を見ない。

甕Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ類については、大橋、西野田、宇南では類例が見られない。

以上、簡単ではあるが、4遺跡のものについて主に器形の面から検討を行ってきた。大橋、西野田、宇南とも塩釜式期に包括されるものであり、本遺跡のものもまた近接した時期のものと考えられる。しかし、前に検討したように器種相互において、共通する点や、相違する点が認められ、塩釜式と一括されるものの中にも、その内容において差異が認められることは明らかである。そこで、まず、塩釜式の特徴をふり返り、さらに検討を加えてみたい。

塩釜式は、氏家和典氏によって編年された土師器の第Ⅰ型式で、その特徴は壺形土器、高坏形土器において顕著に表われるとされ、壺形土器では「口縁部中央外側に稜乃至複合口縁の形成される」ものとし、高坏形土器では「脚部が略々円錐台状を呈するもので、胸中央部には3個の窓を有している」としている。（氏家：1952）

ここで、前記4遺跡の壺形土器、高坏形土器に限ってみると、壺形土器においては各遺跡ともに編年で明らかにされた内容をもっているが、個々については、前述したような特徴を備えている。高坏形土器では、脚部が円錐台状を呈するものは、宇南を除く3遺跡にみられるが、留沼、西野田のものは脚部に窓をもっていない。

他の器種をも含めて総体的にみると、留沼におけるセットは、西野田における組み合わせから器台を除くすべての器種と強い類似性を示している。反面西野田に見られない坏Ⅰａ、Ⅱ類、甕Ⅱ類については大橋と、坏Ⅰａ類、甕Ⅲ類、甑Ⅰ類については宇南と類似性を示している。

ところで、氏家和典氏（氏家：1972）丹羽茂氏（丹羽他：1973）によって、塩釜式の細分が試みられている。

氏家氏は、壺形土器の検討から塩釜式の細分を試み、浮文系土器が塩釜式の中でも古い方に位置づけることは可能であるとしている。

また、丹羽氏は、大橋、西野田両遺跡の遺物を対比し、「高坏や器台に円窓がないこと、複合口縁で広口の大型壺の頚部に刻目のある隆帯がめぐっていない点は、塩釜式内部の新しい要素として理解しておきたい」としながら、「塩釜式の土師器の細分された姿と早急に結論づけけることは未だ無理がある。」と慎重な態度を示している。この背景には坏、甑等の器種の欠損を補うために堆積層の層理面出土に拾ける共伴関係を示す資料の援用があったためである。そこで、留沼の資料をも含めて、細分について触れてみたい。前にも述べたように、留沼のセットは、西野田のものと強い類似性を示している。そして、西野田に認められない坏Ⅰａ、Ⅱ類、壺Ⅱ類、甕Ⅰａ、Ⅱ、Ⅲ類、甑Ⅰ類等の器種は、丹羽氏の指摘する西野田における器種の欠損をある程度まで補うものと思われる。壺、高坏以外の器種では、甕において台付きのものや、

Ｓ字状口縁が認められないこと、体部が球形なものとは別に下膨らみのもの、やや楕円形に近くなるもの、鉢形のものとバラエティーがみられること、器面調整において、刷毛目ののちにヘラケズリが多用されることなどが、大橋には認められない特徴であり、西野田をも含めて新しい要素として理解しておきたい。

以上、細分について若干述べてみたが、対象とした遺跡数も少なく、今後の類似資料の増加を待って、更に検討を深めることが必要と思われる。

4. 遺構の年代と考察

1. 竪穴住居跡

出土遺物の検討から、竪穴住居跡の年代は古墳時代前期塩釜式期に比定することができる。県内で同時期の竪穴住居跡は、前述の大橋、西野田、宇南、塚ノ目遺跡や、名取市今熊野（宮城県教委：1973）、同市宮下（名取市教委：1975）、亘理町宮前（宮城県教委：1975）・小牛田町山前（小牛田町教委：1976）などの遺跡で検出されている。構造などについて若干の検討をしてみると、平面形は、大部分が方形を基調（西野田1、3、6住は円形基調）とし、規模は、一辺6m前後のものが多く、留沼のように一辺3.5m前後の小さい住居跡は、山前、宇南塚ノ目でわずかに認められる程度である。

床面は、前述したように2次にわたって認められている。第1次の床面は貼床を伴なうもので、宮前、西野田、大橋でも同様の例が検出されている。第2次の床面は、第1次と生活層上面を床面とするもので、床面上には炭化物が敷きつめられた状態で検出され、多くの土器や炭化材も認められている。廃絶された状況等から火災に曹遇したものと思われる。炭化物については東京大学理学部人類学教室。松谷暁子に灰像分析をお願いし、その結果として、床面上に敷きつめられたような状態で検出された炭化物、大部分が稲藁から成り立ち、その他に稲の籾殻とヨシの稈などが含まれているという興味深い報告をいただいている。壁面で観察された植物茎と思われたものも同様の植物であろう。

次に柱穴について考えてみる。最も多く見られるのが、住居の対角線上に4本配されるもので、山前、宮下、宮前などに類例が多い。西野田6住のように竪穴外に規則正しく配されるものもみられる。留沼のように全く検出されなかった例としては塚ノ目がある。いづれも規模の小さい住居である。留沼の場合、床面上の炭化材には柱と推定できるものもあり、柱穴の存在は十分考えられることである。残存壁高が約10cmしかないことから、西野田5住のように竪穴外にあったものが、河川の氾濫などにより削平を受けて消失した可彪性も考えられないわけではない。

貯蔵穴状ピットは、宮前、西野田、宮下で認められ、宮下の場合は各住居跡に不遍的に認め

られると報告されている。留沼のものは平面形が円形を呈しているが、他遺跡のものは長方形を呈するものが大部分である。さらに、留沼の貯蔵穴状ピットにおいては、第2次の床面使用時には、すでに埋まっていた可能性が、堆積土の状況から推定される。

2. 竪穴遺構

出土遺物から古墳時代前期塩釜式期に比定することができる。性格については調査時の失敗もあり、十分に検討し得ないが、平面形、規模などから住居跡の可能性も考えられる。

3. 焼土遺構

2基検出されている平面形は円形を呈し、規模は直径が1～1.5m、深さ20～25㎝である。底面および側面には焼け面が認められ、堆積土中には焼土や炭化物の混入が多い。

同様の遺構は、宮前･字南･宮下･金成町佐野・高清水町五輪C遺跡など多くの遺跡で検出されているが、性格・年代については不明とされているものが多い。本遺跡の第1焼土遺構の堆積土中からは、塩釜式期と考えられる土師器甕体部破片が出土しているが、当該時期のものかどうかは不明である。

4. 土壙

2基検出されている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.3～1.6m、短軸1～1.4m、深さ12～40㎝である。第2土壙の底面には炭化物が多く認められる。出土遺物がなく、年代・性格ついては不明である。

5. 溝

4本検出されている。第1・第4溝は基本層位の第Ⅳ層上面で第2･第3溝は基本層位の第Ⅳ層上面で確認されたものである。第1・第2溝は、調査区の南側をほぼ東西方向に並走している。第2溝の確認されたⅣ層上面からは竪穴住居跡など遺構の大部分が確認されており、しかも、第2溝を境に南側からは遺物の出土が皆無であることなどから、第2溝は、集落を区画された溝で、浅く途中で途切れている。遺物は第3溝の堆積土中から土師器甕・土錘が出土している。第1・第4溝については、出土遺物もなく時期は不明である。

6. 第1～第4地点

基本層位の第Ⅳ層上面および第Ⅴ層上面で確認された遺物が集中して発見される地点で、わずかにくぼみ状を呈し、底面には炭化物の分布が認められる。検出された遺物は完形または完形に近いものが多く、器面調整等からも磨減は少なく、原位置を移動していないものと思われる。したがって、これらの地点を遺構考えるに至ったわけであるが、他に類例もなく、どのような性格をもつものかは、今後の類例の増加をまって検討したい。

Ⅴ　ま　と　め

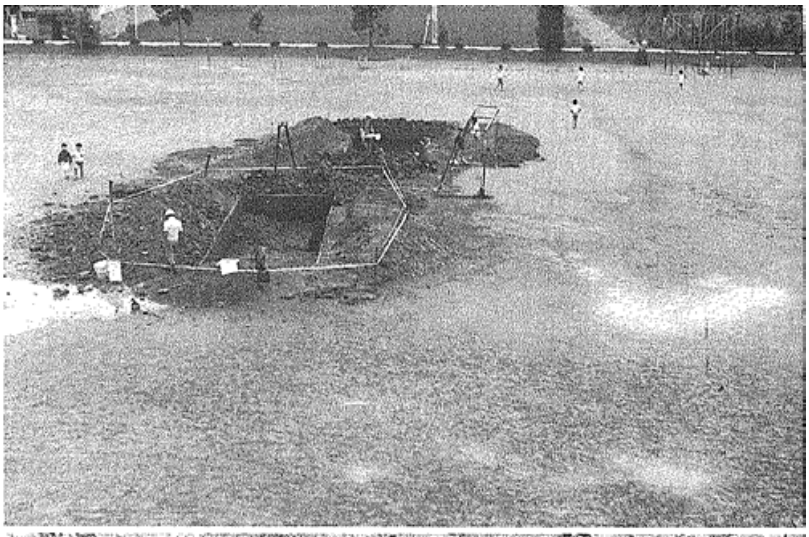
1. 留沼遺跡は江合川によって形成された氾濫原および自然堤防上に立地している。
2. 検出された遺構としては、竪穴住居跡1軒、竪穴遺構1基、焼土遺構2基、土壙2基、溝4本、くぼみ状を呈する第～第4地点、遺物包含層がある。
3. 出土遺物には、土師器、小形手捏ね土器、土錘、炭化木製品がある。土師器は古墳時代前期塩釜式に比定されるものであり、他の遺物についても同時期のものと思われる。
4. 第2溝を境として、南側には同時期の遺構、遺物の存在がなく、この溝は集落を区画する意味あいをもつものと推定される。
5. 竪穴住居跡床面から採取された灰化物の分析から、床面に稲藁を敷いていたことが想定され、当時、稲の株刈りが行なわれていたことが指摘できる。
6. 一遺跡の広がりは、北及び東西に延びる可能性が考えられる。

引用・参考文献(五十音順)

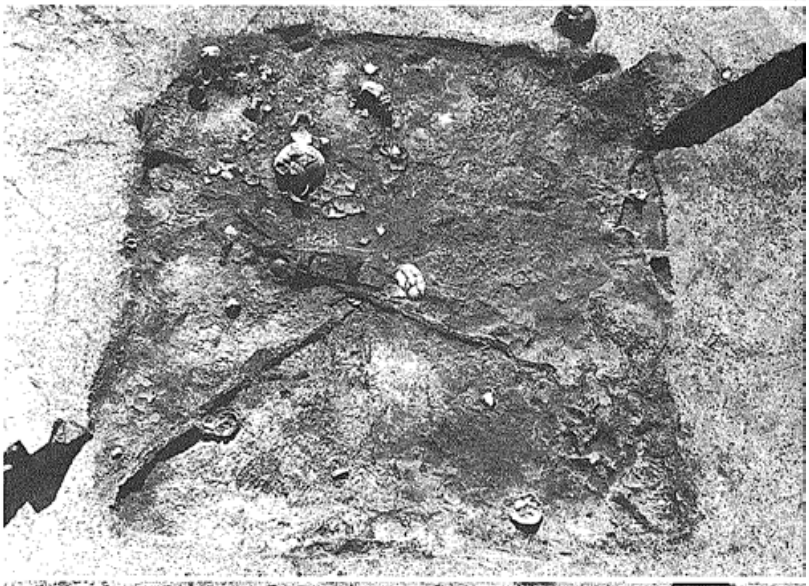
伊　東　　信　雄（1972）：「東北石製模造品出土遺跡」『神道考古学講座2』
上　野　　純　司（1977）：「南関東における古代土師器編年試論」『史観』9
氏　家　　和　典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
〃　　〃（1972）：「南奥羽地域における古代土師器をめぐって」『北奥古代文化』第4号
氏家和典・大場恒一（1954）：「宮城県高倉村引田出土の土師器」『歴史』第8輯
小 野 寺 祥 一 郎（1979）：「五輪C遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第61集
金 井 塚 ・小 出（1971）：「シンポジウム五領式土器について」『台地研究』№19
経済企画庁総合開発局（1972）：「土地分類図」（宮城県縮尺1：200,000）
小牛田町教育委員会（1976）：『山前遺跡』
斎　藤　　吉　弘（1979）：「宇南遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第59集
佐 佐 木　　忠 雄（1968）：『古川市史上巻』古川市教育委員会
〃　　〃（1978）：「初期古代東北の研究」
白　鳥　・　加　藤（1974）：「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ－岩切鴻ノ巣遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第35集
仙台市教育委員会（1976）：「仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第10集
〃　　（1978）：「南小泉遺跡－範囲確認調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第13集
玉　川　　一　郎（1978）：「三貫地－田町場A地点調査報告書」『新地町埋蔵文化調査報告書』
名取市教育委員会（1975）：「宮下遺跡」『名取市文化財調査報告書』第1集
〃　　（1979）：「十三塚遺跡」『名取市文化財調査報告書』第6集
丹　羽　　茂　他（1974）：「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ－西野田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第35集
原 川　　雄 二 他（1977）：『夕日長者、朝日長者遺跡調査概報』いわき市教育委員会
平　沢　・　手　塚（1980）：「東北自動車道関係遺跡発調査報告書第2集－佐野遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第63集
藤　沼　　邦　彦（1971）：「東北新幹線関係遺跡発調査概報（刈田郡蔵王地区）－大崎遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集
〃　　〃（〃）：　〃　　〃　－大山遺跡」
宮城県教育委員会（1973）：「金剛寺貝塚今熊野遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第33集
〃　　（1975）：「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第38集
〃　　（〃）：「宮城県文化財発掘調査略報（48.49年度分）―留沼遺跡1次調査」『宮城県文化財調査報告書』第40集
〃　　（1976）：「宮城県文化財発掘調査略報（50年度分）－留沼遺跡2次」『宮城県文化財調査報告書』第42集
〃　　（〃）：「宮城県遺跡地図・地名表『宮城県文化財調査報告書』第46集
宅　宗　議　（1979）：郷土資料（考古）古川市図書館

図　　版

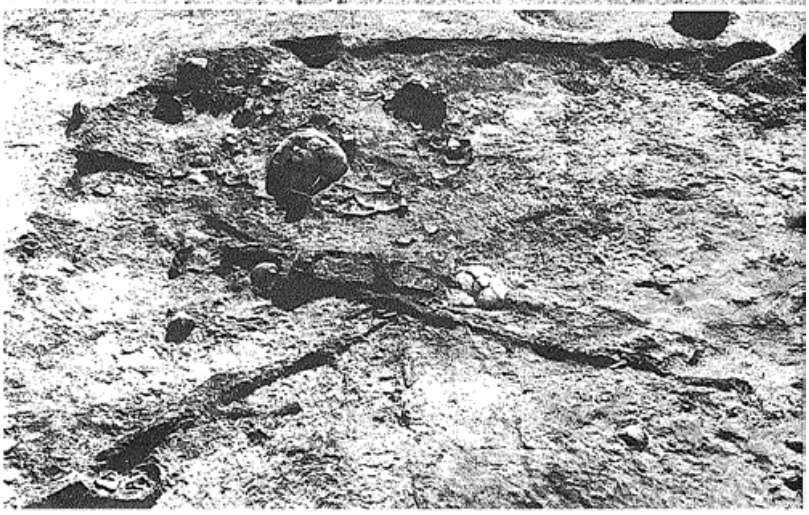
第１次調査



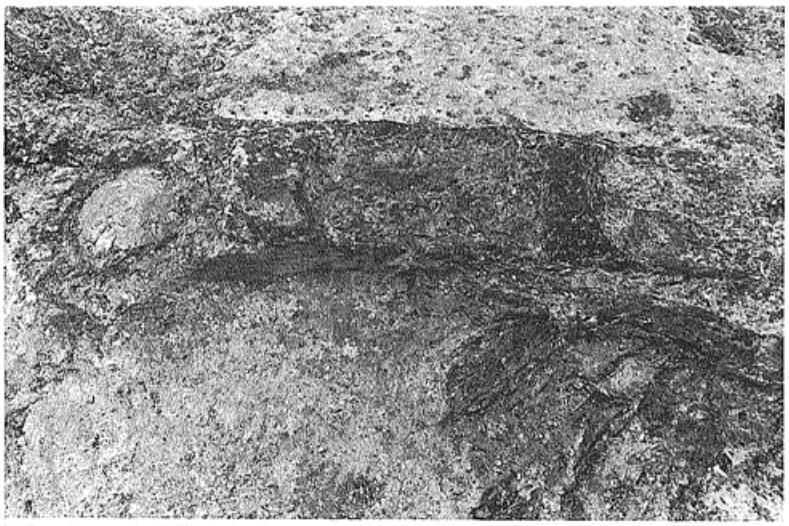
第１住居跡



同上部分

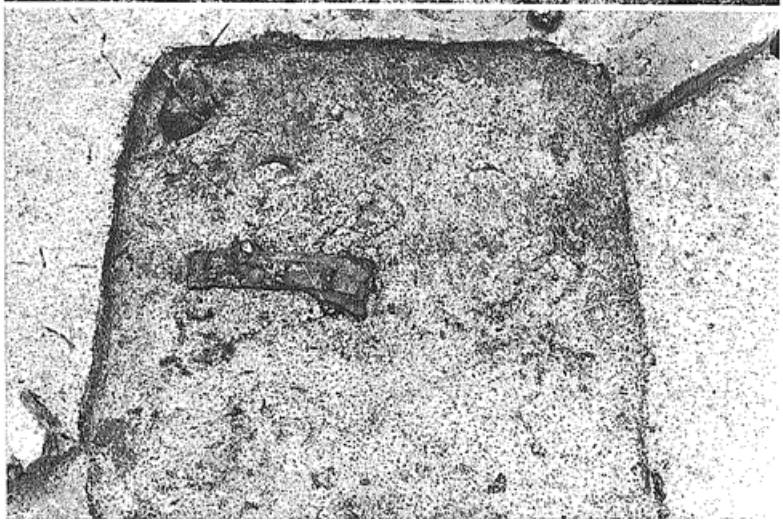


図版１



第１住居跡出土
炭化木製品

第１住居跡
壁、床面の状況

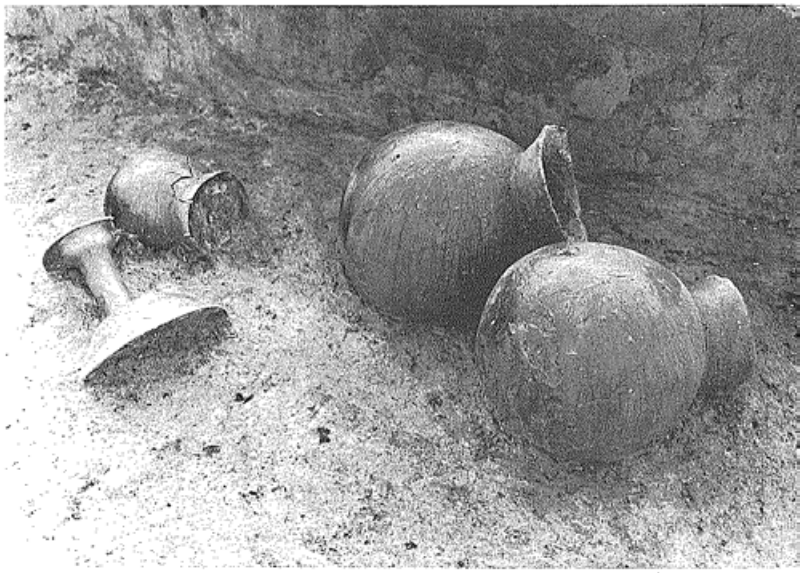


第１住居跡
生活層除去後の状況

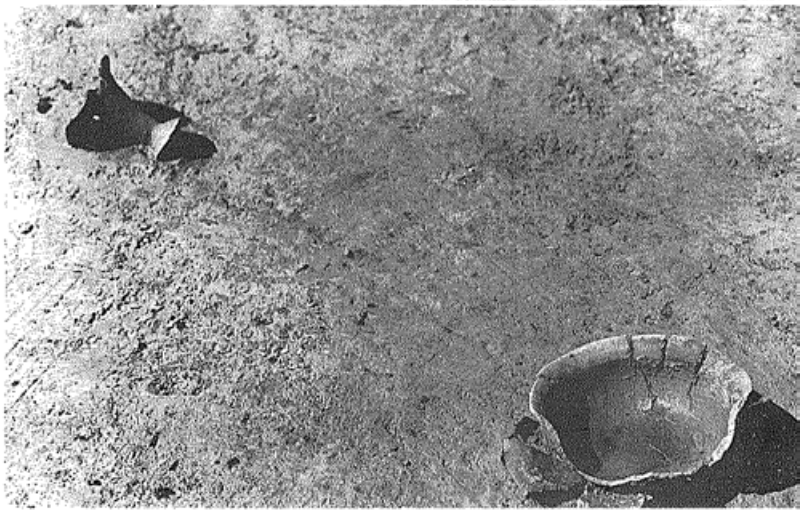
図版２

第２地点出土遺物

第３地点出土遺物



第４地点出土遺物



図版３

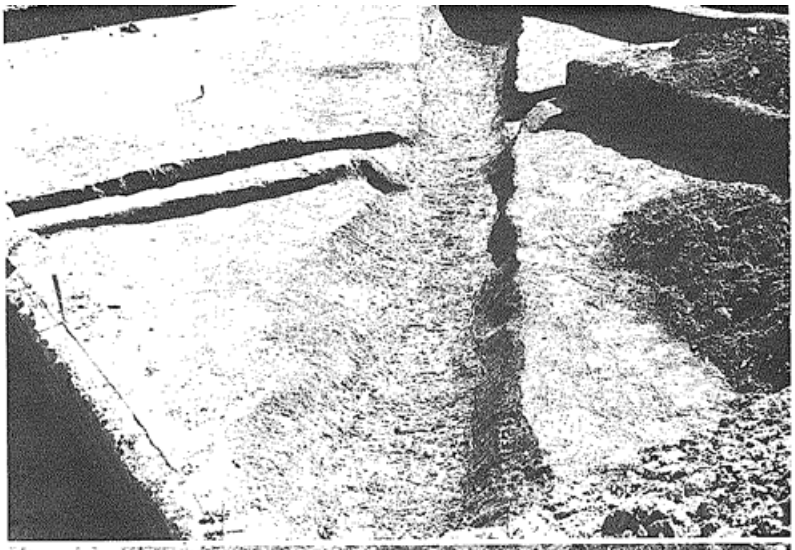
竪穴遺構出土遺物

同　上

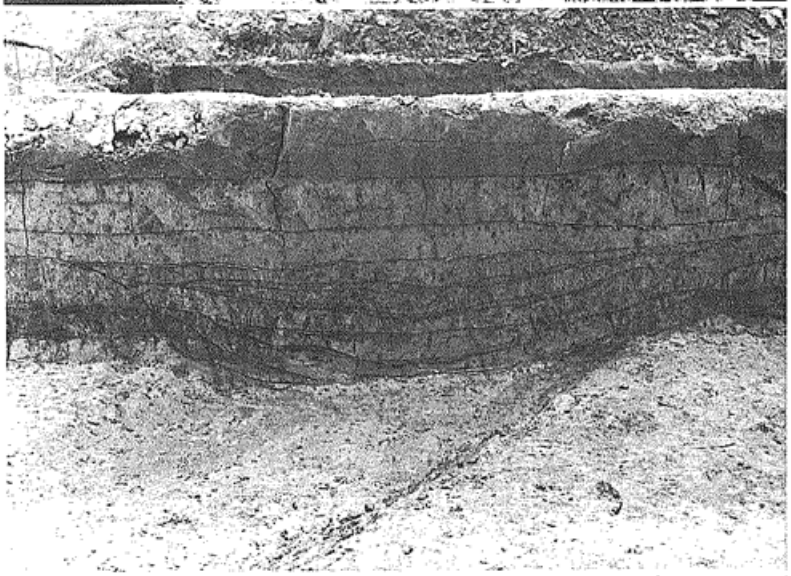
第１焼土遺構

図版４

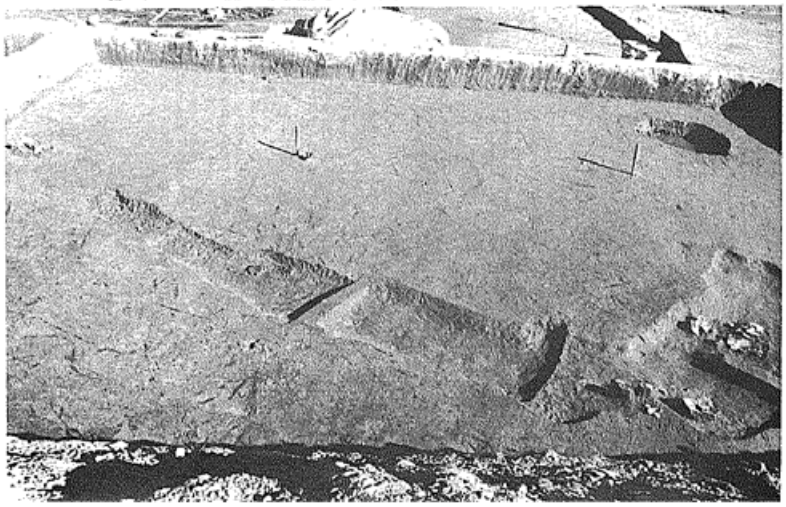
第２溝



同上堆積土



第３溝



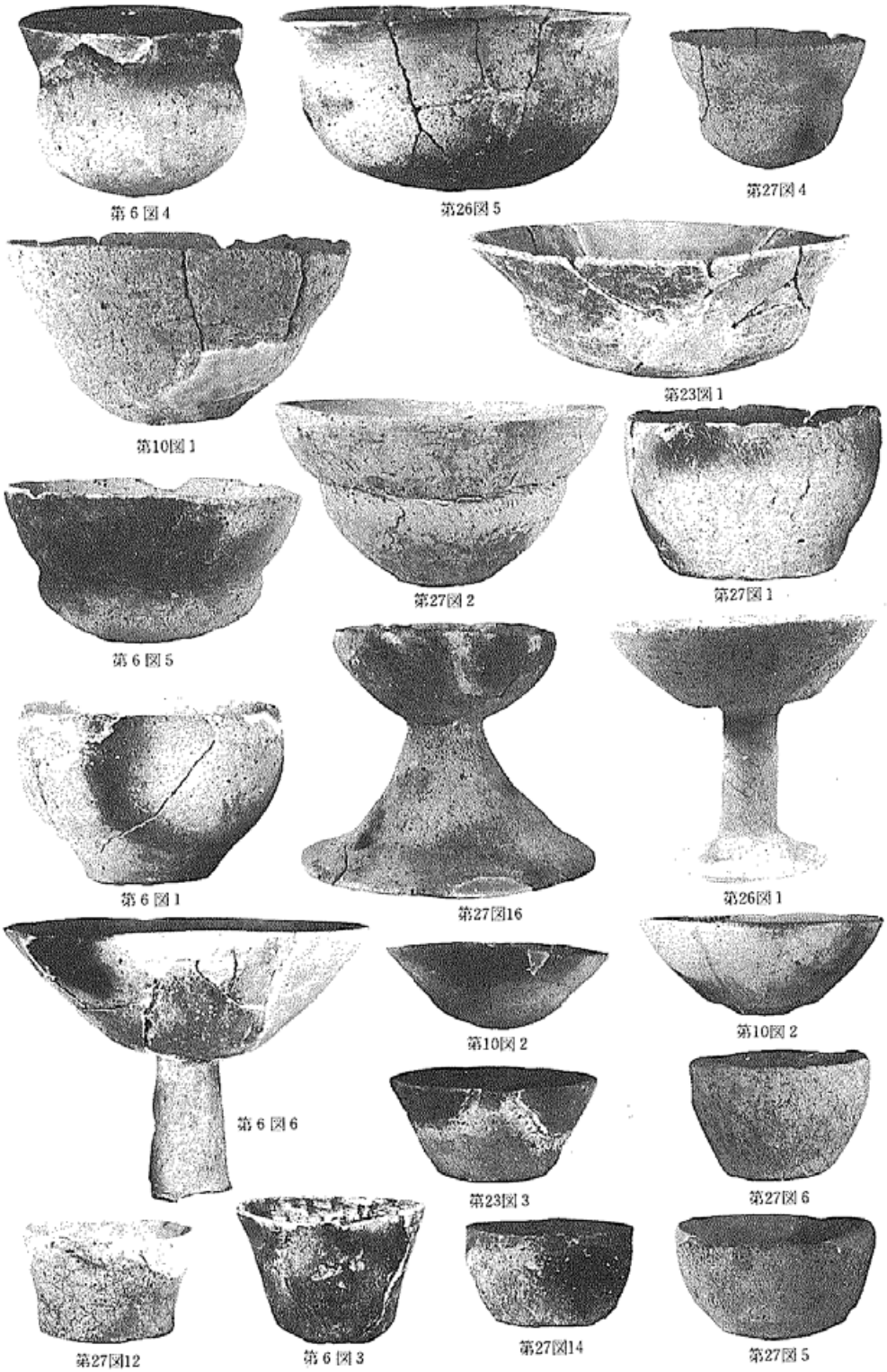
図版５

第２焼土遺構断面

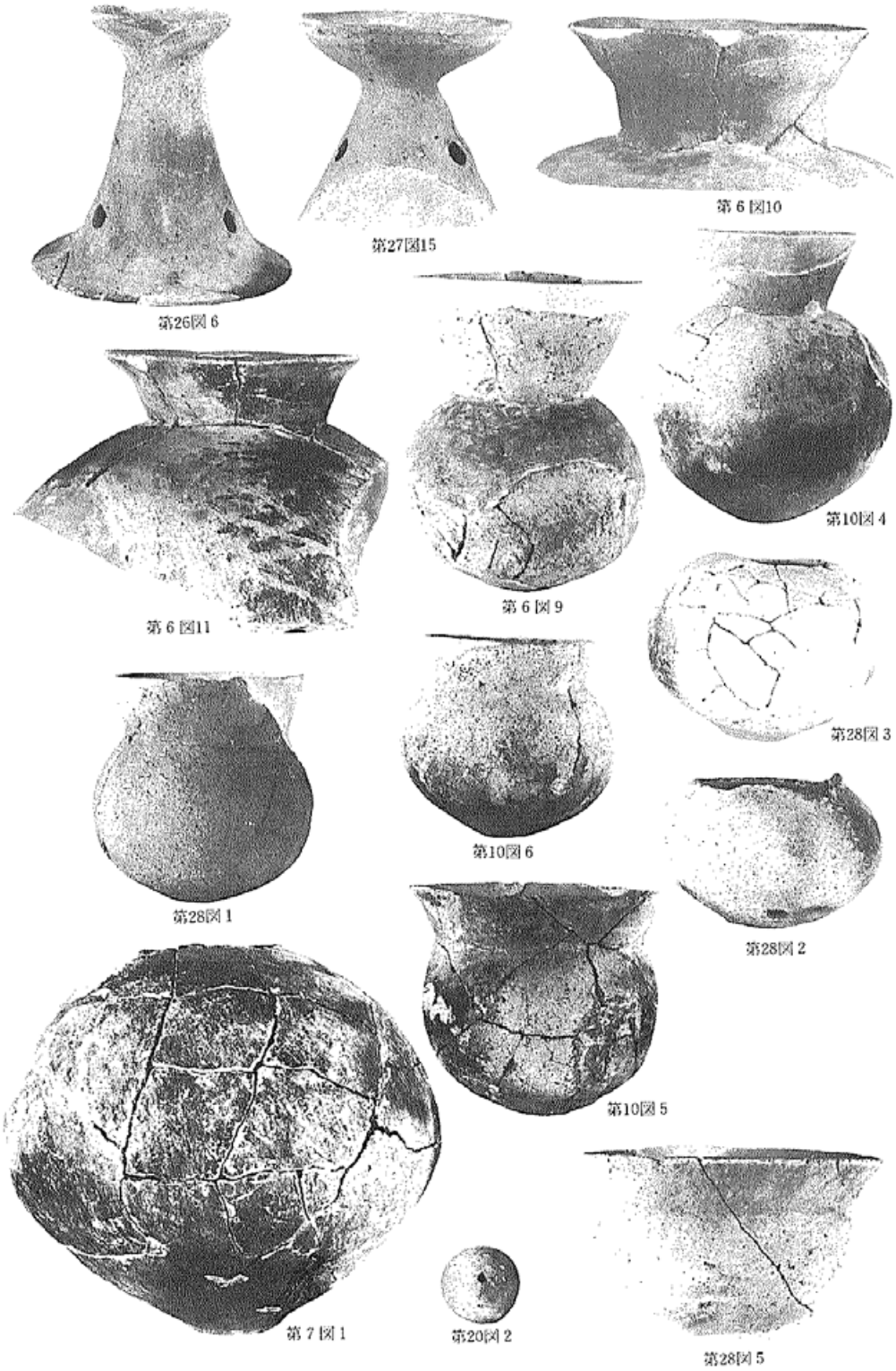
第２焼土遺構

調査区全景

図版６


第6図4
第26図5
第27図4
第10図1
第23図1
第27図2
第27図1
第6図5
第6図1
第27図16
第26図1
第10図2
第10図2
第6図6
第23図3
第27図6
第27図12
第6図3
第27図14
第27図5

図版7


第26図 6
第27図15
第 6 図10
第10図 4
第 6 図11
第 6 図 9
第28図 3
第10図 6
第28図 1
第28図 2
第10図 5
第 7 図 1
第20図 2
第28図 5

図版 8

第28図 6

第26図 2

第23図 4

第20図 1

第29図 7

第 7 図 2

第11図10

第11図 9

第29図12

第12図18

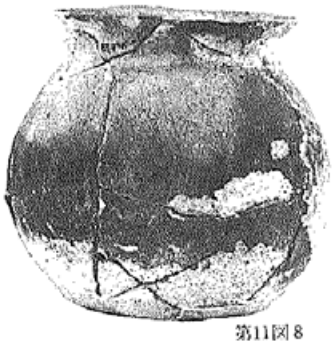
第29図10

第29図 8

図版９

第11図11

第12図15


第11図8

第11図12

第12図16

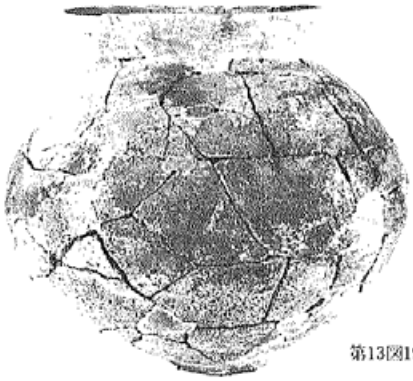
第23図5

第11図12

第13図21

図版10

第29図 9


第13図19

第12図13

第26図 4

第13図20

第26図 3-

第30図13

第13図22

図版11